

川柳塔

創刊大正十三年 通卷一〇七五号
平成二十八年十二月一日発行（前月一日発行）
昭和四十一年一月一日発行（前月一日発行）



日川協加盟

No.1075

十二月号

第五回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第五回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟 「友」 「長 島 敏 子(ふうすと川柳社)」「高 瀬 霜 石(川柳塔社)」

「書 ぐ」 「平 田 朝 子(川柳噴煙吟社)」

「植 野 美 津 江(番傘川柳本社)」

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句要領 投句料 一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切 平成二十九年二月二十日(月) 消印有効

送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX (〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

寒中見舞募集

○ 本誌 平成29年2月号掲載
○ 締切 12月20日



川柳塔社事務所 宛

平成29年 本社句会 開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時 間	会 場
1月6日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
2月7日(火)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
3月7日(火)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
4月10日(月)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
5月8日(月)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
6月6日(火)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
7月7日(金)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
8月7日(月)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
9月7日(木)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
10月7日(土)	同人総会 9:30~11:00	生駒 3F
第23回 川柳塔まつり	句 会 11:00~17:00	金剛(中西) 4F
	懇親宴 17:00~20:00	葛城(全) 3F
11月7日(火)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F
12月7日(木)	13:00~17:00	金剛の間(東) 4F

一歩出ずれば

小島 蘭 幸

棕樹山大聖勝軍寺は、ＪＲ八尾駅近くの踏切を渡って、徒歩10分程の所にあります。

一歩出ずれば我れ旅人となる心 西尾 栞

西尾栞先生の句碑は、勝軍寺山門の右手にあります。私は栞先生の句碑に一礼して、第22回川柳塔まつりが無事終了したことから、明日は高野山大霊園で川柳塔碑合祀祭法要ですとご報告させて頂きました。そしてふっと、勝軍寺と栞先生、句碑とのご縁が知りたくなりましたので住職の奥さまに尋ねてみました。あいにく住職がご不在でしたので、はつきりした事は分かりませんでした。が、先代、先々代とのご縁ではと言うことでした。参拝をして境内を歩いていると一人の男性が立っておられましたので、お願いして栞先生の句碑と一緒に写真を一枚撮ることが出来ました。

ホテルは、なんばグランド花月の近くでしたので、

蓬萊本館でひとり夕食を楽しみました。ここは河内天笑名誉主幹の長女、陽子さんが、まだ学生だった頃に案内して頂いて、私の家族と一緒に食事をしたところでした。

合祀祭風は師の声兄の声

蘭 幸

11月12日、高野山大霊園での川柳塔碑合祀祭法要は、参列者14名で執り行いました。私は…今日は、穏やかな小春日和になりました。川柳塔碑に新しく合祀されました八名の同人の皆様安らかに眠り下さい。同人を失うことはとても悲しいことですが、私達には川柳塔碑があります。毎年こうして川柳塔碑合祀祭法要が出来ますことを同人の一人として誇りに思います…と挨拶をさせて頂きました。

法要終了後、レストランで昼食、新家完司理事長の献杯に続いて、板尾岳人相談役が川柳塔碑建立の経緯について語られました。川柳塔碑は平成元年11月12日建立、大霊園の敷地は一人の同人の寄贈によるものとの事でした。当時の主幹は西尾栞先生でした。昼食後散会。帰りの電車の中で、暇を閉じていると、この二日間でお世話になった方達のお顔がフラッシュバックのように浮かんできました。ありがとうございました。

座右の句

手と足をもいだ丸太にしてかへし

(鶴 彬)

私の句

本物の息子が騙す筈がない

磯部 義雄

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「湖北・冬来たる」

■巻頭言 一歩出ずれば

波多野五楽庵句碑建立記

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌⁽¹⁴⁾

自選集

■ショートエッセイ

猫との出会い

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞⁽⁵⁸⁾

俳風柳多留一二篇研究 42

橋高薫風句抄

英語 de Senryu⁽⁵⁰⁾

愛染帖

檸檬抄「無心」

小島 蘭 幸 … (1)

福 士 慕 情 … (2)

小島 蘭 幸 選 … (4)

木津 川 計 … (45)

雪 本 珠 子 … (46)

西出 楓 楽 選 … (49)

麻 生 路 郎 … (50)

吉村 侑 久 代 … (74)

新家 完 司 選 … (75)

北野 哲 男・安土 理 恵 共 選 … (80)

波多野五楽庵句碑建立記

福 士 慕 情

平成二十八年十月十五日、川柳塔みちのくの創立者であり、川柳塔社副主幹、県川柳連盟理事長、全日本川柳協会常任幹事、NHK学園講師を歴任、県内外の川柳大会の選者として活躍された波多野五楽庵先生の句碑が、菩提寺である石神山勝岳院の一角に建立された。ご住職が快く場所を提供して下さいたのである。

ここ何日か愚図ついていた天氣が除幕式を待っていたかのように見事に晴れ上がり、岩木山も祝福するかのように西方に雄姿を現していた。

先生の功績を讀えて来年、八十八歳の記念にと考えていた句碑建立が、昨年、りんご誌上大会の謝選の際、体調が優れなかったことから急遽一年前倒ししたにも拘らず、二ヶ月を待たず八月十七日、先生は旅立たれてしまった。建立を楽しみにしていたのに残念でなりません。

生前、句碑の句をお願いしたところ、

追悼 宮園射月芳さん

八木千代 …… (83)

一路集「ドライ」

藤井宏造選 …… (84)

「積む」

山本昌代選 …… (85)

初歩教室「平均」

山口光久 …… (86)

川柳塔鑑賞

鈴木いさお …… (88)

水煙抄鑑賞

足立 茂 …… (90)

せんりゅう飛行船⁷²

新家完司 …… (91)

『麻生路郎読本』余滴⁽³⁸⁾

乗原道夫 …… (92)

インスピレーション・ナビ 印象吟

大西泰世 …… (94)

十一月本社句会

岩崎真里子 …… (100)

句会燦燦

岩崎真里子 …… (101)

各地柳壇(佳句地十選／水野黒兎・米澤俣子)

十二月各地句会案内 …… (104)

高野山川柳塔碑合祀報告

柳界展望 …… (116)

■編集後記(ひとこと／宮崎シマ子)

朱夏・勝弘 …… (117)

朱夏・勝弘 …… (118)

座右の句

虹を追う心が渴かないように

(保州)

私の句

かたつむりわが身に合うた荷を背負う 石田 ひろ子

皆さんで選んで下さいとのこと、波多野五楽庵句集『われも旅ゆくひとりなり』から最終的には顧問の斉藤嘉氏と十句を厳選、先生と長い親交のあった十二名の方に選をさせていただいた結果、「そして花火の音が静かになってゆく」が選句されました。先生の華やかな人生が次第に遠ざかってゆくという哀感に満ちた「五楽庵調」の作品だと思います。

除幕式は白布を十名の同人が紐を引くと書家であり、同人でもある肥後黄娥(和香子)氏の墨痕鮮やかな文字が浮かび出ると、三十名の参会者から歓声があがり先生も一緒に微笑んでおられるようでした。「皆様の厚いご支援を賜り感謝に堪えません、川柳塔みちのくは先生の教えを守り川柳を続けて参ります」と挨拶のあと、佐々木一彦住職により開眼式の読経が厳かに行われ、最後に先生の次男亨氏が遺影を持参「受け狙いや賞狙いを嫌い、真剣に楽しく川柳に取り組んだ五楽庵という人間を記憶にとどめて欲しい」と熱く語られた。

句碑は高さ120センチ、幅70センチ、奥行き50センチ、白御影石である。



小島蘭幸選

弘前市 福士慕情

妻よ許せ介護はプロの手に移す

妻入院同じ景色を見られない

家中の何所にも妻の影がある

身体拘束途惑う妻がいる

縋る瞳に連れて帰ろうかと思う

妻入院ほんとにこれでよかったか

大阪市 津村志華子

此の先は成るがままよと腰を据え

想定外の長寿わたしの半生記

ハルカスで見る夕焼けのミステリー

あの頃のように弾けるクラス会

シャボン玉飛ばす息ならまだ続く

ひしひしと唯ひしひしと老いるとは

大阪市 榎本日の出

顔よりも鍛えています足の裏

老人の恋はいつでも片想い

歳と言う壁にぶつかり一休み

口を出しお金も出してへそ曲げる

五七五で頭の中を大掃除

寝た振りがとつてもうまい地獄耳

倉吉市 牧野芳光

掘り下げてみると普通の人だった

好奇心ドローンに乗せて伸びてくる

文芸の道に迷路や袋小路

牛の目はどんな緑を見ているか

消火器を我が家の家計にも欲しい

いい話秘密めかして解き放す

岡山市 丹下凱夫

「水戸黄門」安心して観ています

ワンカップと駄弁ひとり旅です

鯛雲大きな夢を語ろうよ

一昨日のことは覚えておりません

本心をなかなかあかさない達磨

三十も若かったら壇蜜をゲット

和歌山市 木本朱夏

亡きひとへ届け桔梗の濃紫

母方の里から今も届く秋

時々脳にびっくり水をやる

読まないまま捨てられてゆく柳誌

母さんはカボチャのように居座って

祭りあとの寂しさならば雲に訊け

鳥取県 斉尾くにこ

来年の相棒を買う手帳買う

盛り上がる話題探して窓を見る

傷つけたもつと私が傷ついた

ビールかけパンザイそして次の朝

あちこちでケンカやめろとケンカする

妻の役生前退位できますか

吹田市 山本希久子

台風に耐えたりんごの底光り

ひれ伏すばかり運命に現実

難問と向き合う西目射す窓辺

まつり済んだようやく眠り深くなる

副作用に耐えて命の花咲かす

美しく重なる歳月のぬり絵

桜井市 安土理恵

枯れてゆく諸行無情のこの世です

こぼれ萩役目は終えたようですね

はじけない柘榴哀しい女だね

ちあきなおみと秋霖の長い午後

守銭奴の気分空瓶に小銭

筋トレも脳トレもいや眠らせて

熊本市 杉野羅天

合い物がお払い箱になる気象

霧の露天 下界のことを忘れさせ

山蒼く朱く去り行く我に問い

快食苦便おなか引つ込む理由がない

最終バスほろりと落ちた厚化粧

雲一つままにならない人の知恵

弘前市 高瀬霜石

手袋はしないふたりで歩く時

ギャンブルはセーフ 賭博はアウトやでえ

ラマダンはずきつとお腹の大掃除

年金は貰うじゃないよ下ろすだよ

ローソクはご法度 新築のお寺

愛犬も隣に眠る師の墓石

檀原市 居谷真理子

壁の耳に素敵な嘘を吹き込んだ

悲しみを集め溺れるのが好み

黄色い灯シャッター街の古本屋

病名を一緒に聞いてくれる人

ちちろ虫あれも覚悟の声だろう

無為の日も真面目に打っている鼓動

札幌市 三浦 強 一

数学に弱い小銭溜めている
見回してなるほど日本長寿国
あんた誰その内妻に言われそう
お互いに惚けて気が合う共白髪
マイナンバーカードを下げて徘徊す
あの世への道に迷って生き返る

大阪市 谷 口 義

みどり色になるまで魂を磨く
一時停止のままで一日が終る
くずれ梅一箱食べて夏終る
デイサービスなかつたが基会所があつた
一瞬で見破る友だちの視線
水に映っている時はみどり色だった

篠山市 酒 井 真 由

地の恵み静かにみちる津波あと
やさしさを配るひと募ります 寓
男ばかり裸ばかりの淋しかり
われらいつ逢はむはじける鳳仙花
お元氣ですか丹波の栗を送ります
手紙に封風のさやけき夜となりぬ

尼崎市 山 田 耕 治

神様はいたよ落としたパス届く
ごころうさま湿布の匂しています
点滴の間も指を折っている

おやすみのメール笑っている絵文字
別別にじじとばばからお小遣
感嘆符ひとつ返ってくるメール

沖縄県 森 山 文 切

親だけに届く四歳児の手紙
背番号10の原発作業員
尖兵の温もりだけが残る椅子
悲しげな学芸会の猫である
八時間以上はしない取り調べ
小鼻だけかさついている試験官

大阪府 栃 尾 奏 子

鐘は鳴る嘘を見透かすかのように
傷口に男たやすく触れたがる
火の海も氷河もあつた愛だった
告白も別れも星が降っていた
最愛の別れに静かなる脱皮
万物にあまねく雪は降りつもる

堺市 栗 原 道 夫

電柱に似合う葬儀の立看板
電柱に防犯カメラ似合わない
電柱を数えることはすぐ飽きる
電柱がクククと笑うと怖い
少し傾いた電柱の健氣
とても親切な電柱君でした

松山市 宮尾 みのり

感性の豊かさテストには無縁
孫育てビントの合わせ事ばかり
前向いて行きたし膝を撫でながら
本性が見えてくるのめかなしいね

跡取りは博士老舗が店を閉め
しみみりと話せる友に背を押され

西宮市 足立 茂

湯煙に妻とつづいた山の幸

名曲でリフレッシュする錆びた脳
のびのびと歩くインドの牛の群れ

創業者の写真が叱る大赤字

目立つなとまた叱られた馬の脚
白壁のペンペン草が知る事情

羽曳野市 徳山 みつこ

とと姉が昭和を鮮やかにひろげ
いわし雲へ私のくらし干している
忙しい母を喜び子は去った

愚痴吐いた口へレモンの飴一つ
うっかりを追わず三分の瞑想
再稼働へ警告だろか阿蘇噴火

寝屋川市 籠島 恵子

シナモンたつぷり秋のトースト
晴天へ誘われ日傘くるくるり
その他もろもろついて行けない水たまり

若いつて地球の裏を闊歩する
買物は一人ランチもして帰る
ラ・フランス鳥獣戯画の中にいる

大阪市 小谷 集一

親切と思ひ遣りとの微妙な差
朝ごはん美味しいけれど腹八分

二流だが誰にも負ける気がしない
愚痴言わぬ妻の心を思い遣る

生きている幸せ噛めばホロ苦し
花よりも咲かせた土を褒めてやる

豊中市 松尾 美智代

夫と行く海外の旅久し振り
帰るまで元気でいられます様に

お仏壇に留守よろしくと手を合わす
スニーカース大きい方は私です

子供達の気持も入れるポシェットに
やっと出番来た十年のバスポート

河内長野市 植村 崑代

母の昼寝が長生きだったのね

出来る時にする老いては何にも出来ぬ
長生きはさびしい何も出来なくなる

第二のスタートは簡単にはいかぬ
アホになることも大事だよお父さん
ほんとは皆さみしいんだショートステイ

東かがわ市 川崎 ひかり

西予市 黒田 茂代

わくわくの種を見つけた喫茶店
それからの話小骨を抜いておく
少しづつひとりサイズに慣れてくる
ほっこりと心頂くお裾分け
衣替え今秋夫はもう居ない

松山市 栗田 忠士

高知県 小澤 幸泉

迷いつつたどった道の薄明かり
カーナビの声が私を唆す
ふと覚めて妻の寝息を聞いている
携えて今日も二人の四分音符
秋空へ心の蓋を開け放つ

松山市 古手川 光

唐津市 坂本 蜂朗

適当に書きなと白紙領収書
物忘れだけは誰にも負けません
病院も施設も安心出来ぬ世に
人生をリセットしたい消去キ
蛙冬眠人はせかせか年の暮れ

大洲市 中居 善信

唐津市 山口 高明

余所の世界は知らぬ畑打つ草を刈る
芸のない僕は一人で飲んでいる
深酔いでこけたくらいの話です
ポックリ死僕も持つてゐる不整脈
クッションが硬い礼拝堂の椅子

ページ繰る夜の静かに更けて秋
覚束なくなつた自分を探す旅
冷静に聞いているのは第三者
修業と思つておこう二時間待たされる
うふふっと笑えるような句が欲しい
友情の便りにそえて梨届く
戦争という二文字が消え浮かぶ
金運はとおい子宝恵まれる
星影のワルツにのせて亡友来る
抱き合つてののしりあつて離れない
焼き秋刀魚香り新米てんこ盛り
三度目の手術で覚悟らしきもの
闇の中趣味の明りを灯し往く
徘徊と見られぬように歩調取る
昔話相手は瘦せた肥後守
室蘭の夜景ながめて晩餐会
片道の切符で着いた東尋坊
当選の為でも嫌な貶し合い
こして来た淑女仲間の匂いせず
山の日を作り遭難ふやす気か

熊本県 岩切康子

弘前市 浅田隆樹

これが下見行先変える事にする
觀光化原野懐かしし立つ

優等生ばかりメロンの選果場
順調に足腰弱る物忘る

台風逸れ棟のシートが嬉しそう
断捨離の機会貰った震災だ

酒二合もつと飲みたい虫の声
タクシーがなかなか来ない満月だ

亡母の真似縫針の錆取っている

台風が芝目を読んでやって来る

札幌市 小沢淳

弘前市 稲見則彦

空洞化する頭脳もふところも
整形は出来ても性格変えれない

観ないのに録画の癖がおらない
長電話ほとほと困るまた後で

カツ丼を妻と仲よく半ぶんこ

到来の銘酒チビチビ句を捻る

津軽弁も川柳詠むと標準語
長生きに薬効並みのウォーキング

耐えているとも言えない妻の前
正論に辿りつけないもどかしさ

青森県 松山芳生

弘前市 岡本花匠

バーゲンのチラシが親展で届く

一目惚れ苦難楽笑今があり

浄土へはマーチの曲で渡りたい

医師信じ命拾いの妻五年

ポケットに我慢の鬼を飼っている

地味な道こなし人生悔いがない

輪廻転生 星に託して逝くつもり

ストレッツチ背筋すっきり若返る

泣いてくるほらブランコも泣いている

ふれあいてここも和みケア感謝

黒石市 相馬一花

弘前市 今愁女

スタートでわざと遅れて行くゆとり

Wカップ佳境ニッポンニッポン叫ぶのみ

忠告を聞かずメタボで星となり

積ん読が時間待ちする秋夜長

賽銭が不足で神が知らんふり

木守柿人に残して熊去りぬ

野菜高値それでも雑草踏みつける

枳殻が黄金の実をば零したり

りんご二個皮ごと食べて長生す

巡りくる日本の四季よ ありがとう

弘前市 高橋 洋子

肩書きが取れた名刺の平らかさ
遠慮ない仲でも守る車間距離
自動運転我が身任せる恐怖心
アラームは通年六時の律義者
写メールで飛んで来ました故郷^{きよ}の秋

弘前市 須郷 井蛙

孫の齢数えてK点守り抜く
ゴミ置場監視が光る元兵士
箸一本ルールがあつた膳の位置
嫁ぐ娘に母が持たした浮袋
一人ッ子玩具の海に溺れそう

さいたま市 星野 育子

卓袱台で身に付いた食事マナー
社交辞令も言い方で温もり
試食して迷った挙句仁義買い
都の好きなノリ弁にもう飽きた知事
永田町だけの常識非常識

東京都 川本 真理子

人物は入れ替わりつつまた祭り
ピエロの絵モデルはむろん僕である
犬の輪に入れぬ犬をそつと撫で
子の居ぬ部屋めぐりに入るカレンダー
定点にて幸せの観察日記

横浜市 菊地 政勝

やり残しあるから迎えお断り
都議会が国より高い視聴率
やらせだと見つけていますドキュメント
介護する方がやっぱり幸せだ
人柄が出る解説の依怙最良

富山市 島 ひかる

屑籠の中がザワザワしてならぬ
存続も廃棄も金の要るモンジュ
鉋毒を流したこともあつた川
鮎も人も神通川で死んだ日々
人間の知恵で救っている地球

可見市 板山 まみ子

人生をスマホに委ねただ夢中
身の程を知った重たい登山靴
秀才も八十路を前にただの人
長雨に高い野菜も仕方なく
手が届く範囲の物は知れている

愛知県 早川 遡行

信号無視しても大して変わりない
酒癖がよくて預かるルームキー
曼珠沙華炎えて釣人もういない
運転はまだ大丈夫モノの池
思い切り笑って過去を忘れよう

大山市 金子 美千代

女子会の自称熟女がはち切れる
くしゃみにも個性いつものリズムなり
お気遣いご無用ですと言われても
半額のお試し期間乗ってみる
素通りの台風三度目の油断

大山市 関 本 かつ子

反抗期通過か孫の大あくび
白熊の親子が暮らせない地球
先頭を走って反則の切符
孫からの値札も付いた贈物
軍服の父イケメンで星二つ

京都市 清 水 英 旺

がん病棟一期一会の四人部屋
病室に川柳塔と周五郎
懸命に生きてる蟬に教えられ
一日の命を終えた朝顔よ
国民に国捨てさせる重い罪

京都市 藤 井 文 代

薬に酒お世辞にもある副作用
二回曲がればここがどこかは解らない
難聴でも聞こえるんです褒め言葉
失言の後で時々かぶる水
時間だけ守れば気楽バスツアー

京都市 榎 本 宏 子

もみじ盛り禅寺の僧慈善鍋
帰ってこぬあの世で彼女出来たらし
長編に挑戦不眠症治る
フリーター決心をした子の寝顔
オゾン浴びに行ったつもりが花粉症

京都市 三 宅 満 子

案山子より流行^{はやり}遅れの服着てる
誕生日今年も一人飲むビール
帰ってからネットで注文旅土産
小池さんお衣裳替えが忙しい
台風は右往左往のスケジュール

長岡京市 山 田 葉 子

疑いが消えて病名付けられる
静かすぎる池だ小石を投げてみる
差し迫ったところからまずは手を付ける
火祭りに男の匂い響き合う
深い懷君の迷路が出られない

八幡市 今 井 万 紗 子

いい日一日明日履く靴は決めてある
あなたとならなかつたこれからも
臥す妻にことごと煮込む三分粥
大所帯ドタバタ喜劇泣き笑い
行間からはみ出る程の文もらう

大阪府 桑 田 ゆきの

天辺で鵬啼き柿の食べ頃に
一つ灯の人住む証秋深し
紅葉濃く挽歌奏でる滝清し
両の手を淨めて神の鈴を振る
つじつまの合わぬ歯車軋み出す

大阪府 野 田 栄 呼

年金の枠内という難しさ
マイナンバー一人前の顔を持つ
ひと言を控えて睦む三世代
肉体と心合わせてしこを踏む
築四十床の悲痛へ目を向ける

大阪府 米 澤 淑 子

蜘蛛の糸降りてきそうな碧い空
追い風にもう頼らないマイペース
歳月を同心円で来た夫婦
日替わりで都知事答弁お洋服
失敗もあるから楽に生きられる

大阪府 池 上 清 治

むかで競走揃わぬ足に紐からみ
走り込み漸く乗れた終列車
走り去る市バスを睨み石を蹴り
工夫して走ったリレー銅メダル
故郷の名品届く盆休み

大阪府 井 丸 昌 紀

左手で引く直線にあるぬくみ
歩く時はひたすら歩けスマホ族
鉛筆の芯書くためよりも削るため
満ちてゆくより欠けてゆく月が好き
偽物は本物よりも似ています

大阪府 内 田 志津子

溜息をついて気持を整える
秋天にポニーテールの弾む声
定年後寺に通えと言う僧侶
千年の土台支える真柱
変わらないそこに大きな価値がある

大阪府 宇 都 満知子

美術館音の立たない靴で行く
届けますあなたを褒めていた言葉
疲れたら少し浮き輪につかまって
繋いだ手ほどいて孫が育ちゆく
真央さんのプログ涙がこぼれます

大阪府 江島谷 勝 弘

貧乏と健康体はDNA
ユニークといつも誉められケナされる
冷ピタを貼っておきたい老いの恋
ポテンヒットめざしています五七五
ギリギリで暮らしていますギリギリで

大阪市 榎本舞夢

窓越しに小さい秋を見いつけた
久しぶり娘誘って美術館
ゲートボールコーラス参加する夫
秋風が御出でおいでと旅プラン
会話して触れ合うだけで元氣出る

大阪市 大川桃花

アベノミクス鼻息荒いは総理だけ
長引くと言われよっしゃと覚悟する
再会を千年待った雪女

文明の利器に墮落をさせられる
行先をスマホに指図されている

大阪市 大治重信

この夢のつづきを見たし一人旅
パンドラの箱をあけたが空だった
竹の皮脱いで若竹つんと立ち
夕日受け旧里へ向う一輛車

誤作動でこれでも良いと生きてきた

大阪市 奥村五月

飢餓の子に大食い競争恥ずかしい
口とペン老いても元氣まだ動く
耳の蟬夏がすぎてもまだ元氣
子沢山さりとて光る子もない
頑固でもケアの女にありがとう

大阪市 笠嶋恵美

さば寿司のうまさに機嫌直される
最小の折鶴折れて夢のせる
優しい空気パラリンピック無事終る
敬老の花束来るの留守出来ぬ
塔まつりすべてに感謝有難う

大阪市 川端一步

健診結果よいとこだけを言っておく
わたくしを越えてみたいと思うとき
いい秋だ静かな恋をしてみたい
逢いたくない人がニコニコやってくる
松茸のないすき焼きを食べている

大阪市 熊代菜月

我が胸の歳はまだまだ乙女なり
星空を見上げる心まだ残り
カレンダー振り返ること多くなり
夢見たと言えない人に今日も逢う
聞き役と話上手な友と旅

大阪市 古今堂蕉子

ちよっとだけ急ぐ転ばぬよう急ぐ
露草とベンチと短い秋の陽
何気なく振り向き視線とらまえる
理想の形からこわれ続けてる
アンチエイジング今更とも今でしょとも

大阪市 近藤 正

琴線にふれて気持ちを通じ合う
T P P 黒塗りにした甘利呼べ
豊洲市場地下に通じる伏魔殿
パーティーは白紙でいいよ領収書
正体は見た人のない核の傘

大阪市 坂 裕之

自分だけ正しいことをしてた気で
お歳です大抵のことこれで済み
知らん振りしてるがみんな見てる妻
高齢者講習済ませ免許証
歳なりの欲はしっかり持っている

大阪市 佐藤 忠昭

何時の世も女性が正義男子悪
道楽はしないが立派な趣味を持つ
楽しみは小遣い貯めてランチ会
子や孫に小遣い貰うもヘソクリに
のろけだねイヤイヤ感謝感謝です

大阪市 田浦 實

散歩中ちよつと立読み脳活だ
元気年齢維持には家事が持つて来い
待合室街のニュースを掴み取る
持ち時間分からないから生きられる
寺社巡り一人で遊ぶ力くれ

大阪市 津守 なぎさ

盆栽が教えてくれる小さい秋
今生きる幸せ感謝誕生日
世界平和となえつづける自爆テロ
おさな児の澄んだひとみに癒される
ミニバラの今日も元氣を見る散歩

大阪市 寺井 弘子

レブリカの矜持閉じ込められたまま
食欲の秋迷い出すサプリメント
まだ暑い虫の音入れて秋刀魚焼く
花あかり明日のはなしをして帰る
新米が届く今年も母元氣

大阪市 寺本 実

渋いねと地味な男を慰める
君子ではないが私は風見鶏
ずるずると仮面被つてもう取れぬ
コンサート周囲はみんな夢の国
ちつぽけな二鳥返すと恩にきせ

大阪市 原田 すみ子

アイスでも食べて悩みを溶かしましょ
夏バッグ去年が少し顔を出す
きつかけの一言バズル皆埋まる
月の土地コンビニ出来てから買うわ
ホモサピエンスわたしは知性もつてるか

大阪市 平賀 国和

銃を持つ兵士が目立つ観光地
ルーブルの人の景色は多国籍
芸術の力に期待世界の和
憧れの自由の女神仰ぎ見る
同人に推され緊張塔まつり

大阪市 平嶋 美智子

パンジーの笑顔は何時も変わらない
ぶらり行く森林浴と木洩れ日と
いぶし銀昭和の芸を連れて逝く
念じても思いは空の果てに消え
病んでなお友は笑顔で語りかけ

大阪市 藤田 武人

顧みずただ真つ直ぐに生きている
旅先は身振り手振りの共通語
究極のさじ加減こそいい加減
曖昧な態度がいつも損をする
いつまでもおしゃれ忘れぬ熱い恋

大阪市 藤原 千恵子

も少しで事故だった神はいた
一ヶ月騒がせといて潮が引く
四ヶ国語マイク流れる風呂マナー
思いつきり涼しくなつて拭き掃除
郷からのマドンナと言うみかん来る

大阪市 升成 好

ハートまでブルースカイを浴びて秋
口下手の誠意ゆつくり効いて来る
真実は二度訊かれても同じこと
のみ込んだ言葉をつづる日記帳
産声に贈る白紙の時刻表

大阪市 山崎 珠生

腹ペコを豊洲の孔と呼ぶことに
中秋の日差しが何で酷暑やの
もみじの手団栗5個が限界や
保育所でジイジと搗いた餅を食べ
一等賞取った初夢また見たわ

大阪市 吉内 タカ子

あと四年糧が出来たよ五輪まで
孫からの花かご届く敬老日
小豆島行けぬ私も旅気分
趣味みかた今日が有るから怠けるな
辞書を引き言葉探して年重ね

大阪市 若本 安代

薬師寺で心揺さぶる絵に出合う
なぐさめの言葉が出ずに手を握る
肩の力抜いてほんわか生きてみる
たくさんの別れを知っている夕日
趣味一つ素敵な仲間出来ました

堺市奥 時雄

競うこと少しはあつて充ちた日々
入院の回数競うように言い
山姥に化けていた初恋の人
脱サラを今更悔いる小商い
悔しさを撥ね返すバネのびたまま

堺市 柿花和夫

恵まれた人は占い信じない
台風より恐いミサイル予告なし
おぼちゃんの自転車道を選ばない
百均もコースに入れた万歩計
割り勘の端数払って幹事終え

堺市 加島由一

だんじりを小屋に入れると冬の風
妻の月命日だった野紺菊
肩ならべ未来を語る十三夜
ふる里に帰れぬわけがふたつみつ
茄子をとる鋏の音に母がいる

堺市 源田 八千代

夫の事しみじみ想う一周忌
敬老のお祝返しバイキング
近所仲間と午前コーラス午後はヨガ
キャンセルを心配の友電話くれ
おひとりさま支えてくれる人数多

堺市 齋藤 さくら

里帰り二泊三日が丁度よい
星二つ妻にくれると言うてくれ
はやいても年金下がり続けてる
肉肉と食べていた頃なつかしい
秋風に友の誘いは寺参り

堺市 坂上 淳司

去年従兄今年柳友合祀祭
立大のエースたん吉さんも逝く
投球も生き方も皆ストリート
空席を確保しといて君の傍
ビフォーアフター出来過ぎの差に主婦コロリ

堺市 澤井 敏治

自己陶醉しても酔わないソクラテス
大落暉ぶらり私が溶けてゆく
シンプルな暮らしの中に古書の山
一度でいいんだジャンボに当たりたい
猪口持たぬ日はなかりけり去年今年

堺市 遠山 唯教

優しさが厳しさよりも身に沁みる
情報はつかむと待たず取りに行く
おいしいもの食うと幸せ顔になる
生きている証か不平ばかりいう
晩節を汚さずそつと生きていく

堺市 内藤 憲彦

日本にはふりだしがある原爆忌

政活費に化ける白紙の領収書

披露宴過去形でしか褒めてない

お隣もまたお隣もポケモンGO

五時半は生を飲み干す時間です

堺市 村上 玄也

輪を抜けて自分の羽で飛んでみる

枯葉散るように最終同期会

昭和遠し今平成の「君の名は」

お隣に座ってから恋心

年寄と思てか売り子親切だ

堺市 矢倉 五月

アイウエオ順に並べて恙無し

忘却も時に支柱の役担う

手も足も抜けぬ突っ込み過ぎました

禁酒禁煙妻子背負っておりまする

色直し次女は真紅と決めている

和泉市 横山 捷也

安全な距離で正論吐いている

五十年剥げたメッキに艶が出る

知ったふり知らないふりで世を渡る

隙の無い男に一目置いて置く

生涯をふるさと訛母が逝く

茨木市 島田 誠一

秋風が戦力外を選りに来る

一駅を歩いて仰ぐ鱗雲

同窓会死んだ病んだと酒を酌み

異常気象歳時記の糸継らせる

文章にすると本意が謀反する

茨木市 藤井 正雄

伊勢海老の髭が動いた祝い膳

内幕をやりわり話す酒を酌む

やりくりは利息で出来たその昔

銀河鉄道乗り遅れまい走る夢

建前と本音ジョークにかき混ぜる

大阪狭山市 矢野 梓

亡き人の数だけ群れて曼珠沙華

秋霖の日記一行のみで閉じ

降り止まぬ雨に電話が長くなり

古里に一杯おいて来たドラマ

秋夜長姉と話した半世紀

貝塚市 石田 ひろ子

冷めた目で風を読んでる白い萩

お薬手帖柳誌も入れて病院へ

せめてもと熊本産を選つて買う

生きる力頂くように米を磨ぐ

木綿豆腐戦後を生きた母の味

河内長野市 大島 ともこ

欲しい物追う日だけでいいですか
今日よりも明日は良い日に違いない
ゆとり求めあくせくと今こまねずみ
のろまでいいこれが私の生きる道
バツサリと剪定の後花咲かず

河内長野市 梶原 弘光

こじれたらお互い様と笑い合う
逆縁に妻もらい泣き長電話
金婚まで5年胸突き八丁だ
褪色に目も当てられぬのはピンク
月の夜無常の風を自覚する

河内長野市 木見谷 孝代

彼岸会に父母へ届けと読経する
蓑虫のようにあなたにぶら下がる
お互いがつつかい棒で大事です
悪友の誘いにいつも乗っている
飛行機でニーハオ孫は国際人

河内長野市 黒岩 靖博

増量につられ財布が軽くなる
ケイタイを忘れ赤電探すはめ
ハントして子宝四人孫九人
異国の地道に戸惑い美女ガイド
おしゃれしてマス席競う美男美女

河内長野市 谷 久美子

朝は希望夜は感謝の歯を磨く
また恋をしたくて磨くコンパクト
お別れの終着駅はああ無情
老妻に天下取られたゴミ出し日
途中下車する度拭いてきた涙

河内長野市 辻村 ヒロ

補聴器が相手を選び自己主張
きらめきを見過ごす老化悔し泣き
古希すぎて老い受けとめる膝小僧
楽しみもゆるり味わう老いの坂
故郷のすり減る記憶老いを知る

河内長野市 藤塚 克三

瘦せ我慢お互い様と笑い合う
二人暮らし時には馬鹿を演じます
墓地勧誘まだ死なへんと電話切る
昔住んでた家の周りを二往復
釣りばうず鯖缶買って独り酒

河内長野市 村上 直樹

起きてすぐやる気引き出すストレッチ
左遷地の酒で磨いたかくし芸
序列ならネコ孫妻の下にオレ
八十路入り次は卒寿の高い壁
不足ない暮らし一億平和ボケ

河内長野市 山岡 富美子

手作りの余生を急いだりしない
アナログが堂々とゆく山車がゆく
通院へ暮らしの中の雨宿り

碑の父にもあった刀傷
続編へまだジャンケンも影踏みも

河内長野市 山室 光弘

老いせまり四季の移ろい無常感
いつ誰が何を隠した肥満都市
今どきの若者はまる「君の名は」

セコイ人都政改革火をつける
口裏を合わせ疑問が闇の中

岸和田市 岩佐 ダン吉

万策が尽きたが一步前に出る
表舞台去って人間試される
火を継ごう彬の一句今光る
原点に戻れと軽く言うてくれ
ペースなどおまへん道をまっしぐら

岸和田市 雪本 珠子

嘘少し交え病む友和ませる
いい知らせ病んだ心が和みだす
華やかな笑顔の裏にある孤独
便利さの裏側にある落とし穴
五輪まで生きられますと医者言う

四條畷市 吉岡 修

神様の愛で未来は伏せてある
大喧嘩したのがなかなかいい男
善人が敬われてた時がある
父越える世襲議員で少ないね
僕たちが次の世代をデッサン中

吹田市 太田 昭

ブランコ静止少子化の影落とす
殻破る女の爪を研ぎ澄ます
文明に遅れ私の生欠伸

恙ない一日ひとり飯を盛る
父母は逝き兄弟も逝き里遠く

吹田市 木下 敏子

背伸びして縮んだ分を取り戻す
幸せになろうと誘う赤とんぼ
万歩計つけて八十路の坂登る
マイク持つ顔は生き生き若返り
コーラスの仲間入りして染めた髪

吹田市 須磨 活恵

私の中に強気と弱虫が
欲を捨て仮面も外そと思えども
余生とや極楽とんぼ風まかせ
矢も盾も捨てて優しい風になる
無理のない歩幅でゆつくり日を紡ぐ

吹田市 野下之男

大統領どちらが勝つか世界の目
白髪など生えるひまな総理です
八十代言う事聞かんこの体
歌手だつて旅番組に出てみたい
小犬等を優しい瞳が追うている

高石市 浅野房子

野球に相撲みんな終つた野分吹く
もう手おくれもう手おくれだ何もかも
雑用をこなしやつぱり横になる
エアコンを付けねば暑い付けると寒い
SOS見て知らん振りする他人

高槻市 井上照子

金銀銅鍛えているという証
身分証明もしかの時の私です
97歳と句に詠んでいる立派です
うたた寝にテレビの音の子守り唄
立ち話だけで帰れぬコーヒーを

高槻市 指宿千枝子

赤とんぼ昨日も今日も待ちぼうけ
友達の傘寿ばあちゃん輝いて
来春の靖国詣でうれしくて
秋晴れに久し振りです墓参り
ひと休みするお供えの茶がうまい

高槻市 片山かずお

ほどほどのほどは自分で決める主義
よく回る舌で真実味に欠ける
塩味をだんだん薄くして生きる
君の行きつけ僕のなじみと夜が更ける
好きになるタイプの中に母がいる

高槻市 島田千鶴子

蓑虫の自由孤独と共にある
楽しくて先が読めないキリギリス
虫時雨にわか詩人になる長夜
ママチャリのタイヤ悲鳴をあげている
泣き言は言わぬと決めてから前に

高槻市 初代正彦

体力はないけど老いの粘り腰
邦人のノーベル賞について
丈夫さに目から鱗の新素材
ママチャリの前後輪つばに反射材
5Bの鉛筆削るまた今日も

高槻市 杉本義昭

こんこんと納得させた老いの知恵
定年後ノーネクタイがよく似合う
核を持つ地球に非常口がない
淋しいというから困る別れ際
電柱を抱いて明かした夜もあり

高槻市 富田 美義

老後の後忘れさすよな秋日和
生活の根っ子を壊すガン告知
根っからの担ぎ手見えぬ秋祭り
根性じゃダメ生きられぬ金がいる
本心は化粧の下に眠ってる

高槻市 富田 保子

DVD初孫追っかけ日が暮れる
だんだんと高鳴る胸や祭り笛
ダンス靴ババはつらつと歳が無い
百均が雑巾縫わぬ主婦作る
わが街は風にも甘い匂いする

高槻市 原 洋志

作戦タイム少し尻尾を切り落とす
生活の知恵を反故する全自動
夕焼けを集めてサンマ焼いている
メニューにはないミサイルが飛んで来た
冗談が飛行機雲に通じない

高槻市 松岡 篤

鏡見て何歳若く言おうかと
妻と医者癌を隠していたなんて
遺産分けすんなり決まる程で良い
旨い水コック捻れば出る日本
飲み放題料金までは飲めぬ歳

高槻市 安田 忠子

格安のまずまずだったバスツアー
五年ぶり恥ずかし嬉し読書会
読書会題材外れ盛り上がる
うっかりと嵌った罫が面白い
ほーっとして余所見をしたら歯が欠けた

豊中市 池田 純子

満月のようなあなたにはっとする
待ちぼうけ夕陽優しく背をなでる
ほつれてる気持ちちを紡ぐミルクティー
曳山の賑やかな頃ふる里よ
リュック良し帽子靴良し空眺め

豊中市 藤井 則彦

志高いが腰の低い人
身も心も虫干したい金婚日
善玉菌増えて声まで変わり出す
手を抜いてみるのもやる気出す一歩
最期には仮面を脱いで僕になる

豊中市 松村 里江

貴方との出会いつづいている至福
老いてまだライバルと呼ぶ友がいる
転びぐせ情の杖に立ち直る
心情の輪を広げますボランティア
好奇心まだまだ前に進みたい

豊中市 水野 黒 兎

ふわりとろり大人も好きなオムライス
生憎の雨も二人に粹な雨

ひぐらしの音は浄土へ至る徑

鳳仙花子らはてんでに明日へ跳ね

俱会一処先輩に会う高野山

富田林市 片岡 智恵子

時々手抜き息抜きしています

サングラスはずした方がこわい男

老人会コーラスすると皆乙女

不利だから小細工ばかりやってくる

失敗も繰り返すうち慣れてくる

富田林市 関 よしみ

風車左右持ち変えよく回る

晩学の書架に溢れ出る溜息

木洩れ日を拾い集めて無限大

大切な命の旅はまだ続く

ほっこりと海山の幸土瓶蒸し

富田林市 中井 アキ

おめでとうと市から届いた余命表

脇役に徹し芸風こむらさき

木もれ陽になって友情あたためる

家計簿の愚痴も時には聞いてやる

線香花火童心からの糸電話

富田林市 中崎 深雪

露草の青は絵の具で出しきれぬ

もうすぐよ菊のつばみが時を待つ

最悪のシナリオ想う要介護

なるようにしかならないと天仰ぐ

難病も自然の掟なんだろう

富田林市 中村 恵

ありふれた言葉に込めた ありがとう

大胆に私の心盗まれる

都会の灯に魍魎魍魎が集い合う

枯れていく頭にたつぷりの砂糖

最後にはちゃんと辻褃合っている

富田林市 肥山 一文

全力で走ってみても追いつけず

駄馬に乗りムチ打つ姿立派だよ

歴史本何度読んでも飽きもせず

本棚に僕の人生並んでる

五七五辞書を繰っても作れない

富田林市 山野 寿之

幾度か薄氷踏んで子が育つ

半分こして母の愛ひとつずつ

幸せを量る目尻の皺の数

診察が終わり薬にまた長蛇

親不孝年に二回の花手桶

寝屋川市 伊達郁夫

謝るとやっと私の虹が出る
ひとり部屋小さな幸と添い寝する
父の技無視して父の技に似る
途中下車青い時間が手で招く
酒飲むと父の自慢がしたくなる

寝屋川市 富山ルイ子

暴れん坊將軍ばったばった切る
相棒を忘れずに見るカレンダー
テレビ見る一日のうち三時間
冬野菜を種蒔く朝に毛虫取る
禍福はあざなえる福を待ち望む

寝屋川市 平松かすみ

重病人かかえニュースも上の空
八十九歳入院点滴初体験
赤ランプ付いたお部屋でどうしよう
一番にきらいな薬よう効いた
何本もあったチューブが減ってきた

寝屋川市 森茜

澄みわたる秋へ琵琶湖のひたひた
紅萩ほろほろ娘と深い話する
胡麻豆腐つるり僧坊寂として
座り直して霧の晴れゆく生駒山
縦割りの行政だんまりを決めこむ

羽曳野市 安芸田泰子

熱帯夜羊の数が足りませぬ
行間の隙間に未練隠してる
坪庭に小さな季節移り行く
足腰を庇う達者な口がある
無事な顔見れば小言が口に出る

羽曳野市 宇都宮ちづる

老父から新米届くありがたさ
メール来て今日の約束思い出す
三世代今日も主役は二歳の芸
肩たたきちょこっと触ってお小遣い
その昔集めた切手に二円足す

羽曳野市 中川ひろ介

愛おしく背丈揃えて菊花展
ハロウィンの仮装かわい吸血鬼
感謝祭パンブキンバイ母の味
朝ドラとこの夏の恋すぐ終る
秋霖が洗い続ける悔いの日々

羽曳野市 永田章司

侘寂の心伝えぬIT化
子は宝財は残さず教育費
唯我独尊世界を敵にまわす国
名監督相手手の内透かし見る
争いの財も残さず借りも無し

羽曳野市 三好 専平

ポケモンのつぎはポケモンかもしれず
結婚も出産も政治も代理です

自分史は書かぬと決めて牛蛙

川柳を募り薬を売る会社

渾身の一手かりに悪手だとしても

羽曳野市 吉村 久仁雄

根菜の泥もうまそう道の駅

飄々と欲の深さも見せて生き

有終が美でも醜でも走り切る

最終章筆おく今もまだ未完

宇宙ゴミにはならない千の風になる

東大阪市 北村 賢子

逆風へそんなもんやと前を向く

日本背負う男近頃美しい

超変革へやはり四位のタイガース

肩で風切った夫の背が丸い

力まずにスローライフでいい余生

東大阪市 佐々木 満作

祝福のバレードリオの顔と顔

ナツメロに秋の憂いを抱く今宵

長崎の鐘を歌うと目が潤む

古希から喜寿老化のペース顕著なり

体調に合わせ断捨離ゆつたりと

枚方市 海老池 洋

為せばなる広島Vに豪栄道

大山鳴動させてはみたが小池知事

ながらスマホ同士ひやりとすれ違い

ひやひやを隠し原発再稼働

みどりの中で眠っていたい樹木葬

枚方市 小林 わこ

秋の絵をいっぱい見たい朝散歩

ほめられて柔らかなるバラのトゲ

棘があるけれど可愛い憎めない

心の底見抜かれぬようスクワット

遊んで学べ父の奥義を大切に

枚方市 丹後屋 肇

骨粗鬆症大音声で呼名する

楽屋裏眉間に皺のコメディアン

うっかりの違反切符に悄気ている

レンタルのだらりの帯を追うカメラ

風のライブ ダフ屋の券を買っている

枚方市 寺川 弘一

私の賞味期限はわからない

永遠の一部に俺も生きている

残念なこと命はいつか消えて行く

窓際ですがここは終日日陰です

読み返すルーベ傍から離さない

枚方市 二宮山久

ブライドを捨てると自信わいてくる

しめ切りが迫る名句が浮かばない

目がさめた事に感謝の今を生き

趣味と言う強い味方で生きている

あの笑顔とりこにさせる趣味仲間

枚方市 二宮紫鳳

老いの午後出かける用事のありがたさ

ユーモアを忘れず生きる人気者

草餅の香りにつられ古都ウォーク

塩加減程よく効かす夫婦仲

すすき揺れ満月愛でて二人酒

藤井寺市 伊藤アヤ子

有難い清水の流れ民の水

次から次疑惑の視線向けられる

移転先盛土疑惑で盛り上がる

里帰りした時ぐらい甘えとく

肥るばかり食べ放題を中止する

藤井寺市 太田扶美代

ラストページやっと一輪咲きました

電話でいいのに来てくれる車椅子

追悼の言葉が風の中にある

傷ついた否傷つけたかも知れぬ

コンピニの灯に集う家なき子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

門前のコスモス寺の名が読めぬ

目的を持つ靴小気味よく響く

音たてて踏ん切りつけたジャンプ傘

過去形を許してしまふ再生紙

あつさりと言われた方が領ける

藤井寺市 鈴木いさお

ブライドを秘めた訳ありのマンゴー

若くないから若作りするのです

つら過ぎてもうふり返らないあの日

集まった未完の顔が逞しい

ざわめきの中で孤独な影法師

藤井寺市 高田美代子

異状気象にうろたえている雪月花

ポイントを溜めて宇宙へ行くつもり

松茸と河豚に傾く肥えた舌

うかうかとしてたらサンタ顔を出す

よく生きた今年へどうも有り難う

藤井寺市 田付絹枝

野趣溢る街の温泉旅気分

名指揮者ワンポイントで士気揚がる

一病を抱えて和む八十の会

黒四の放水唾然立ち眩む

友の訃に徒空しくて後の責め

藤井寺市 津 田 シルク

真夜中の風のつぶやき聴く独り

秋祭り神は未だに出張中

野のバラもバラのブライド持つて咲き

方言を入れて作句に味をつけ

八起き目は内助の功に頭垂れ

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

大阪から東京都議会見ています

人住まぬ生家壊すと甥が言う

ケアマネがご機嫌いかがと来て長居

折り紙が宇宙工学へと進む

愛ちゃんの着物姿もまた嬉し

藤井寺市 吉 田 喜代子

筆折れば日日は気楽になるかしら

今日の晴れ頭も軽く身も軽い

お誘いに重しも取れてコンサート

老いを知る地下道を行く若い友

菜園四年むずかしくなるあれやこれ

藤井寺市 若 松 雅 枝

法被着て山車追っかける喜寿の汗

百歳もまだまだ未練医者通い

秋風に誘われ鬼も踊り出す

イチローに見習い老いも頑張ろう

場所替えたへそくり行方わからない

松原市 森 松 まつお

十二月十四日あの名画観る

泣き虫が多い忠臣蔵ファン

泣く場面心待ちしているタオル

酒チビリチビリと時代劇を読む

突然に笛吹き童子口ずさむ

箕面市 大 浦 初 音

吹く風が心を洗う峠道

横見れば黙って歩く友がいる

鍋のふた取れば笑顔になる夕餉

わが家訓お天道様は見ている

髪を切り生まれ変わって未練断つ

箕面市 酒 井 紀 華

雨上がり朝の光を食べている

天気予報当たると信じ日を選ぶ

山歩きみどりの風に命乞い

選ばれて妻になったの摩訶不思議

家中の柱がゆれる安普請

箕面市 出 口 セツ子

つきあって減塩生活慣れてくる

薄味で素材の味がよく解る

忘却は神の愛だと前を向く

一病があるから日々を光らせる

自然には科学が進んでも勝てぬ

箕面市 広島 巴子

教会を見上げ歴史に思い馳せ
地獄めぐり元湯に入り極楽に
青空に切ない屋根のブルーシート
コスモスの優しさにふれ風の中
パパが撮るリレーいつでもボク一位

八尾市 内海 幸生

花のDNAそうも思うが神の彩
すごいとも羨ましいとも海鳥は
老いの文左手の辞書また開き
赤信号皆で渡った議員たち
逆転の発想だった筈なのに

八尾市 高杉 千歩

ごくごく普通に九十歳のケアハウス
消灯がすぎても夜型変えられず
特養の半年呆けていくのが分かる
叫んでる覗けば普通のおばあさん
大正は強いと思う特養で

八尾市 寺川 はじむ

人様と競うカラスの知恵袋
そそくさ名所店たつぷりのバスツアー
人は皆競い合いながら個を磨く
ピフォアフター美顔が誘うテレシヨップ
制裁を見抜いてるのか北のボス

八尾市 宮崎 シマ子

冬には冬の歌をうたおう大声で
計り知れぬ青空里の柿熟れる
ウィンドの服の値を見て夢さめる
抱っこしようか孫に言われて歳を知る
わからない病か歳か身が縮む

八尾市 村上 ミツ子

耳で見て目で聞く秋の気配なり
省略をしすぎて意味が通らない
きのうきょう昔話にいやされる
リズムにのれずただ風に吹かれおり
他人事にすればすぐさま片がつく

八尾市 山根 妙子

星の降るプラネタリウム別世界
二上の山すつきりと神無月
辻風にあき缶急に走り出す
自分だけ理解のできる予定表
軍服の父と向き合う秋彼岸

神戸市 井上 じろう

船釣の朝の冷氣に悩み消え
ご賢察恐れ入りますほっといて
ジャスバラード聞いて脳トレ秋深し
負の遺産知らず取り分もめている
少子化で日本沈没宙でみる

神戸市 上田和宏

自然体言い訳にする意け癖
郷土館震えた文字にある歴史
右にくるり左にくるり平和主義
黙祷でそっとお別れして来たよ
青春は生きてびんぴんしてる今

神戸市 奥澤洋次郎

一人芝居観客はいなくなっている
何がある続いている一本道
一年の生涯まるい雀の目
新しい今日が待ってる朝の窓
ハンターの目差をして夢を追う

神戸市 富永恭子

謙虚さが君を一層輝かす
平穏が変わらず続くはずだった
夕茜優しいそが透けている
ほどほどの苦味大事な肥やしです
バラ園の帰りうっかり苗木買う

神戸市 能勢利子

うっかりの数まで競い合うふたり
友の計に溜息をつく日記帳
目葉が命中すると笑む老母
ユーモアのセンス磨きに行く句会
元気だと顔も見せないのが息子

神戸市 松井文香

一年の立派な計もまだ未完
指切りをした日懐メロよびもどす
友達も招いてくれた家族葬
酔い痴れて一人カラオケ秋夜長
お作法もすんなり出来て孫はたち

神戸市 山口美穂

メール交換生きてる証日に一度
もう少し頑張れないかなあ脚よ
カサコソは猪かしらUターン
ちよつとだけ昼寝してから考えよう
敗戦を語れる人が減ってゆく

神戸市 山崎武彦

追伸にごめんなさいを埋めておく
うろこみな削ると自分取り戻す
少しだけハードル下げて子を褒める
ど忘れか惚けかと妻が突いてくる
びんびんと響く路郎の句碑巡り

明石市 梶谷和郎

落葉踏む命の枯れた音がする
邪心捨て森のみどりに同化する
晩成の器はけして急かさない
廃校へ今でも通う夢の中
自信ない証拠が小さく見え

芦屋市 黒田 能子

大空を見上げ涙をこぼさない
選ばれてみごとに咲いた花の種
何があつてもこの笑顔失くさない
リラックス風はくると向きを変え
選ばれてあなたの母になりました

芦屋市 竹山 千賀子

寄り添つて心の声を聞いてやる
心地よい風味方とは限らない
旅は道づれ周りスマホの人ばかり
病歴で盛り上がつてくるクラス会
尺貫法今も生きてる一升瓶

尼崎市 市坪 武臣

ハイタッチ孫のかわいいもみじの手
キャンセルをぎりぎり待つてゲットする
ぎりぎりの暮らしになれた妻の味
孫台風来ても来んでも落ち着かぬ
自販機がコイン足りずにそっぽ向く

尼崎市 加川 靖鬼

年寄りを自覚してない好奇心
本心を突かれてシャツクリが止まる
柄ずれた金魚夜店で掬われる
柔らかな皮膚で耐えてる深海魚
のびのびと育つ子供に期待せず

尼崎市 藤井 宏造

撫でるように妻の遺影を拭いている
亡き妻の跡形そこらじゅうにある
遺影の妻とおんなじ部屋で寝ています
どこから見ても遺影の妻と目が合うの
遺影の妻から目を逸らす時がある

尼崎市 藤岡 りこ

目を見張り大道芸に見とれる児
白髪染め止め玉手箱開けたよう
テレビで見る故郷のニュース嬉しくて
子ら巣立ち穏やかになる夫婦仲
夏木立空蟬つけたままに 秋

加西市 金川 宣子

自然死を選んだ母を看取る日々
無口だが見守る術を知っている
サンプルのお棺入ってみませんか
ニッコリと素通り出来た再検査
両方の親を担いだ一人っ子

加西市 山口 不動

おーい皆回れ右して月見よう
アンカーで二人を抜いた孫娘
午後の部は敬老席が倍に増え
彼岸花今年は特に紅い列
新築が珍しくなり見学に

川西市 大坪 一 徳

釣銭をぴん札で出すおもてなし
携帯は掛ける時だけオンにする
立食も座敷も駄目なクラス会
大谷が漫画みたいに投げて打つ
六十年代ポップス聴けるカフェで会う

篠山市 酒井 健 二

ボスターの別嬪睨む立ち飲み屋
蛸足の一本当てに立つて呑む
おめでとう三度続くと口ごもる
検札に空気が揺れるジェイアール
歳取って株三昧は止めときや

三田市 足 立 つ な 子

老体もひとまず安堵励みます
あきらめぬ一踏んばりの日が昇る
過去は過去いま楽しけりや良しとする
子も孫も親に似ぬ子で自慢の子
願わくば親を越しての命乞い

三田市 石 原 歳 子

川柳に指折りながら虫の声
ベランダの隅でたまごを生んだ鳩
雑草の中に紛れて萩の花
もう秋だ燕の姿見なくなる
独り者秋の七草口ずさむ

三田市 上 垣 キヨミ

趣味の会歯に衣着せぬ仲間の輪
窓開けてだんじりの音亡夫にも
ケータイでだんじりの音子に送る
収納が下手でお金がたまらない
苦手だと思つた友が近くなる

三田市 上 田 ひとみ

眩しくてこっそりあなた見ています
柔らかな君のハートも手のひらも
浄化する言葉探して続く旅
憎いともかわいいなともこの私
生きていくゆつくりくすむわたし色

三田市 尾 崎 一 子

この指とまれ心閉ざしている小鳩
この指とまれしあわせの青い鳥
育ち盛り友を連れ来る笑い声
小走りの子育て楽し頃想う
赤トンボ君のふる里ビルの底

三田市 北 野 哲 男

地獄極楽どちらにもない酒煙草
すすきさえ月見の頃は紅をさし
カロリーが五千歩分は上回る
貧乏は皆当たり前だった過去
正座した仏像一度拝みたい

三田市 久保田 千代

のんびりと午後のわたしと喫茶店

萎えていくその現実を目を逸らす

向日葵が枯れる昨日の絵の中で

このままで良い筈はない終章は

台風の目となる人が家に居る

三田市 多田 雅尚

シャツ出せばベルトは紐で事足りる

トイレバス一緒に部屋で落ち着かず

浜名湖を見ても寝床は謎のまま

父さんは近頃何時も仕舞風呂

大臣で目立ってるのは赤い羽根

三田市 野口 晶子

悪夢食む獲です母の子守唄

アフリカの魚と知らず鰯を誉め

さまよって苦海で貝になる私

幸不幸束ねてみたら同じ数

アラフォーが冷凍保存する卵子

三田市 福田 好文

医者よりも妻の見立てが的を射る

法律の裏の蜜吸う議員さん

不意の客慌てる妻と冷蔵庫

渋滞でガイドの口調乱れだす

どん底の味を心の糧とする

三田市 堀 正和

墓参り待っていたのは赤トンボ

借金のない日本へ戻さねば

判定はスロービデオにまかせましょ

ロボットと将棋を指して楽しいか

僕の匂も色紙に書けば味が出る

高砂市 松尾 柳右子

大阪よりはなれて暮らすわびしさよ

青天にトンボ飛んでる高砂市

主人院娘に頼ってる老いの道

娘夫婦と見舞帰りに明石焼き

姉よりの便り大阪恋しいな

宝塚市 田中 章子

始まれば全身耳となる句会

時々夫と接点持っている

何体の仏像拝んできたことが

走り過ぎある日突然ダウンする

一病は神さまからのメッセージ

西宮市 秋元 てる

殿方の己を守る無表情

九七歳未だ生きる気の氣迫

同じ頃生きた「トト姉」箸止まる

忘れ物に「ここに居たか」と嬉しそう

バスツアー笑いこぼさず持ち帰る

西宮市 緒方 美津子

仏壇の母に急かされ栗ごはん
手強いぞ反面教師なる地震
三世代椿円の中のアタタカみ
コンビニと避難場所あり散歩道
夫居ぬ入院という重い留守

西宮市 亀岡 哲子

美大出でさすが上手に肩を引く
砂かぶりで亡母が笑っている画像
すすきの穂震える程の風が好き
お疲れのおじさん二人私の子
考えが過ぎて一歩も踏み出せぬ

西宮市 西口 いわゑ

アドバイザーは自分自身の胸に棲む
誤解とけふんわり眠くなってくる
カスミ草プライドだけは捨ててない
天高し医者の子を捨て暮れる
コーヒーのブラック彼も好きだった

西宮市 福島 弘子

募金箱善意届けるもみじの手
一歩出る勇氣いたかく空の青
機嫌よく遊ぶ気力は健在だ
口だけはまだまだいける老女子会
街路樹の根元へせめて落蟬を

西宮市 牧 富喜子

降る雨の中まで虫が鳴いている
幸か不幸かネット社会の外にいる
血管の浮き出る手の甲生きている
失うもの何も無いのに落ちつけぬ
たましいの座り場所かな肩のこり

西宮市 山本 義子

姉ちゃんとは口喧嘩だけ覚えあり
遊園地すっかり昔ばなしなり
診察券全科揃った幸不幸
花屋さん知らんヨコモジでいっぱい
介護ロボットやすくなるまで生きなくちゃ

西脇市 七反田 順子

萩ススキあとはあなたを待つばかり
ふるさとを民話ひとつでアツピール
朝練の子らの活気に足を止め
夕焼けにカラス三羽が染められる
好きでした句も人柄も逝去とは

姫路市 古川 奮水

修理する玩具握って汗をかき
立ち往生模型電車は電池切れ
増えている車内でスマホ目障りだ
八十路とて躓かないで道歩く
ガスの跡様変わりつつ採めている

南あわじ市 萩原 狸月

キー一つ押し間違えて見る地獄
ラジオから言葉で見せるホームラン
新聞を読まぬ世代のスマホ漬け
一泊の札が女将の字で届く
半世紀熟成をした夫婦愛

奈良県 安福和夫

親の背に顔を叛けた罪懺悔
ファシズムが生んだ悲劇はもう二度と
過去の轍踏まない厳しさ次世代へ
科学者の夢を育てる国造れ
全宗教平和フォーラムを輪番で

奈良県 谷川 憲

石仏に供えたように曼珠沙華
満員車新聞たたみ読んでみる
ナポリタンいつも変わらぬ純喫茶
二円忘れ大事な手紙もどされる
消印で値打ちをあげた古切手

奈良県 渡辺 富子

さらさらの新米神が宿つてる
よく見える処にふわり妻の笑み
ずぶ濡れで母の港へ流れ着く
ねえあなたゆつくり行こう銀河まで
脳回路のところどころにある淀み

奈良市 阿部 紀子

サミット会議平穩無事で安堵する
神宮の静寂の中踏む小石
おかげ横丁リフレッシュして人溢れ
デイズニーで結婚式と孫の言う
ミニーちゃんの婚約指輪はめる孫

奈良市 大久保 眞澄

譲られた席でちんまり畏まる
不意に来る介護する日もされる日も
転けたこと忘れた頃に痛み出す
おばあさんですと背中に書いてある
椅子取りゲーム公園のベンチまで

奈良市 加門 萌子

黄金の稲穂の波にほつとする
さりとて嵐に泣いた地区もある
天と地がまるで共謀する如く
人類は自然の機嫌のままにある
ささやかな嬉しいニュースノーベル賞

奈良市 辻内 げんえい

長寿の秘訣過去を忘れて前向きに
弾けても節度を守る爺の会
先ず一杯揃わぬ前に盛り上がる
台風に過去のルートはない今年
つくつくぼうし夏に未練と鳴く彼岸

奈良市 山本昌代

脳トレは歩くことやとズック靴
立ち話犬はしょんぼり座り込む
自転車で風を切つてるおばあさん
コンビ組む長所短所も溶け合つて
夕日影おひとり様をそつと抱く

奈良市 米田恭昌

銀座パレード涙にけむる車椅子
デジタルの世をアナログで生きている
外野席の二人を確と見たテレビ
ストーカーか貧乏神がつきまとう
リストラに遭い振り出しに戻される

生駒市 飛永ふりこ

ポスターのゴッホの澄んだ目に秋が
彼岸花ふつと浄土が近くなる
誉め上手どんでん返しやもしれず
謙虚さを見習いたいなお人柄
癪だけど甘いマスクに実跡が

香芝市 大内朝子

零れ種生命力を凜と咲く
父の背のぬくもり思い出す夕陽
若い日へタイムスリップするベンチ
新しい命を抱っこする落ち葉
ときめきの魔法の欲しい時おんな

香芝市 山下純子

亡き母にひ孫の声を届けたい
脳トレと孫からパズル贈られる
旅先で潜む五感が開花する
お歳暮を当てに数の子買いません
うっかりと昔の彼の名前出る

和歌山市 磯部義雄

出来ちゃった結婚孫の為許す
給料が減ればこづかい減る道理
順不同だけど気になる指定席
見事ですボケとツッコミ痴話喧嘩
途中下車赤提灯に足が向く

和歌山市 上田紀子

運命と開き直れば軽い肩
実直に生きて水にも味がある
差出人不明の手紙秋に舞う
空洞を埋めて明日を視野の中
アンテナを伸ばし世間の様子聞く

和歌山市 喜田准一

八十路坂言いたいことば見つからぬ
小遣いが不足気味です秋の天
朝ドラに日本の文化詰まつて
愛想よい可愛いレジに客が群れ
ぼんぼんで無能な上司すぐ怒る

和歌山市 楠見章子

手鏡に母をみつけてこそばゆい
ロダンの顔もあつて石垣面白い
屁理屈を軽いジョークで切り返す
生き方のヒント上げたり貰ったり
お寺より見頃の萩にいやされる

和歌山市 坂部紀久子

胸上げをされた選手もVの型
老い一人台風予報が脅かす
全集本始末しかねて身の整理
日の暮れる早さおしゃべり途切れます
亡夫には悪いが彼と会う夢を

和歌山市 武本碧

義理チヨコは思ったほどに甘くない
モナリザが歌えば謎が解けてくる
カラスよりマナー忘れてゴミ置き場
思い切りドライになれば策はある
ジングルベルに乗って今年を片づける

和歌山市 玉置当代

独りぼっちまだお迎えが来てくれぬ
まだ時間あると寄り道してしまふ
記憶力失せてはなしが噛み合わぬ
伸び盛り見事皿まで平らげる
伝統の芸も見事に初舞台

和歌山市 土屋起世子

今日よりは伸びぬ日脚に精を出す
強がりを言っても寂し人恋し
現実はあるもののよと膝笑う
目張り板出来て隣と仲が良い
茜雲忘れ上手になる私

和歌山市 福井菜摘

うつぶんを晴らす蛇口を全開に
重い腰その気にさせた誉め言葉
反論を謙虚に受けて糧にする
前向きに暮らせば足りることばかり
懸命に生きた鱗が光ってる

和歌山市 福本英子

吊り革の皮の温み気付かぬ老いの席
潮時を逃がすやっぱり歳のせい
引き算でまだ生かされる九十二
杖ついて歩け歩けと一歩ずつ
アイフォーン何時か私も世話になる

和歌山市 古久保和子

定位置にまだ母が居る塩の壺
秋刀魚にはさんまの皿と決めている
ブルブルと秋をかき分けミニバイク
夫婦喧嘩もう体力が続かない
誕生日こっそり過ぎた仕舞い風呂

和歌山市 堀

富美子

海南市

小谷 小雪

生き甲斐があるから歳を数えない
時どきは途中でとちる朝の経

通院へまだ節介の余裕持つ

まだ行ける鏡私に世辞を云う

お喋りを助長しているカプチーノ

和歌山市

松尾 和香

海南市

堂上 泰女

留守頼む亡夫の命日感謝する

まだまだと学ぶ生きがいカルチャーへ

髪の癖母にもらった宝物

新幹線初乗り楽し孫曾孫

銀座バレード八十万のお祝い日

和歌山市

松原 寿子

紀の川市

宇野 幹子

同郷のぬくみ涙が堰を切り

死ぬ日まで学び心に灯を囲む

しっかりと受け止め爪を研いでみる

糸口の縫いを花が解いてくれ

目に見えぬ重い空気が壁になる

岩出市

藤原 ほのか

紀の川市

北山 絹子

運動会なにがなんでも徒競走

さりげない仕草に君を想い出す

食べ過ぎて心と身体持て余す

人間は時を刻んで歩いてる

人混みの中で自分を見詰めてる

息切れもペースダウンができぬまま
頼られているなと思うねこじやらし

先頭を飛ばす車も赤信号

格好はそこそこ揃う虚栗

さわやかな空気配信致します

海南市

堂上 泰女

病氣してよけい頑固になった夫

尊敬ばかりでマザーテレサにはなれぬ

親子なればの会話辛口弾み出す

隔世遺伝か緩い夫にはしこい子

曼珠沙華にとまって映える黒揚羽

紀の川市

宇野 幹子

ちぎれ雲キリンの首も流される

出直そうまだ校門が開いている

もう過去は赦そう夕日あたたかい

三面鏡少し汚れた背を写す

ひとりっ子親の慈愛が重すぎる

紀の川市

北山 絹子

世の中を自由に泳ぐ雑魚でよい

意外にも別れたひとに看取られる

その癖が好きで夫婦になりました

釘付けになった女のサスペンス

大根が主役で秋が深くなる

紀の川市 楠原富香

ブライドも重荷になつて来た老後
リハビリの汗は明日の笑みを呼ぶ
肉じゃがに母のレシビが生きている
タイムカード押すと変身する真顔
反省が老後の海に浮いている

紀の川市 山東日出男

先頭はどこにいいのか蟻の列
土木技師も勝てぬ見事な蜘蛛の技
偵察機のようなヤンマのパトロール
ナナフシの好きな遊びは隠れんぼ
スズメバチむやみに人は刺しません

紀の川市 辻内次根

コーヒーをホットにします今朝の秋
焼き芋で芋焼酎を飲んで
素晴らしい二合の酒が効いている
生欠伸睡眠薬が昼に効く
独り拭く涙体温より温かい

田辺市 岡本昇

病む妻に水加減見せ粥を炊く
夢じゃない四十路半ばで嫁が来る
墓参道とおせんぼする彼岸花
ほどの距離でつき合っています
キッチンを嫁に譲って食細る

橋本市 石田隆彦

菌ぎしりと軒鬱になる真夜中
頂点に立てば新たに出来る野望
寝たふりで密かに野心育ててる
真実は一つ噂はねずみ算
頑張らずサボらず亀の足で生き

鳥取県 石谷美恵子

五体のハンデ負けずに挑む心意気
和服着るこの手はどこへどう置こう
ストレスの弾みで買った派手な服
潮時と思うしゃもじが渡せない
捨てて来た猫と夕日の中戻る

鳥取県 竹信照彦

双葉出る畑作りに苦勞あり
台風で五つも落ちたキウイの実
台風避難所わが家より低地
防衛費増大年金先細り
吾が世代武力増強より平和

鳥取県 西谷悦子

物忘れ生き方までも変えてゆく
またこんどハイタッチして孫帰る
歳重ね忘れ予防のメモを書く
古稀過ぎて時の流れの速さ知る
手を止めず情報聴けるラジオ好き

鳥取県 細田裕花

柿熟れてはがらかに秋やって来る
内心の揺れを笑ってごまかした
おそらくはグレーで終わるお騒がせ
平和主義日本人の顔優し
彩って下さい白い豆腐です

鳥取県 松川行男

あの世でも日帰り旅行彼岸の日
この頃は赤チンなくてメンソレも
常備薬置薬さえ使わない
さつま諸今に引きつぐ昭和の子
石破さん逃がさず見てるお爺です

鳥取県 山下節子

無意識に人傷つける事もある
おはようで始まる今日の家族の和
定退の潮時余力残してる
どっかりと私の場所がある我が家
どうみても舌は一枚しか見えぬ

鳥取市 池澤大鯨

栗拾い猿にはイガをはずせまい
部屋ごもり虫の音聞かず無に浸る
晩成かも身の細るまで鳴いてみせ
積み上げた実績なんぞ死ねばゼロ
こつこつと才がないから積み上げる

鳥取市 加藤茶人

呆気ない色恋沙汰は男折れ
図星かも知れぬ言わぬが仏とは
糖分が足りない妻のヒステリー
潮時は2島返還かも知れぬ
口出しは止そう標的変わるから

鳥取市 岸本宏章

改装の大阪駅でまた迷う
類似品ばかりサブリが迷わせる
減塩の梅干自慢して配る
進化して人間だけが嘘をつく
ストライクを見たことがない始球式

鳥取市 岸本孝子

それからは大事をとってローヒール
酒の量DNAは別らしい
核心になるとほける芸もある
もう一人の自分見付けるぶらり旅
回覧板うっかり三日止めていた

鳥取市 倉益一瑤

悪運の強い自分でそう思う
頂いた笑顔動悸が止まらない
毎日が戦鏡と勝負する
沈黙の時間カルテにある動悸
簡単ではないぞ人生八合目

鳥取市 坂本とも湖

平和へのハンデに北の核がある
窓際のわたしロミオにする月夜
ワルツ大好きだから三拍子で歩く
太鼓の音やがて神様目を覚ます
遣伝子の仕組みは神の技だろう

鳥取市 棚田 大

人生の潮時聞いて喝入れる
便利な世善悪生じくらくらだ
同窓会わくわくムードどんと上げ
運動会孫が俺ぬき笑ってる
諸体験乏しい俺も気は若い

鳥取市 谷口 回春子

旅立つ母へ愛と誠をアリガトウ
束の間の喋りで妻が蘇る
テレビ視るたび難癖つけるへそ曲がり
一步前常に先ゆく妻小言
投句まで寝不足続く締切日

鳥取市 永原昌鼓

雑草の粘り羨む老いの腰
どきどきと待った知らせはまたも没
古寺に五百羅漢の顔並ぶ
あれこれと悩み髪の毛薄くなる
生きている証し悩みの尽きぬ日々

鳥取市 中村金祥

舌足らずいつもハンデを背負い込む
守りたい君に守られ五十年
もの言わぬ写真が時を忘れさせ
人生にもしは要らない前を見る
また二人新婚みたい老夫婦

鳥取市 夏目 粹

歳は齢白髪染めなどしたくない
両方を開けてやらねば風は死ぬ
無駄口を吐かぬ男が浮いている
どこからが余った命かと思う
生きるため時どき命遊ばせる

鳥取市 西川 和子

痛い所増えて年には逆らえぬ
休めない皆に負担を掛けるから
虫喰いの残り健気に本葉出し
目に見えて緑を増して行く葉っぱ
間引き菜を白和えにしてサンマ焼く

鳥取市 平尾 菜美

御無沙汰をします其の後元気です
運命だと泣く鯛の今日限り
お忍びの未来すたすたもうそこに
苦しみを永遠に分け合う友であれ
死なないでよかった神をたてまつり

鳥取市 福西 茶子

遺されたお陰で強く生きられた

正装の母を観ました母の忌に

遺された八人みんな仲がよい

恩返ししてない継母よりアリガトウ

遅しく育てた父よりアリガトウ

鳥取市 前田 楓花

子宮まで届く一杯目のビール

風と出合い花と語らう田舎道

くもりの日曇りに合った仕事する

芸術の森で川柳まるかじり

しあわせに見られるだけでも幸せ

鳥取市 森山 盛桜

浮いて来たウィット酒が足りないか

一段を一步で踏めぬ時もある

地団駄を踏んだ所が道になる

団子の白は亡父の色亡母の色

木の葉散る音が聞こえるほど素直

鳥取市 山下 凱柳

指を折り今日もノルマで句を作る

心の空白埋める何かが欲しい秋

暇なのにもったいぶって手帳見る

生きたいが点滴をするのは怖い

積年の膿を吐きだせ小池知事

鳥取市 吉田 孔美子

切り西瓜真ん中食べて睨まれた

盆玉の付録となつてゐるスイカ

移り香を消そうふらりと遠回り

皺あまたでも切り傷はすぐ治る

慟哭は失せ豪華客船が泊まる

鳥取市 吉田 弘子

生きている証悪知恵まだ浮かぶ

ど忘れを思い出すから大丈夫

一センチの段差に負ける時がそこ

無理もない老体が言う寒暖差

若者に魅力ないらし鳥取県

倉吉市 猪川 由美子

女性天皇夢ではないと視野に入れ

ああ恐い点滴受けりや殺される

ガン闘病壮絶ブログよう読まぬ

陛下さまの懸命姿おいたわし

句ともだちの様子誌上で確認す

倉吉市 山中 康子

産声に勝る宝はないでしょう

善悪を見究めながら伸びていく

凄いなあ「あきたこまち」が狙われる

脳の糸からまぬように七分目

五ヶ月のひ孫のおもちゃになつてゐる

米子市 後藤 宏之

ウソつくと眉がピクツと動き出す
あれ見えぬこれが見えぬと大騒ぎ
鈴の音が会いたいという合図です
壁に耳うまい話は小さい声
深海魚慣れぬ世間に苦勞する

米子市 後藤 美恵子

苔むした廃校跡の石碑撫で
懷メロが人生たどる葉なり
方向の転換しない亀の足
平和の鐘世界に響く日は遙か
戦争を知らぬ議員に危惧募る

米子市 竹村 紀の治

補聴器の耳へ小さく「また来るネ」
台風が逸れて嬉しい休校日
未来への切符毎朝確かめる
ロボットは労働歌など唄わない
行進が下手で平和な国に住む

米子市 中原 章子

会えぬ人こころ離れてゆく無常
人生に今日限りとの覚悟もつ
敬老が軽老になること憂え
ストレッチ老いの体の切れ違う
カタカナ語素通りできず辞書を引く

米子市 成田 雨奇

太陽が今日は布団を干せと言う
パソコンが機嫌が良くていい日だった
動画にもツイッターにも縁がない
男湯の背中の龍に睨まれた
夕暮れだ酒が飲めるぞウツシッシ

米子市 吉田 陽子

にんげんでいようとすれば泣けてくる
兄弟姉妹等分でない病癖
緩めると絆はすぐに居なくなる
暮らしから磨いた心魔女になり
ときどきは鎧兜を着て逃げる

鳥根県 伊藤 寿美

あの日から一人で生きてきた曆
無欲な人が目立たぬ場所で光っている
愛された日のカーテンの花模様
わたくしを塩胡椒して味を出す
また花柄の傘買いました八十五

松江市 石橋 芳山

スキヤットで埋めとく穴のあいた胸
結論は待てない潮は引いている
コーヒーは苦くホームは下り線
薄味の男に根性が足らず
付け足しのわたしは隅に立ってます

松江市 藤井寿代

からから笑う重い話に疲れたの
シルエットの無い心にもあるみどり
うっかりとジョーカー掴み風邪をひく
手の平に夫をのせる得意技
幸せに手が届くよう背伸びする

松江市 松本文子

三食頂く人として逝けるよう
明日のない時代だったね芋御飯
忘れた振りする面倒くさいから
徘徊ではない反射タスキしています
さようならは言わぬ またねと去るつもり

出雲市 伊藤玲子

駅から五分師の墓参り途中下車
お節介顔出しそうで水を飲む
辛酸を嘗めた優しさ本物だ
結び目はうす汚れても固かった
あと少し楽しい声の中に居る

出雲市 岸桂子

日記帳ひと日の無事を書き止める
雑念はなしひとときを花という
亡母ならばどう耐えるだろう風当たり
家計簿がとぎれ多忙な日を送る
逆縁でなく順番の計が続く

出雲市 多久和敬子

芸なしの金魚が今日も尻尾振り
うっかりと壊した花瓶喋り出す
天国行きの切符なかなか届かない
ぶらりぶらり宇宙旅行に出かけよう
みどり食べやつと元気になりました

出雲市 竹治 ちかし

気が付けば身体立派な古稀となる
お陽さまを起こす暮らしのマイペース
のり弁のような資料を出す開示
斐伊川の水面と語り合う神話
良し悪しの予定で埋まる我が手帳

雲南市 松本 昌

なるようになるガン保険信じない
法要に卒塔婆知らぬ孫が来る
叱られていくらの世界店を閉じ
交通禍知らせる赤い花が咲き
生きる道昔の生活思う時

岡山県 池田たか子

戦場へ送る命はありません
ガン告知夫は悟った振りをする
アベックで行く病院とスーパート
木犀がホイホイ祭りつれてくる
先祖の田貸しても罪になりますか

岡山県 高岡茂子

岡山市 工藤千代子

リヤカーに乗って御輿がやって来る
したいことどんどん溜まる八十路坂
物忘れ友もしていて安堵する
夢で会うわたし若くて美しい
人生が輝いていた子育て期

岡山県 田中 恵

団栗も雀も好きな秋の天
秋冷や熱いおでんと熱燗と
ありのまま信じた人と生きている
一日を水のリズムで舞っている
百歳をゴールと決めた服脛

岡山県 紫 しめの

赤とんぼ世代交替迫られる
ピノキオの鼻をちょん切る仕事人
ひと塩が多いわたしの栗ごはん
本当の無垢か阿呆か決めかねる
ジグザグに生きております わたし流

岡山県 山 縣 のぶ子

峠越え孫が後押ししてくれる
へこたれぬボジティブで来た半世紀
げんこつをゆるめる妻がいて平和
乗り越えた山河ほのほの振り返る
火を抱いて転ばぬ術を知るダルマ

不機嫌を溶かしはじめている湯槽
スカーフで秋にしているのは案山子
世の中を猫も集まり話し合い
空を見上げることもなく秋になる
オフをオンにするドッコイシヨ

岡山市 永見心咲

湯かげんを父に聞くのも好きでした
大泣きをしました祭りそつと抜け
どの親も心配性で楽天家
動画からしばし静思の海になる
本当の親孝行は笑うこと

岡山市 藤成操江

大勢の輪にいてちょっとだけ光る
法要の中で笑っている昔
どこよりも厨の椅子が心地よい
こわごとと関所を抜けてきた五年
指折って作るわたくしだけの道

岡山市 前田 恵美子

「許さない」そう言えるほど強くない
ときめきを忘れないぞとお洒落する
ときめいてみるのは孫と野菜たち
札束をバンと積まれりやときめくか
曲がり角曲がれないけど明日がある

笠岡市 藤井智史

わたくしが散つても誰も知らぬ顔
勝負など知らぬ気楽な農耕馬

二次元のなかじゃわたしは王子様
難しい愛にもルビを振っておく

容赦なく婚活が待つ夜勤明け

広島市 岸本清

別世界見ているような股のぞき

思春期の孫の知行に大人色

妻は留守いちにち声を出さぬまま

ほろ酔いに口のチャックがつい緩み

カープVシーン見るたび目が潤み

竹原市 石原淑子

独りぼち怖くて泣いたかくれんぼ

故郷の新米便りもう来ない

十三夜トロンボーンを孫が吹く

影法師伸びて母の掌温かった

ボーナスの無い師走にもやつと慣れ

竹原市 岩本笑子

千の風もう振り向くなと言ふごとし

過去は過去コスモス揺れている

あの夢は何だったのか雨の音

穂紫蘇摘む秋をいただいています

井戸水の温しと思う冬近し

第五回 卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者 (各題2句)

「真」	森中恵美子	選
「線」	大西泰世	選
「粒」	木本朱夏	選
「息」	樋口由紀子	選
「影」	赤松ますみ	選

投句用紙 専用用紙(コピー可)またはA4大用紙

参加費 1000円(切手不可) 発表誌呈

締切 平成29年1月16日(月)消印有効

投句先 〒842-0103 佐賀県神埼郡吉野ケ里

町大曲2426-2

卑弥呼の里川柳会 真島久美子

TEL・FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼 一万円相当

各題佳作5句・有田焼 五千円相当

(その他サプライズ賞あり)

※ 男女を問わず たくさんのご参加を
お待ちしております

引き返す空はなかった特攻機
ベアルック僕でなかった犬に着せ
星影のワルツで又の日を誓う
かかりつけ医者もやっぱりお年寄り
お祓いを十分前にした事故車
旧友を巡って歩く老いの坂
落ち込んでいる暇はないあと少し
疑うことで苦しみが始まった
さびしいがいつも傍には猫がいる
飛べぬ鳥そつと休めよ母の胸

防府市 坂本加代

宇部市 平田実男

川柳塔の

川柳讃歌

(144)

上方芸能評論家 木津川 計

昭和遠く巨泉六輔千代の死去

海老池

洋

昭和を彩った有名人が他にもここ数年バタバタと逝った。高倉健、野坂昭如、菅原文太、愛川欽也、蛭川幸雄…、みんな独特の仕事成し遂げて逝った。東の巨泉、西の藤本義一も居なくなり、昭和一桁台はカラッポになった感が深い。「ここが命の捨て時だ」と殺されるのを覚悟で水野の邸へ向かった幡随院長兵衛が言う。「人は一代、名は末代」と。右の逸材たちも名を残すことだろう。洋さん、激変だった昭和を共に生きてくれました。

肌チヨツとつまみ老化をたしかめる

増井 ヨシ枝

肌の張りや弾力を僕もなくした。履いた靴の下がふくらはぎに食い込み、くぼみがくつきりとできるので足首以上は上げられない。手首には皺が寄り、なんぼでもつまめるが赤ん坊のふつくらとした肌はつまめない。

ヨシ枝さん、人は老化に向けて成熟するので。川柳塔のどなたかの、けだし名句が「順調な老化と言われホツとする」です。肌をつまめるのも順調な老化と思ひましょう。

順番に言わぬと次が出てこない

升成 好

「鹿政談」で記憶力抜群の桂米朝さんが絶句した。「大仏に鹿の巻筆あられ酒春日灯籠町の早起き」の「春日灯籠」で詰まり、もう一度「大仏に…」と繰り返し、また詰まりました。好さん、あの人間国宝、文化勲章がです。貴方は順番に言って「次が出て」くるのです。米朝さんよりずっと順調です。

僕も人名録を順番に繰りながら思い出せぬ名前を探り出すことが時どきあります。面倒だけど、成熟途上の工程で避けられません。

大違い若さの明日と老いの明日

竹信 照彦

寝ていた高村光太郎は自分の笑った声で目が醒めた。祖父に「魔がつくのだから気を張って寝ろ」と言われ眼を閉じたが、また笑った。祖父は起き上り、急急如律令と九字を切った。「その年私の十六が来た」と詩に。悪魔払いされて洋々の青春を光太郎は迎えた。

翻って天野忠の詩「旅の果て」である。粗

末な宿屋の晩飯にお内儀が「お粗末でした」と言った。「私も自分に云うだろう／ボツリ」と一言「お粗末でした」と／それから／死ぬ」

監視カメラ設置と書いて貼っておく

高瀬 霜石

昔はタクシー強盗が頻発したが、ほぼ絶滅したのは車内の監視カメラの所為だ。コンビニ強盗や街頭犯罪も犯人検挙に大きく寄与している。それはいい。だから霜石さんの犯罪予防策に感心する。感心するのはジョージ・オーウェルが一九四九年に書いた「一九八四年」だ。テレビのない時代に町や家の中を双方向テレビで国民を監視するのを見通していたのだ！八四年が既に三二年昔になった。

モンタンの秋がそろりと来て座る

山岡 富美子

思い出す映像がある。妻のシモーヌ・シニョレ亡きあと、三八歳年下のアシスタントと再婚したモンタンは六六歳、ほどなく生まれた男児を乳母車に乗せ、二人はブローニュの公園を散歩している。行き交う人がモンタンに挨拶し、男児を愛でる。秋だった。「枯葉」が流れてきて…。心憎い演出だった。そのモンタンは七十で逝った。今号朱夏さんも秋夜長イヴ・モンタンのモノローグ。と

自選集

小島蘭幸

瞑想をしている恐ろしい人だ
山頭火の句碑禅寺と紅葉と
城を見上げて男は街を出て行った
愛しきもののひとつになってきた軒
孫四人誰も一人で泊まらない

宮西弥生

予告ない秋は静かな時雨の記
名水も大河を目指す志
信号の赤は生命をチェックする
石の上三年遊び上手も心得る
焼くものは焼いて無心で出直そう

八木千代

試着室

心にも重ね着しよう 冬だから
泪だつて羽織ればあたたためてくれる
私の中の私も寒がっています
保ちたいのです 火種も体温も
透明のころも抱えて試着中

河川洋々

冤罪を神が見逃すから恐い
沈黙すると徴兵制が目覚ます
失望の時も自転をする地球
九条は守れ日本の国宝だ
豊洲市場で火ダネの地下が目覚ます

板尾岳人

十二月胡坐をかいているキャベツ
スリーボール・ツーストライク十二月
十二月八日餃子を食べました
大根のいびき健やか十二月
十二月今日もあしたも十二月

奥田みつ子

押し売りにつけ入るスキを与えるな
バラリンピック川柳負けずにガンバロウ
暑さにも雪にも負けず句を作る
句を作る友の元氣を見習おう
友の声元氣をもらう有難さ

川上大輪

動脈を時どき走る救急車
まだ二万五千日しか生きてない
街角のポスト人間臭くなる
贅沢にカップラーメン食べている
日めくりを全部捲つておめでとう

小西雄々

平凡で一石二鳥などはない
冬花火わかれた人はどうして
天気図へ当り障りの無い話
吠えるのは月と太陽だけに
雨と雪降るだけ降って大晦日

斉藤 劼

哲学の話が弾む蕎麦の花
一球入魂南瓜の旨い出来
アングルをかえて明日を模索する
この土と生きる喜びかみしめる
アンテナを磨いておこうかたつむり

新家 完司

風鈴が秋風だよとささやいた
人ごみに疲れた鼻に金木犀
イザナギもイザナミもいる村祭り
鯉が棲む清流の横ゴミ屋敷
四股踏んでスクワットしていざ句会

津守 柳伸

女専車にうつかり乗った荒い息
体重計三度計って秋のせい
天高く熟柿待ってる菌の事情
我武者羅に生きて八十路は気紛れに
公開の赤ちゃんパンダほのぼのと

都倉 求芽

十三夜昔と同じお月さま
お月さまだけはわたしの肩を押す
なにしても昔のようにはいなくて
自分にはどうにも甘くなる手抜き
自転車のほこり空気入れたこともない

土橋 螢

孝行を教えてくれる雀の子
荒城の月尺八を吹き鳴らす
恋びとが一番美人だと思ふ
さまよっている職がない金がない
押しつけられた会長は名誉職

西出 楓楽

幸せが背中を向けて去ってゆく
長い夜誘眠剤をまた追加
祈ること病魔退散ただ一つ
物おもい階段二段踏み外す
道はひらけるだろう明るく前向けば

仁部 四郎

この年も打率五割の下衆の勘
二社ばかり社説も読んで下衆の勘
家系図の下張りにある下衆の勘
殿中であらうと正義下衆の勘
史書よりも口碑に哀し下衆の勘

第157回 大阪川柳の会

エンジンがかからず動き悪い朝
心不調で今日のあれこれみな休む
心はうつろ書店の中をただ歩く
年齢と共糸もつれやすくなり
最後まで私らしくと動いている

若く見られ得たことはありません
豪栄道優勝談話河内弁
揺れる心重い聖書に支えられ
名もないが古里の川胸に棲み
自己申告する日がきつと来るのです

職人の鉛筆耳によく馴染み
差し伸べた手が被災者に届かない
背伸びしていると足元すくわれる
何回も絶好をした友情よ
何ほどのことやあらんと陽が昇る

政岡 日枝子

前 たもつ

三宅 保州

日時 12月14日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)

会費 △「そして」矢沢 和女 △「お」金 菱木 誠
△「ピンチ」河内 天笑 △「ワイド」森中恵美子
1000円 欠席投句 12月13日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田智彦宛

第30回 NHK学園全国川柳大会

日時 平成29年3月17日(金) 13時〜16時
会場 くにたち市民芸術小ホール

指定の用紙(コピー可)または大きさなど同形式でご投句
ください。ひとり何組でも、どなたでも応募できます。
(雑詠2句または雑詠2句+各題2句)

事前投句 「雑詠」(共選) 平井 義雄・森吉留里恵

課題 「時」 高瀬 霜石
「センス」 矢沢 和女

事前投句締切 12月20日(火) 消印有効
当日投句選者

「走 る」 高橋みつちよ
「いろいろ」 齋藤由紀子

投句料 ※課題吟のみの投句はできません

① 雑詠2句の場合 1200円

② 雑詠2句と課題「時」「センス」各2句、計6句の場合、
2400円

送金方法 ※当日投句のみの参加は当日12000円を頂きます
※郵便小為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)
現金書留のいずれかをご利用ください(切手不可)

用紙請求先・投句先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2
NHK学園 全国川柳大会事務局

TEL 042-572-3151(代)

賞・発表
・各題ごとに特選・秀作・佳作
・大会大賞・文部科学大臣賞の候補になります
・作品集は大会1ヵ月後に投句者全員に郵送

何気なく覗いたベットショップで、2匹寄り添っているシヤム猫が息子の氣に入り、離れ離れにするのは可哀想だからと雄雌二匹を飼う事に。名前は雄はロビン、雌はジェシカと息子が名付けました。ジェシカは氣が強くロビンはおっとりと対照的でした。氣の強いジェシカも私には従順でした。二年後に五匹の子が生まれ、四匹はそれぞれ知人に貰われて行き、残った雌一匹に息子がレイラと名付けました。レイラはロビンに似ておっとりとした美猫でした。

ロビンは八歳、人間で言えば四八歳で亡くなりました。それから一年過ぎた頃ベルシヤ猫のチンチラが迷い込んできました。放浪生活が長かったのか綺麗な顔だけ、体中枯草にまみれ汚れていました。餌をやりベットの美容室に連れて行きました。ピンクのリボンを付けて貰うと見違えるほど綺麗な猫に。私がマリリンと名付けました。ジェシカもレイラも二〇年生きて老衰で亡くなりました。

その後私は息子を亡くし、自律神経失調症、過換気症候群になり、乗り物は勿論、家に居ても独りになると不安でした。ソファで横になってみるとマリリンが心配そうに見守ってくれました。喋らなくても気持ちが通じ合うのが判りました。お陰で過呼吸も薄らいでゆきましたが、そのマリリンも老衰で私の腕の中で眠るように逝きました。

猫たち、特にマリリンは私にたくさんの癒しと思い出を残してくれました。「猫といえは珠子さん」と言われるくらい猫の句を書きました。木本朱夏さん監修の『ことばの国の猫たち』を開きながら、今は亡き猫たちとの楽しかった月日を思い出しています。

温故知新

『たかすききやう高杉鬼遊川柳句集』から

どうなろうとも友だちの名は言わぬ女にはとても優しい髭である

一ぬけた二ぬけて老いの二人きり

銀行の金庫へつづく穴を掘る

押さないで下さい卵を抱いてます

指人形哀しいことを知りすぎる

奥さんにもう聞いてますご栄転

鳩もすずめも人なつつこい無人駅

黒髪はおんなの情け夢二の絵

新しい軍歌が流行らないように

乗換えの度に小さくなる会社

年輪の一つに戦痕がある

花のない草よおまえに空がある

老兵として反戦の旗をふり

赤紙が突然に来る日を怖れ

端溪の硯と墨が知っている

花道の途中で幕が降りてくる

まっすぐな針で魚を釣っている



西出楓楽選

男鹿市 伊藤 のぶよし
幸せのかたちトンボのランデブー

蹴蹴く足にも足の物語

失敗も笑いの種の生き上手

強気などもつての他と影笑う

寄り道のざつくばらんが面白い

松茸もサンマも匂う両隣

八王子市 川名 洋子

輪から出たのんびり爪を研いでいる

深夜便聞きたい頃は夢の中

ちよつとだけ齧つてみたい毒リング

心まで魔女めいてくる鬼薊

フリーサイズが大好きな予定表

丸洗いをして私を陽にさらす

府中市 岸田 武

秋だねとただそれだけのことを言う

丸い皿まるく洗って妻は喜寿

招かれてこの世に來たのだと思う

ガラケーをパシヤツと折つて意を決す

クラス会女はやはり強いなあ

ボランティア以下同文の感謝状

横浜市 巖田 かず枝

締め切りに見切り発車のベルが鳴る

語尾にねを付けてメールの頼み事

いつでもか世界の子等の笑う日は

急かされる総活躍という言葉

神様の思い聞きたい時がある

バンドラの箱の閉め方難しい

豊中市 上出 修

夜の町哀愁帯びるジャズピアノ

初舞台踏む六方は祖父譲り

接待に思わず緩む審査の目

隠さずに恵みなさいよ大富豪

遠花火湖面に揺れる恋ごころ

安倍マリオ任天堂のジョーカーか

寝屋川市 岡 本 勲

欲しいもの何もないという嫌味
スキャンダルたたかれてから出る人
握手する手の中にあるバラのトゲ
スーパードで避けて通れぬ五割引き
換気扇まわし松茸一つ焼く
読めぬ文字褒め合っている書道展

堺 市 近 藤 治 子

歩けるを宝と思う古希の今
まっすぐに歩いた道はちと淋し
能天気一人まざって座が緩む
ブランドのドレスで出掛け浮いている
杖ついているとだいじにしてくれる
コーヒーを飲んでみたけど冴えぬ脳

尾道市 日 谷 寛

かけがえの無い人だから傷つけぬ
立ち位置は違うが心通い合う
恋ひとつ思考停止になりました
非現実花は素直ないろで咲く
抽象の真底を知る理解力
今日ひと日熱く語って日が沈む

河内長野市 原 熊 知津子

体温を知らず炎上するネット
ヒロインになりきっていた日のページ
満月が落ちてきそうなやましき

ピンと襟立て多数派に流されず

かすみ草好きあなたはきつとバラ
デザートにもメインにもなる五七五

西予市 西 田 美恵子

生きるとはこんなに苦勞するものか
しいて言えば万能薬のような母
哀しい日の花は哀しい彩になり
雑魚の中に鯛が混じってからもめる
トンネルの出口晴れとは限らない
同じお札なのに募金と裏金と

山口市 青 木 隆 子

父の待つ墓に燃え咲く曼殊沙華
いつの日も笑って母は縁の下
理解して覚悟できない母逝く日
笑ったら見えなくなった笑い皺
満ち足りた食事に思う飢餓の子等
踊り食い命を食べる人の業

大洲市 花 岡 順 子

珍客へすぐに米研ぐ母が居る
頑固同士クツション役の友がいる
そわそわは任せた筈の台所
ドジ踏んだ上にまさかの救急車
消しゴムが一つまさかを消していく
母ちゃんの小言聞き聞き呑む茶の間

沖繩県 島 尻 卓

サークルのポツリポツリの男たち
非正規で未来の地図が描けない
人のミスうるさい彼がよく遅れ
年金で暮らしていける夢を見た
呼び捨てで昔に戻る同期会

那覇市 前 川 真

言葉尻捕まえられてまた転ぶ
反骨の骨がボキボキ軋みだす
一服を間合いにはさむ名場面
巻き尺で計り切れない人の幅
助走して越えてみたい年の壁

札幌市 斉 藤 宏 子

ひたひたと迫る平和を壊す音
かあさんの一振りの塩シエフの味
道の駅安いの声に買いついで
晴れ渡る秋空持つて帰りたい
夫々の部分手当し今生きる

塩竈市 木 田 比呂朗

脚色もまじる師走の日記帳
延々と同期の桜三次会
ああ苦言スローペースで攻めてくる
鈍行の余生にねんきんのお供
青い鳥さがしの旅も先が見え

東京都 高 岡 弥 生

やっとこさしまえそくだよ扇風機
母逝った歳に近づく自分いる
親孝行したことにする孫沢山
栗や芋秋の味覚につい負けて
やっと来た新米の時期さんま焼く

福井市 伊 藤 良 一

座る位置少しずらせば違う風
つくづくと今は世につれ妻につれ
引き出しの奥には夢が眠りこけ
またひとつ情に絆され荷を担ぐ
生かされている今こそが僕の旬

沼津市 鳥 沢 無 午

防犯装置お客を何と心得る
苦しみの分割払いしています
平凡な夢を見ている緑色
コーヒーの中に溶け込む暇潰し
そうこれが衆愚政治と言うのです

静岡市 渡 辺 芳 子

おだやかな老女のままで終りたい
私達我慢の出来る世代です
老いの智恵子供達には通じない
運命に準じて小欲おだやかに
過ぎし日の語りつきない同窓会

鈴鹿市 小河柳女

ゆるやかな線を描いて会話する
フリータイムの睡眠は極楽だ
希望という雲にふんわり乗っている
山のかなたへ魂を飛ばすことも
旅の鞆はどきどきとわくわくと

大阪市 柴本 ばっは

冬木立腕を自由に伸ばしてる
伸ばしつつかもしつかり新芽だく
一病と妥協しながら元気です
迷いなく生きておりますひとりでも
糠床もちよつと冬眠させましょう

大阪市 松田 聰

壮厳な日の出見たくて船の旅
知覧にて平和の誓いあらためて
達筆につづった遺書に目を閉じる
おかあさん叫んで逝った兵士たち
武家屋敷みごとな庭に癒される

大阪市 宮村 満寿恵

鼻ピアス干支は丑どしだと思っ
成る様に成って何とか傘寿です
婆会は本音をはいて憂さ晴らし
冷蔵庫掃除も兼ねて一人膳
目や耳になって上げてる老夫婦

大阪市 森 廣子

ふわり嘘溶け込んだまま街は秋
角を曲がると優しい京の数え歌
嘘は嘘ノウゼンカズラ赤い舌
三度程踏んだ悪魔の様なもの
前頭葉の辺りちらつく白い鳩

大阪市 平井 美智子

キッチンという私の舞台裏
甘い水飲んでますます渇く喉
これからの探り続けているカルテ
終い湯の深さが抱いてくれる夜
残照の隙間隙間の彼岸花

大阪市 横山 里子

反骨の一軒残るビルの角
ときめかぬ脳の海馬に綿埃
聞こえます軍靴の音が地底から
亡き子恋う賽の河原の風ぐるま
猫撫でて心の隙間埋めている

池田市 上山 堅坊

タイガースへ厳しくなれぬ浪速っ子
とことんまで詰めることなく和をたもつ
土作りにちゃんと応えてくれる花
全没へ作り笑顔がぎこちない
同趣味と分かつて弾む初対面

泉大津市 助川和美

広島に四半世紀の夢かなう

タクシーを待たせたままでする墓参

炊きあがるまでわくわくの栗ごはん

胡瓜もみモロッコ産の蛸入れる

領収書偽造してまで金欲しい

貝塚市 吉道あかね

黙禱に浮かぶあの日のあの笑顔

猫ブーム残り物など知らぬ猫

会いに行くそわそわしてるイヤリング

下積みの汗が土台になっている

立ち位置を升えているかすみ草

交野市 田岡九好

ソレガドーシタ文句ガアルかと肚の中

コンマ一程度の意地で身を保つ

この夏を越える関所の風邪を引き

伝言板というものありきその昔

安倍さんがばらまきおれは財布見る

河内長野市 中島一彌

列島を風雷神が跋扈する

真夜中の夢を切り裂くバイク音

すれ違う笑いの止まぬ少女らと

男靴玄関に置く母ひとり

軽トラに愛犬乗せて畑仕事

河内長野市 穂口正子

乱暴に季節が移り衣更え

無くし物不思議なとこに隠れてた

もう一度花を咲かせる夢を見た

嘔吐かん写真の私老け盛り

野晒しの地蔵数えて京の寺

河内長野市 森田旅人

今あるは君のおかげと先手とる

木登りが得意お山の大將で

そよ風のコスモス揺らす子守唄

虫の音もお国違えば雑音に

沿道に八十万も満つ平和

堺市 小林若芽

孫と見るひと味違いうろこ雲

相談をすれば思案がくつがえり

労りへ自分の歳を言い聞かせ

好きな人へせめてきれいな切手貼る

投げ返す言葉のトゲは抜いてある

堺市 羽田野洋介

お得意さまと言われつついムダを買う

クラス会昔話が生きてきと

昔なんてついこの前と変らない

こっそりと戻しておけば分かるまい

問題はただ一言の過不足だ

堺市 松永庄三

怒り顔疲れませんか仁王さま
紙剥がし手伝う孫と障子貼り
手品でも解けぬ夫婦のもつれ糸
元氣だよ受話器の声に安堵する
遺言状仲良く暮らせ以下余白

堺市 大和峯二

笑えない世の中だから大爆笑
長寿にはやっぱり似合う笑顔です
酒の味わかり楽しまたひとつ
五七五作り鍛える前頭葉
孫のこと思えば平和気にかかる

豊中市 荒木郁子

道ならぬ恋も自由に小説家
降り続く雨がもたらす野菜高
甘いわな仕掛けられても金はない
雲いきが怪しくなれば電話切り
孫というスパイス脳を刺激する

豊中市 荒巻夢

瘦せすぎのさんま小店に顔を出す
道の端に名前負けて藤袴
クラス会焼けばつくいもとんとなく
地に足がついてる友でもの足りず
夫逝きソーメンの束残し秋

枚方市 山口弘委智

立ち止まり立ち止まりして句推敲
カド番が奇跡をおこし夢つなぐ
一行に思いをこめるむづかしさ
秋の夜は仲間で囲む熱い燭
昼寝して倍も生きたる心地して

箕面市 中山春代

うれしい皿をはみだす秋刀魚買う
残り物ならべ一人のバイキング
アリバイは日記がわりのカレンダー
故郷の南瓜とどくハロウィン
米を研ぐけんかした日も二人分

八尾市 前田紀雄

責任者出て来い小池名奉行
二日酔頭の芯がメルトダウン
北のドン警告無視で手に負えぬ
愛有れば後期高齢いぶし銀
こっそりと筆筒預金が満期です

大阪府 小栢こずえ

要領良く使われ嬉し疲労感
枯れ葉舞う人の最後を見るような
飾らない言葉でみなを和ませる
生きる知恵知らん分からん忘れたわ
太陽が元気を出せと誘い出す

大阪府 神野 千恵子

手触りもあつて単行本の味
平凡な日々で冷や汗もかかず
旅装解く狭い我が家が温かい
デザートの顔して葉また増える
姦しい人の寂しい影法師

大阪府 畑 中 節 子

老いて今生きがい記す農日誌
ゆれながらコスモス風に耐えている
淋しげな満月の夜の街路灯
気が晴れる老いの良薬無駄話
宿浴衣心も口も軽くなり

神戸市 玄 番 美恵子

夏帽子翳せば高き秋の空
心音を通わす母と子の命
目のうろこ落ちて先行き見えてくる
瀬戸際に立つて大人の顔になる
幸せが今日の命を光らせる

神戸市 輿 水 弘

ダイエット2キロ減ったと便り出す
ごっそりと薬味を取って知らんぷり
立てば膝座れば腰が怒ってる
回り寿司バスしたトロの行方みる
金婚はただただ感謝妻を看る

神戸市 細 川 花 門

入院の窓にまゐるいお月様
看護師は天使弓矢は注射針
院長が句帳覗いて笑い出す
自画自賛八十歳は花盛り
辞書を手にゲーテの「西東詩篇」読む

尼崎市 清 水 久美子

持ちネタは猫も杓子もオートファジー
栗を剥きつつ黒豆を茹でている
歳時記に頼る行事が増えている
ちびちびと食べる貴重なお裾分け
持ち込みが自由で流行る喫茶店

尼崎市 永 田 紀 恵

睨まれて監視カメラに会釈する
電波時計正確過ぎてせわしない
生き過ぎて越すに越されぬ義理の山
真知子巻きどんな鮎かと孫がきく
飲み会はドタキャンなしの半世紀

尼崎市 藤 田 雪 菜

肝心な時にケータイ切っており
その笑顔ふさぐ心を解きほぐす
涙腺をゆるませドラマ幕下ろす
最初はグーそして私のドラマです
秋の日を浴びて稲の穂出番待つ

伊丹市 平井 富夫

宝塚市 太田 としお

顔色も空気も読めぬ新社員

立呑み屋サービス椅子で客が増え

介護増え貯年金減るばかり

遠足日てるてる坊主泣いている

目を皿に掲載欄の句を探す

篠山市 永井 かほる

人間の勝手に枝が切り取られ

間引かれる葉もさぞやくやしかろ

ストレスも一緒に回る洗濯機

栗餅を今年も作る幸せを

洗濯で落ちる程度の愚痴一つ

三田市 幸田 厚子

ヘルメットはなせぬ視察知事多忙

サンプルと出てきた品は大違い

家計簿に赤ペン続くライン越え

五目並べ無心な孫が勝利する

無口でもこれははつきりプロポーズ

三田市 谷口 修平

台風の進路やきもきする案山子

サンプルより小さいじゃないエビフライ

収納のほぼ8割は妻が占め

親の無い小犬育てた猫の乳

記憶術習った事を忘れてた

老人ホームこんなところにもあるいじめ

棺桶の中まで財布離さない

静かですトラが負けたらお通夜に

外国で日本の良さを思い知る

真実と事実の間深い溝

宝塚市 丸山 孔一

物忘れ何処が境目認知症

何着ても世間気にせぬ歳になり

温暖化そんなやさしいもんじゃない

竜巻に注意をしろと言われても

医者軽く黄斑変性ですと言う

西宮市 株元 玲子

ささやかな幸せしかと握りしめ

最新のパソコン買って四苦八苦

時計が空回り月日走り行く

病とくすりたち鬼ごっこ開始

好奇心むくむく目覚め若返る

奈良市 高橋 敬子

ねちねちと言って本筋はずれてる

ねちこさで研究成果あげている

子の治癒を祈れる母に神宿る

迎賓館和の美の気品満喫を

新都知事よくぞあばいた豊洲地下

和歌山市 北原 昭枝

ボンボンと布団を叩く秋日和
柿熟れて静かになった過疎の村
靴紐を結びなおして花野まで
一歩いっば踏ん張ってゆく明日の夢
海峡を渡りふる里近くなる

和歌山市 平田 元三

街の声聞けば事実が見えて来る
冬至でも夏至でも歩く午前四時
スリム化でダンスから出た古ズボン
ラッキーが伴おうとも勝ち勝ち
ろくでない時に出て来る記録的

鳥取市 大前 安子

一歩引き聴く耳持てばおだやかに
妥協した風船雲に乗って行く
少々は氣取ってないとへこたれる
独り居てわがまま虫は強くなり
夫送り第三章の幕開ける

倉吉市 中村 毅

収穫期案山子の影も長くなる
無理しない眠れなければ聴いている
カープ女子今最高に盛り上がる
神ってるハムにもきつと言えますよ
百均でついつい買って損をする

倉吉市 宮田 風露

青空を呑み込むような大欠伸
食べて寝る容易に出来ぬ日も来るか
欲もある色気もちよつとまだ元氣
足の爪まだ切れるから大丈夫
忙しなく落穂啄む群雀

米子市 生田 和之

正論に愛も重ねて説き伏せる
子の悶え氣付く教師のいない闇
バスタからうどんに変える秋日和
カタカナを駆使し都知事が煙に巻く
七連勝で終わるダメ虎捨てられぬ

米子市 川本 美津子

美人短命私の寿命長そうだ
異常気象は神の警告だと思う
秋なのに脳は冬眠句が出来ぬ
古希になり賞味期間がすぎて行く
花眺め名前を言ってポケ防止

米子市 野川 宣子

年毎に自己採点が甘くなる
温泉のある町人も温かい
赴任地の水に馴染んでふやけてる
夫婦だから水に流せぬ言葉尻
時計の針戻すと父が母が居る

鳥取県 児玉規雄

秋彼岸待つてましたと逝つた母
雷に打たれた様な母危篤
亡き母の妻の手による薄化粧
慟哭の別れ涙が止まらない
柩には一杯詰めたありがたい

松江市 中筋弘充

忘れ物して騒げるうちは大丈夫
マドンナのダンナに会えるクラス会
勝算があつて詐欺師を待ち構え
神在月小窓を少し開けておく
艶っぽい話も聞ける散髪屋

瀬戸内市 片島秀月

頼られて頼つて妻と試歩の道
人生を賭けるルーレットが回る
支え合う人と言う字が大好きだ
平凡な暮らし夫婦で漕ぐ小舟
愛さんさん地球を抱いて陽が昇る

瀬戸内市 東横ますみ

空と泣き空と笑つてきた私
キッチンでうっかり踏んだのは地雷
ふり向くとアカンベーする昨日今日
スマホ繰る指の向こうにある無音
許すもの許してエンディングノート

瀬戸内市 宮宅比佐恵

どしゃ降りの被災地案じ義援金
輝いてキリトリ線の中にいる
目を閉じて心静かに遊ばせる
手間かけぬ老母になるよう輪に入る
明日からはそれより今日の今のこと

尾道市 小畑宣之

意地と見栄捨てて気軽に生きて行く
うちの嫁愛敬あれど重い腰
笑うより笑われること多くなり
一夜中恋を語るや虫の声
人生の途中彩る恋や友

三原市 鴨田昭紀

逆らっているのか雲が流れない
湧き立っている青雲のころろざし
のつべらぼうで暮らす都会の無関心
丸まって余生を送るダンゴ虫
少年のブレーキがすぐ故障する

三原市 笹重耕三

解凍しても今年の夏へ戻れない
今日聴いたこと幾つ覚えてるかハテ
サングラス掛けてにんげん素を通す
矢印があつて疑う天邪鬼
十二桁にこの身任して仕舞おうか

三次市 伊藤寿子

負けるなと亡母さんの声聴いたよな
度肝抜く事件ここにもかしこにも
苦勞した昭和恋しいなげだろな
氣が付けば終活少しずつしてた
老眼鏡拭けばあなたのこころ見え

宇部市 高山清子

方言で話せば角も丸くなり
温かい言葉決意が揺れ始め
五輪見るぞと意氣まく老いは卒寿すぎ
おりを見てなどと遠のく顔もあり
老人会あれそれで盛り上がり

山口市 中前幸子

プランコを天までこいで星ひろう
大都会の森でたましい彷徨えり
思い掛けない人とゆかりのヒストリー
風花を手を受けながら第九聴く
雪深い里で水車は寡黙なり

松山市 神野きっこ

食卓も泣かせています野菜高
財源がないと言つては吸い上げる
沖繩の青さ届けるミニ句集
何目指す息子が母に問いかける
人生も開き直ればあはのはは

松山市 柳田かおる

折れたエンピツ出直せばいいじゃない
折り合いを付けたわたしと握手する
こんな日もあつたと思う青檸檬
愚かさを笑うもうひとりの私
幸せに思うわたしの役がある

今治市 渡邊伊津志

今引いた辞書を又繰る血のめぐり
余計だと思ふ言葉に育てられ
温度差のせいか話にズレがある
俺流を止めると学ぶ顔になる
悔いのある人生だから面白い

福岡県 本田さくら

「雨いやね」タマは目をみて「ウン」という
彼岸花故人と秋を連れて咲く
朝庭で体操します呆けぬため
老人クラブ心まだまだ若いです
ゆらゆらと楽しかったカランドセル

佐賀県 真島久美子

四捨五入されて小さい秋のまま
諦めるしかないと言う哲学書
落とし穴の中にも落とし穴がある
絵葉書に女心を追加する
遠吠えをしよう自分を認めよう

弘前市 高森 一 吞

アルコール依存症かと妻が言う

毎晩が氷のような妻視線

孫自慢手短に願います

台風で震いとまらぬリング達

弘前市 肥後 和香子

アンパンマン見ながらビール飲む時間

わくわく度通信簿に似た健診表

冬前のたんぼ意外に男らしい

男らしい女と飲むのがベストです

弘前市 吉川 ひとし

満月も秋の夜長に疲労する

同居して家紋引き継ぐ娘婿

近寄っても吠えない犬を替めてやる

鼻唄が零れる妻の赤い靴

つくば市 嶋本 喬

頑張れと励まされたがあとは霧

嫌われるおならオベ後は喜ばれ

酸素ボンベリハのおともという重さ

看護師の仏が鬼にさあ歩け

上尾市 中村 伸子

花の水替えて少しは花に添う

月下美人三つも咲いて独り占め

金婚式気づいてくれぬ娘がいます

おでん鍋二日は食べる気で煮込む

松戸市 山下 明子

富士の裾野コスモスの海ひとよぎ

節約の図書館通い早や九年

車検切れのMRIお年頃

廃屋の片隅から子猫の声

横浜市 川島 良子

無駄という事はないはず生きる道

恥かいてかいて上達への一步

苦勞など笑顔でフツと消しました

神様もやはり美人が好きらしい

横浜市 長島 亜希子

大器晩成信じ成績票を見る

霧雨だお肌に保湿してもらお

防犯カメラにまたお出かけと見張られる

あっぱれな女子力ここで絶やさない

佐渡市 高野 不二

賞味期限昨日位が丁度いい

年金はいいなまけても下がらない

赤い羽根の戸別訪問逃げられず

宴会の前の薬を早く呑む

江南市 脇田 雅美

不器用にぶらり歩いた俺の道

SLに乗って昭和をトッピング

笑うだけ笑って母はうれし泣き

苦も楽も長い人生スラローム

豊橋市 藤田千休

食欲を秤にかけてダイエツト
アンケート見栄と本音が書いてある
策を練り策に溺れている軍師
算盤の珠に赤字を悟られる

京都市 櫻崎篤子

友の苦を飛ばしてやろう青空へ
日記帖十年前も書いたこと
冬の川やっぱりどじょう居るんだね
元氣良く唄えば昭和の頃の声

大阪市 磯島福貴子

背のジツパー腕が回らず四苦八苦
夏バテに終止符打てず医者通い
花届き記念日思い出す夫婦
玄関に盛り塩をして論吉待つ

大阪市 高杉力

ジンライム貴方の嘘を聞いている
立ちこぎで夢の背中を追いかける
切れかけの電池背負って続く旅
箱庭の中で居場所を探してる

大阪市 田中廣子

秋空に紅葉が映えて心打つ
天高く人肥える秋迎えそう
やがて来る別れ思うと胸つまる
若冲の心とらえる筆さばき

大阪市 田中ゆみ子

わたしはわたしダイヤモンドは似合わない
一駅を歩きましょうか十三夜
台風の行方誰にも止められず
口癖は今が幸せ猫抱いて

大阪市 中島栄子

目の前にあるのに探す老いたる目
一番風呂清清しいが落ち着かず
探し物出て来た時の安堵感
朝寝朝風呂いいかしらこれ主人留守

大阪市 梅里南天

老木に話しかければ響く声
認知症という言葉出てこず大慌て
不祥事に平の身分を感謝する
おなかの子男か女聞く時代

大阪市 前川善之

健康は幸せになる一里塚
優勝を口に出したら夢適う
カープカープ敵わぬ夢も今そこに
愛された爺ちゃん達も認知症

大阪市 吉田知之

怖いけど娘の助言母のよう
低所得話しあうのはぐちばかり
記事見出しアルファベットに仮名漢字
格言もヒントになつて作句する

河内長野市 松浦五月

年とれば犬になりたい人ばかり

トッブよりまんなか狙う家の孫

命日の墓参りまだ行けてない

扇風機も炬燵も出てる神無月

河内長野市 渡邊修

角番でまさかまさかの大賜杯

パレードで笑み満開のメダリスト

梯子酒二軒目からはスマホオフ

ドクターが自分のオペに脅えてる

堺市 梅木澄空

仏壇のドーナツに孫うれしそう

脳トレと聞けばさておきメモをとる

肌合わぬ人と揉め事起こらない

肌の色顔と首とにあるギャップ

堺市 山崎早苗

素敵ですその一言で背筋伸び

料亭のもてなしごとき友の家

いつの間に冷たい雨がぬらす秋

調子どう聞かれて病氣思い出す

四條畷市 西川ひろし

中秋の月も雲間に恥ずかし気

天皇も我に一言あると言う

秋冷えに北のお国は熱いまま

十六夜にロマン欲しいよ喜寿の我れ

高槻市 三谷白黒

責任をとらない仕事お役人

充分だ時間睡眠お食事も

齢とってきれいな人はまだきれい

洗車した翌日なぜか雨が降る

豊中市 貝塚正子

カイロ持つ冬の花火に君偲ぶ

手を右へ左へ振ってバスガール

手の平に地球乗せるか神仏

もうそろそろタオル投げてでも良いですか

豊中市 源田啓生

戦争をしなけりや何とかなる暮し

老い夫婦ど忘れならば数知れず

住み暮すほど愛着が湧く我が家

断捨離に自分ばかりは捨てられず

富田林市 小出修三

生活力に不安抱かせる孫の彼

どこへ行くにも自転車は杖がわり

弁当を開けたら僕の顔だった

重い腰あげて草引き屋敷内

羽曳野市 磯本洋一

羅針盤なくて烏合の声で行く

満天の星を帰省の屋根で見る

政務費を小遣い銭と勘違い

父母墓前喜寿の報告今日終える

羽曳野市 仲谷真一

都知事さん予想以上に健闘す
熊本に阿蘇山までが噴火する
アニメでも感動よんだ君の名は
寝屋川が喜びに沸く豪栄道

神戸市 近藤勝正

枚方市 坂本ミヨノ

早起きて朝の残月追うている
疑いもほどほどにして伸直り
杖ついてダイエットまだ女です
スーパーの物価平均見て求め

加西市 山端なつみ

箕面市 寺井柳童

豊作に田んぼの案山子うれしそう
もったいないご飯ひと粒母の声
廃校舎再開発し道の駅
産声は何を伝えているのかな

川西市 日野岡和之

八尾市 田邊浩三

通信簿持つてくる孫来ない孫
若い頃燃えた炎は今炭
台風をいくつ呼ぶのか温暖化
台風は連休などは気にしない

篠山市 佐々木勇

大阪府 高木道子

横並びの秋刀魚べっぴんさんを選ぶ
掌にナースメモして軽い足
何げない振りして秋の蚊をたたく
アンダンテけど躊躇わず前向きに

篠山市 長谷川善輔

新涼に虫音呼び込む灯消し
曼珠沙華秋雨きらい赤く揺れ
捨て猫の主を恨まぬ潔さ
あの猫がいつの間にやら地域ねこ

寝たきりになれば欲しいな象の鼻
礼なんかいらんてマジでホントなの
国会より都議会映すワイドショー
いつまで持つか農機と歳を思う

ひとつまみ旨さの秘訣塩加減
老人と察して停まる赤とんぼ
長き夜や反省しきり虫の宴
薄味に慣れぬままなり退院日

わだかまりちよつと流して酒を注ぐ
金銀が増えた増えたのリオ五輪
苦勞した分だけたれている稲穂
八十八お天道様に日々感謝

どうしようもないスポーツおんちのわが家系
八十爺テレビの前で根が生えた
五輪呼び無駄金遣いの人たかり
災禍ない地域ねらって豪雨来る

篠山市 藤井 美智子

すき間から覗くスリルと好奇心
わだかまり洗い流した笑顔いい
蛇口からほとばしる水ありがたい
目標は元気で生きてコロリ逝く

三田市 辻 開子

扇風機ストープ同居老いの部屋
台風が去った爪痕呆然と
食の秋好ききらいな心負け
介護され年数経てば愚痴も飛び

三田市 東内 美智子

お手お座りお預けしたら餌につく
各部屋に老眼鏡を置いてます
田舎道尋ねすぐそこそここない
織田作も歩いた坂はもうきつい

三田市 馬場 貴美江

道の端で歴史みつめる道標
駅前ビル林立で地図変わる
虫の声夜空で競う夏終い
雷鳴に夕立恋しま昼時

三田市 松本 ゆかり

ふるさとを捨てても耳に笛の音
獅子舞いはモータープールの邪気払い
歯は命なのに次々悪くなる
あきらめて敬老会のまねき受く

三田市 宗福 清司

型破り意志するのはサギ行為
喜寿間近スリル感覚減ってきた
何事も短めが良い昔から
ちゃっかりとまだやっている政活費

三木市 山口 久子

一日を明るく過ごすデイ通い
敬老日ひ孫九人で祝歌
ひ孫たち祖母のひるねに子守歌
大家族名前呼ぶのも苦勞する

奈良市 尾畑 なを江

九十九ピンコロリとはうらやまし
あれこれと迷っていると犬が吠え
一斉に金木犀が語りかけ
目を見張る過ぎゆく早さ四季の庭

和歌山市 倉橋 悦子

新聞の折り込みに見る景気向き
三面の記事に怖さが降って湧く
チャネルを変えても同じ娯楽室
売れるものブランド品もない暮し

和歌山市 鍋嶋 澄子

オイチニサン二人三脚息合わす
絵手紙で芸術の秋かじつてる
腹の虫毎度忘れず刻知らす
病む人へ空の青さが眩しくて

和歌山市 福呂秀子

今有るも先祖の力改めて
世の憂さを忘れた様に稲穂波
身の丈に合った日暮し感謝する
恙無い幸せ大事丸くなる

岩出市 村中悦男

美田が消えて今やはやりの家が建つ
軽い会釈曲がる手前のさようなら
先ず健康うねり曲がった道すがら
エンディングノートへ重いベン先の

和歌山県 森下よりこ

可愛かったあんな時代もあった子等
豪栄道の優勝とてもいい気分
朝早く起きて惣菜二三品
彼岸客帰りほっとするひとり

鳥取市 奥田由美

ヒザ痛が増えてイス席クラス会
リハビリに睡魔呼びだすピアノ曲
ハンサムな顔に一票選挙の日
明日から目出たく後期高齢者

鳥取市 田中天翔

幸せは無心で作る五七五
仏像を無心で彫って遊ぶ夫
通知表3の人生上出来だ
私の沸点低い要注意

鳥取市 津村律子

チエルノブイリの今も苦しむ街の人
被爆国七〇年の深い傷
ノーベル生理学賞讃美大隅さん
全勝も想定外の豪栄道

倉吉市 大羽雄大

離れた風船みんなが空を見る
そらそうだいりろあろう聴いている
祝膳身内ばかりだ並にする
親子とて血液型は違つてる

倉吉市 岡崎美知江

この絆かなうものなし親子展
ひよっとして本音かくした笑い顔
萌える色絵筆に重ね夢染める
小手調べ直球池に投げてみる

倉吉市 田中紀美恵

稼いでも泡と消えゆく子の学費
ご先祖のDNAは病持ち
返す言葉ありがとうねと笑顔する
口答え親を亡くして悔い残る

倉吉市 堀かずこ

長生きをしたいやりたい事がある
生きていく何の取得もないけれど
幸せは心の窓に歌がある
外出の予定はないが紅をひく

米子市 池岡 たけし
目が覚める寝具の恋しさ日に増して

兄妹仲良く暮らす古い家
海も良し山も名山山陰の里
山みどり海は青青深い色

米子市 田村 周子

たわいない話の中で気が和む
夕暮の散歩で脳を癒して
温泉でゆっくりつかり先思う
パラリンピック老いに元気をありがとう

米子市 永井 美津子

孫の無心ひとつ返事で金送る
祖母真似て蠟を敷居に塗ってみる
弟よ姉より先に逝くでない(弟大腸癌で入院)
死ぬ時がわからないから生きられる

米子市 森 協 麗

人間を女を捨てて見たくなる
夫のいろに染められました五十年
久し振りビートの効いたジャズを聴く
シューズボックス捨てるヒールの高さ見る

鳥取県 飯野 菖子

もう一度若くなりたいそう思う
思いきりズバリと言った心地よい
考えは母から貰った宝物
憲法は平和のバトン未来まで

鳥取県 門村 幸子

地位協定無念はつづくシマンチュー
心の揺れ出ていないかと鏡見る
内緒話できぬ地声がよく響く
狭すぎる流行る蕎麦屋の駐車場

鳥取県 下田 茂登子

達筆な夫の手帳が捨てられぬ
どっこいしょ気合を入れてやと立つ
仏さまの前で過ち懺悔する
行く場所が見えぬ一人身経上げる

鳥取県 高原 かおる

娘らの花束が来た誕生日
陽だまりに猫の恋する昼下り
草の芽が芽吹いて今日も戦争だ
本望と言おう娘ら片づけた

鳥取県 橋谷 静江

重い物持てなくなってもどかしい
まだ出来ると息子信じて手伝わぬ
野良仕事している夫はイキイキと
犬散歩時には友と立ち話

松江市 相見 柳歩

のびのびと育つかスマホばかりして
虫ほどの値札クラクラしてしまう
敵味方分けない方は天国へ
きらめいた過去をどんどん超えて行く

松江市 福岡左余

共存と神のたまうか猪禍

見晴しのよさへ切った樹うらむなよ

闘志湧くなめた苦汁に背を押され

坂道へ生き抜く汗を弾ませる

松江市 山根邦代

上向いて笑えるならば大丈夫

親切の種まいてたら花は咲く

笑顔には感謝の心込めてある

頑張れば大きな花の咲く気配

安来市 原 煩惱児

施設に居て夫忘れた妻愛し

母ちゃんへ家族で贈る金メダル

お墓よし散骨もよし御自由に

好々爺鬼婆さんでいい夫婦

出雲市 黒目英男

反戦の恒久平和願ってる

どん底が人一倍の努力生む

アイデアが枯渇せぬよう本を読む

この道を迷わずいつもまっしぐら

雲南市 菅田かつ子

ばあちゃんが好きと嬉しいことを言う

投函をしてからふっと気にかかり

何回も聞いたと娘あつけない

目に見えぬ仕事で今日も忙しい

玉野市 片岡富子

行き止まり仕切り直してゼロの位置

夏痩せも夏ばてもせず秋になる

缶潰しストレス飛んでエコになる

一万歩たまに達成乾杯日

竹原市 土井輝恵

玄関に埃があつて暖かい

末っ子はいつも後出しジャンケンで

分け地等要らぬと捨てた里が呼ぶ

遣り甲斐のある仕事らし孫光る

竹原市 六田半徳

秋祭り心ばかりの寄付も出来

町内に新築家屋おめでとう

夕暮れてお向かいさんの灯がうれし

赤ヘルが夢実らせて滝登る

府中市 田辺和子

涼風に脳の細胞立ち上がる

米づくり止めて産地の食べ比べ

わが町のニュースかき消す東京都

ふる里は牛馬の神に水の神

下松市 有海静枝

一億総火の玉結果焼け野原

マイナンバー国だけ握るマイ素性

アイドルに徴兵制がある隣

核入りの将軍様のおもちゃ箱

松山市 郷田 みや

木犀へすでに返事は決めている

昨日とは違う私に星マーク

不意の客確か羊羹あつたはず

一日の隙を埋めているスマホ

高知市 三谷 松太郎

ひとが好きみんなが好きでわれも好き

大好きがまっすぐ宇宙駆けてった

句にもよみ隠してませんこの思い

納竿の時刻まだまだ日暮れまで

北九州市 小松 紀子

つかず離れず今が幸せギブアンドギブ

年重ね母の気持ちは今わかる

お財布がわりじゃないんだ政活費

まだ少しのびしろありと信じよう

唐津市 岩崎 實

医者往診元氣出してと薬ふえ

徒に時間費やす自分責め

世界地図拡げて探すコロンビア

武器製造輸出可能はこの国

佐賀市 清水 園實

のみぐすりコタツの前でのみ忘れ

顔洗いめがねをさがすあちこちと

眠れずにベッドの向きを変えて寝る

ストレスも歩いて脳の活性化

山鹿市 中山 好汰

孫七人久しく集いえびす顔

稲穂たれ収穫真近意気あがり

せみの声いつしか変わる虫の声

コスモスの満面の笑みほころばせ

山鹿市 前田 幸子

どしゃぶりもあつて庭木も緑濃く

体育の日デイサービスではずむ胸

十字路でかわいい生徒先にやり

バッチリと芽出した青菜虫に負け

山鹿市 柳田 白沙

チューリップ五列並んでドレミファソ

私利私欲それがないから今がある

二畳半家庭菜園自信作

無農薬かえって高値材料費

沖縄県 禰^{いのり}キヨ

秋暑し日毎降る雨冬仕度

天才は自ら努力して光る

子育ては今以って母のお手本

八月は御霊弔う終戦日

沖縄県 高良 秀光

道半ば悔しさ胸に立ち上る

定年後心のままに生きて行く

暇な人ただ愚痴だけをこぼしてる

決まり手にあげ足取りも入れておく

涼秋に優雅に踊るトンボ達

沖繩県

宮城 スミ子

(宮すみれ改め)

ほれちゃったあの日あの時胸キキユン

小雨降る久しぶりだね二人傘

耕せばミミズの一家あわててる

シドニー

坂上 のり子

あなたが死んだ年は熊本大異変

泣くな泣くな待っててやるよと天の声

誕生日いっぱい祝ったら長寿

居候去って私を取り戻す

札幌市

富永恵子

聴講で拾った知恵の使いみち

秋空に笑顔こぼして立ち話

ふくらはぎ秋よ秋よと和解する

おしまいトマト一粒秋の庭

(前月分) 三原市

笹重耕三

足払いされても怯まない極意

年金の枠が崩れた夏休み

夏バテか老いか進まぬ箸二膳

新鮮に見えるが二番煎じです

(前月分) 大阪市

松田 聡

親友は会わなくなつて通じあう

痛み止め飲んで効き目ないころ

一銭五厘意味を伝えてゆく平和

花森氏今の世界をどう見るか

誌上競詠川柳「咲くやこの花賞」

	題	選者	締切
第1回	切る	森中恵美子	2月20日
第2回	狭い	井上一箇	3月20日
第3回	線	笠嶋恵美子	4月20日
第4回	ごっこつ	嶋澤喜八郎	5月20日
第5回	逃げる	前年度優勝者	6月20日
第6回	沖	徳永政二	7月20日
第7回	頬	赤松ますみ	8月20日
第8回	奔る	零石隆子	9月20日
第9回	破る	新家完司	10月20日
第10回	機械	天根夢草	11月20日
第11回	武者	大野風柳	12月20日
第12回	彩り	小島蘭幸	1月20日

ハガキに2句

投句料(掲載誌料含む) 1年 2000円とする

送金先 〒547-0006

大阪市平野区加美正覚寺3-5-5-304

投句先 〒532-0033

大阪市淀川区新高6-7-5

鶴田 寿子

新川柳鑑賞 (58)

麻生 路郎

家族湯へ大阪からの電話です

(形水)

大阪というところは、働きもするが遊びもする。温泉と言う温泉が大阪人のお蔭で息をしているようにも思える。この句大阪人の発展をうまくキャッチしていると思う。家族湯に浸っているけど、大阪から取引上の電話がかかって来るほどの抜け目のない活躍振りである。

通る人なくとも遮断機の律義

(珠笑)

誰一人通る人がいなくても、遮断機は雨が降ろうが、風が吹こうが、夜となく昼となく、列車が踏切を通過する時間の前後には必ず開閉するので、その正確さを眺め面白く感じて詠まれたのであろう。

律儀という語が、この句の場合、遮断機を擬人化したので、一層興味深いものになっている。

パンガロー今宵は月が出ぬそうなの

(水鏡子)

「今宵は月が出ぬそうなの」は流行歌からの文句取りであるが「パンガロー」と上五

を据えただけで二人の情熱を燃え上がらせるところに、この句のいのちがある。引用句の多くは、そうした成語に引きずられて失敗し易いものであるがこの句のように殆んどが引用句で埋められていて句をなして抜け目のない活躍振りである。

踏切はジンガジンガと夕焼ける

(水客)

駅の近くのあわただしい踏切の情景を巧みにスケッチした句である。ジンガジンガという擬音が踏切の夕暮れのあわただしさ、車輻の通過を待つ間のいらだたしさをうまく表現していて、しかも、作者はそうしたあわただしさの中にいて、踏切の向うが夕焼けている美を見のがさなかったのである。

八百年の庭へボールが打込まれ

(草右)

建仁寺垣で名のある京の建仁寺を詠んだ写生句である。八百年の歴史のある寺の庭も、時代が変わると野球のボールが打ち込まれる。静寂であるべき古寺も時の力には抗することの出来ないことをこの句に描出したのである。一つの発見か。

混亂の世へ電柱は手をつなぎ

(二也)

ジツと電柱を見渡すと、電柱という電柱が一列に手をつないで一つの仕事を完遂していることに気づくであろう。人間はどうして手がつなげないのであろう。日本人同士が血を流さねばならぬ基地の存在も悲し

いことに違いない。そこに住む人達のことを考えてやろうとはしないで、弱肉強食を敢てする行動がいつになったら絶滅するのであろう。この句の諷刺をしみじみと味わって欲しい。

シグナルは青だそれ行け子澤山

(一飄)

都会の交通量は殖える一方である。少々馴れているのでも街を横切ると言うことは命がけである。

昔は本を読みながらでも歩けたものだが、近ごろではそうないかない。ウツカリ考えることもしていないものなら、間違いく自動車にハネ飛ばされてしまう。

誰かの句に「御堂筋スローモーション引っ込んだ」と言う句があるが、全くその通りで、スローモーションの人には御堂筋などは横切れるものではない。

ここにあげた句を読むと、子どもを四、五人も連れた母親の街を横切るさまが、髣髴として眼に浮かんで来る。街路のスケッチであり、穿ちの句でもある。

眺望がよすぎ賽銭わすれられ

(花村)

旅をした時の句であらう。山の中を幾曲りして絶頂の神社を訪ねた時、眼界が俄かに開け、眺望が素晴らしくよすぎたので肝心お詣りした神社へ背を向け、ただただ景色にみとれていて賽銭のことなどは忘れたというのである。その時の旅人の心境を巧みにつかんだ句だ。

誹風柳多留一二篇研究 42

石川 道子・小栗 清吾
細井 龍夫・伊吹 和男

山田 昭夫

清 博美

338 さあやろう来いとおやぶん水子抱キ

石川 水子は、出産後あまり日のたたない子、赤子。親分は任侠の世界の親分。

生まれて間もない赤ちゃんに、さあやろう来い、とはいかにも親分らしい呼びかけである。

赤子をもおやぶんやろうよばり也

天五智 8

おやぶんハ美しひのをあまよはり

四 21

清 賛

339 馬喰丁死んだ役者の絵などかい

石川 馬喰町には公事宿が多い。田舎から出府し訴訟のために宿泊している客が死んだ役

者の絵を買うというのだが、江戸の役者に詳しいわけではないので、好みの姿形だったから買った。たまたま亡くなった役者だったのか。死絵もあるが、これは寛政頃からはじまったとされているので、もし死絵であればそのハシリといえよう。

つら見せに行かぬかといふ馬喰丁

明四礼 8

坂田菊之丞がいと馬喰町

安五義 5

い、かげんどちらにしてやる馬喰丁

安八松 3

小栗 田舎者だから、役者が死んでしまつてプロマイドとしては不人気の売れ残りの絵を買つた、という状況を設定して、馬喰町の句になると思う。

清 賛。

340 しやうぎをバ式番まけてハ金をかり

石川 借金をしたいが、相手に気持ち良くお金をさせるには相手の弱点をつくに限ると、わざと式番続けて将棋に負けておいて、実は、と切り出し借りることができた。

しやうぎにはいつわりまけて金をかり

天七驚 1

負さうな手を考へる御相手

五四 8

不屈な智恵生酔に金をかり

三〇 16

伊吹 二番は三番勝負の二番か。

小間ものや錠口番に二番まけ

拾一〇 18

清 賛。

341 まな板を帯ひろどけでたゝく也

石川 正月七日は七種の祝い。俎になすなを置き、そのかたわらに包丁・杓子・火箸等台所七具を添え、包丁を取って打ちながら「唐土の鳥が日本の土地へ渡るぬさきになつな七種」と囃す（『守貞漫稿』、略記）とある。早朝起きぬけに、寝所から出てきたままの姿で行っているであろう。「なな種を女のたゝくけちなうち」（天五梅一）とあるので、原則的には男の仕事だったのだらう。

ふんどしもせず三草か四草打ち

安六板5

七種を日向でた、きわらわれる 安元仁1

七くさを寝床で笑ふにくらしさ 三38

ぎやうさんなもののハ薺のりやうりなり

安四叶1

清 賛。

342 あたへ千金の夜なへハむらさぎや

石川 むらさきやは、染物屋、ただし江戸の。

春宵一刻値千金とばかり、染物屋が夜なべで、やはり値千金の検校の紫衣の染めを急いでいる。

春の夜と紫同じ直段也

四四8

江戸染一ツたんあたひ千金也

一三39

一ト夜に染た紫ハ黄をうばふ

三〇10

小栗 賛「夜なべ」で「一夜検校」を示唆するか。

伊吹 賛。小栗氏説にも。

清 同。

343 文ぜんを妾側からひつたり

石川 文選は、周から梁にいたる約一〇〇〇年間の文章・詩賦等を細目に分けて編した書。

知識人の必須書とされ、日本でも平安時代に盛行（「広辞苑」）。

文選といつても妾にとつては、何かシチ面倒な本というだけ。読んでいる主人に、なにも今そんな分からないものを読むことないでしよ、と引つたかつた。

ろんごをばめかけそはからひつたり

御めかけハ書物のはしも見ぬ女 拾二27

おめかけの書物めりやす斗なり 九二34

清 賛。

344 酒だるへ四角に穴を下戸ハ明ヶ

石川 切り餅の保存場所として酒樽を利用するため、中身のなくなった樽をもらひ、餅を入れやすく、また取り出しやすいように四角な穴を明けた。とはいふものの、具体的にどのような樽のどの部分なのか不祥。

酒樽へ下戸は四角に口をつけ 六32

切餅を宗旨違の樽へ詰メ 二七11

小栗 賛。「四角」で「餅」がわかれば正解という句。実際に四角に空けたわけではないと思う。

伊吹 賛。小栗氏説にも。上方は丸餅です。

山田 賛。アルコール分がカビ防止になった

のか。

清 カビ防止になったらしい。江戸では作つた句だから「四角」。勿論趣向で、実際に四角な穴を開けたわけではない。

345 みの市ハあんまり人のしらぬもの

石川 糞市は三月一八日、浅草観音三社祭の当日雷門前に開かれる農具の市。三社祭の渡御のある年は、市は翌一九日（『江戸語の辞典』）。売られるのは糞・笠・杵・鎌・鎌等農具一般。

いろいろな市が立つが、糞市は百姓の少ない江戸市中の者にはあまり知られていない市である。

糞の市斗リハ江戸をあてにせず 二三11

清 賛。

346 れいふくの生酔も来るまつの内

石川 年礼に行つた先々でお酒をふるまわれへべレケになった酔っ払い。松の内ならゆるされもしようか。

生酔のはじまり松や竹の中 安七礼2

門松にすぎる礼者ハきげん過 二22

清 賛。

— 73 —

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

銭湯の開くのを待つも 松の内
水道の洩れたままなり お正月
浮世絵の白い肌にも 春と秋
素人の浄瑠璃 土の匂いがし
菜の花を視野に 交番眠くなり
牡丹へは 蜂も静かな訪問者
種蒔きへ 夕日安心して沈み
小便小僧に 五月の風のすばらしさ
浴衣着た人に紫陽花似て涼し
今日あたり風鈴吊らん陶泓忌
釈迦牟尼も 真夏の肌にましませり
島一つ買うて暮らせば 涼しかる
キリストの肋に似たる昼寝をし
商いのラムネ一本抜く暑さ
夏料理 緋鯉の見える縁に座し

菊大輪 日本も支那も古い国
菊大輪 雲湧き上るごとくなり
菊花展 白菊黄菊暮れ残る
菊人形 小楠公は赤い菊
野菊咲く島で流人として終り
菊の香に 二十一世紀が近し
牛小屋に月光美しき浪費
十二月カナリヤの餌をまた忘れ
十二月子供ばかりで飯を食べ
お隣も炭を割ってる大晦日
子供とはたった一と切れ食べ残し
幼稚園 もうグループというがあり
夕立のように泣き止む男の子
好きな娘に花火持たせて男の子
男の子 臍まで濡らし戻って来
いい返事してブランコを飛降りる
叱られてブランコで空蹴っている

英語 de Senryu ⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

肩書が役にも立たぬ十二月

December---

*there is not one useful
titled position*

親のあるうちはと ふぐに 箸つけず

*while his old parents lived
he would not eat
blowfish*

December 十二月 *useful* 役立つ *titled position* 肩書 *while* ~の間 *parents* 両親
live 生活する *eat* 食べる *would not* ~しようとしな *blowfish* 河豚

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳②

今回も SENRYU から、日本人の *Life* (暮らし・生活) を取り上げましょう。

庭いぢり佛いぢりに日の長さ 剣花坊

Fiddling with the garden,/ Fiddling with the family altar,--/ The length of the day!

fiddle with 物をいじる *family altar* 家にある祭壇 *length* 時間の長さ

ブライスは「老女が庭で片手間仕事をし、仏壇をきちんと片付け、そして少しお経を読む。彼女の一日はあまりにも長く楽しくはない。「日の長さ」は、俳句では「日永」として取り上げられ日照の長さを人に感じさせる。しかし川柳では長たらしい人生を感じさせる」と述べています。ブライスは英語圏の人や、英語で川柳を学ぶ人のために SENRYU を執筆しましたので、俳句と川柳の違いを上記の説明のようにできるだけ比較対照させて述べました。

師走になると、わたしは父の傍で仏壇の掃除をさせられた子供時代を思い出します。布に仏具磨きの練り粉をつけ、ピカピカになったらその仕事から解放されたものでした。時折、婚家先の仏具を磨きながら遠い日の年末の掃除を思い出します。

この川柳の作者、井上剣花坊は主宰誌「川柳人」に革新諸派の主張、論評を登場させるなど、大正・昭和初期の川柳中興の士として知られています。

参考文献：尾藤三柳編『川柳総合事典』p.104 Blyth, SENRYU (北星堂書店 1949) p.217.

愛染帖

新家 完司 選

(投句 280名)

好調な時は他人を誉めそやす

岡岡市 永見 心咲

(評) 誉めることが出来るのは余裕のおかげであり、その余裕は自信から生まれる。少し上から目線の「そやす」は自信の表れ。

来てみればこんな景色か老いの丘

神戸市 奥澤洋次郎

(評) 誰もが初めて経験する「老い」。体の衰えさえなければ、これまでと変わらぬ景色なのだが、遙か地平線に黒雲が漂っている。

鉄屑を集めた頃が華だった

大阪市 柴本ばつは

(評) 食べることに追われていたが、活力に満ちていたあの頃。だが、川柳を追って走り回っている現在も「華」ではないか。

葬式に赤い車で気が引ける

河内長野市 黒岩 靖博

(評) 赤のイメージは「情熱」「元氣」「血」「祝い事」等々。やはり葬儀にはしっくりこない。目立たぬよう隅っこに停めよう。

香芝市 大内 朝子
出しやばりを元氣やなあと諭される

(評) 確かに、「元氣やなあ」には、感嘆もあるが皮肉も含まれている。が、それを感じ取るのはまだ「芽えている」ということ。

交野市 田岡 九好
こうやつて歳をとるのか風邪を引く

(評) 下り坂の勾配は一定ではなく、平坦と落ち込みとの繰り返し。体調を崩すたびに少しずつ老化が進んでゆくのかも知れない。

佐賀県 真島久美子
嫉まれるほど幸せか考える

(評) 他人からは妬ましいほど恵まれた状況に見えていても、本人は「フツー」で何も感じていない。嫉妬も同情も考え過ぎ。

弘前市 稲見 則彦
いつからか真夏と真冬だけの国

(評) 桜に浮かれていたらすぐに猛暑。ようやく涼しくなった秋祭りの背中に木枯し。穏やかな日本の四季が苛烈になつてきた。

河内長野市 山岡富美子
大病院忍耐力をまず試す

(評) 忍耐力のない人はお引き取りください。とでもいうような待合室の混雑。それが嫌で受診を敬遠して手遅れになつた人もいる。

三田市 足立つな子
福耳と店員さんに誉められる

(評) 一級の店員さんは誉め上手。服装のセ

ンスにバッグ、眼鏡から髪型まで。意識していない福耳にまで目をつけるとは凄腕!

沖繩県 島尻 卓
おまえもか色香に迷う生き仏

鳥取市 岸本 孝子
うっかりか惚けかの線が曖昧で

鳥取市 岸本 宏章
香典を包む二人で確かめて

大阪府 小栢こずえ
秋の蚊が枯れた体を攻めに来る

三田市 谷口 修平
家計簿が我が家の愚痴を語り継ぐ

岡山県 紫 しめの
今月もアコムの窓に無心する

下松市 有海 静枝
ニヤンだけで入れろ餌くれご命令

瀬原市 居谷真理子
コテコテはこちらと通天閣が呼ぶ

羽曳野市 中川ひろ介
大阪の粉もん文化星三つ

河内長野市 大島ともこ
素うどんに海老天つけるボータス日

岡山県 田中 恵
ほかほかの芋に胃袋にぎられる

塩竈市 木田比呂朗
トイレまで多機能ですという奢り

吹田市 木下 敏子
来年もまた会いましょう百日紅

神戸市 細川 花門
川柳に身柄拘束されました

藤井寺市 田付 絹枝
二句入り萎えたやる気が奮いつく

羽曳野市 宇都宮ちづる
全没の帰りに食べたうなぎ丼

大阪市 津村志華子
鰻重は余所ごと家はさんま井

長野県 丸山 健三
新しいドラマを連れて来た息子

弘前市 高森 一吞
絶望も希望も入るリュック買う

和歌山市 松尾 和香
雨が降るやがて糞になる津軽

米子市 竹村紀の治
ひと癖を武器にひとりの道を行く

山口市 青木 隆子
偲ぶ会続き弱気になってくる

大阪市 田中ゆみ子
蕎麦吸るスマホ撫では蕎麦吸る

大阪府 田中ゆみ子
国の長女性だけなら戦せぬ

大阪府 田中ゆみ子
ミステリーツアーがっかり故郷の地

弘前市 高瀬 霜石
琴線に触れたところが同じ人

競輪競馬お国のためにスッている

那覇市 前川 真
趣味ですか言われ続けた小商い

和歌山県 森下よりこ
豊作でゴーヤ茶たつぷり出来た夏

鳥取市 土橋 螢
威張っても孫とおんなじ背の高さ

奈良市 大久保眞澄
揚げ足を取って自分も転がっている

尼崎市 市坪 武臣
自販機は不便また押し間違える

尼崎市 清水久美子
大好きな人の前ではシャイになる

紀の川市 宇野 幹子
喜寿過ぎて出来なくなった股覗き

三原市 鴨田 昭紀
猫じゃらしばかり揺れてる一等地

三原市 鴨田 昭紀
どうなっているの地球もワタクシも

大阪府 榎本日の出
さざ波を耳に聴かせる不眠症

大阪府 榎本日の出
ご近所にうるさい口や耳がある

大阪府 榎本日の出
五臓六腑へ毎日薬送りこむ

鳥取市 倉益 一瑤
何があっても戻れなくなるカレンダー

岡山県 藤成 操江
言い分けと一緒に手抜き料理だす

紀の川市 北山 絹子
犯人と同じ名前で騒がれる

八尾市 高杉 千歩
私も好きで老いてる訳じゃない

三浦 強一
介護度を答えられたら上出来だ

大阪府 平井美智子
歩行器でキョロキョロ私も変な人

大阪府 伊藤 良一
ら抜き言葉さでどうしたもんじゃろう

福井市 伊藤 良一
使いだわからぬままの力瘤

松山市 神野きつこ
悪人で眠り善人にて目覚め

豊橋市 藤田 千休
今日もまたアドレナリンを出しに行く

鳥取市 前田 楓花
この僕を好きよと妻もマニアック

高槻市 原 洋志
幸せと自分に暗示かけている

松井市 安土 理恵
あいまいに終わった秋を掃き寄せる

岡山県 丹下 凱夫
諦めのわるい女に冬が来る

鳥取市 夏目 一粹
台風が過ぎて無花果とりに出る

大阪府 菊地 政勝
大都会たぶんネズミが多い筈

横浜市 菊地 政勝
徘徊とポケモンGOが鉢合わせ

鳥取市 福西 茶子
ストーカーするほど熱も暇もない

紀の川市 辻内 次根

元氣よく死ぬる力をためている

芦屋市 竹山千賀子

素通りはさせぬパン屋のいい匂い

松江市 石橋 芳山

どう見ても痴呆じゃないか昼の月

三田市 尾崎 一子

ぶらりぶらり他人が見れば認知症

奈良県 谷川 憲

もの忘れ増え弁解が続かない

大阪府 栃尾 奏子

脇役が育つ主役を食べながら

唐津市 坂本 蜂朗

羽蟻が年金くわえ飛んでゆく

鳥取県 山下 節子

和洋中いちばん好きなお味噌汁

藤井寺市 鈴木いさお

サユリストという不治の病を抱えてる

堺市 矢倉 五月

体調が良くて死ぬ気などしない

高槻市 片山かずお

いろいろとあつても死ぬ気にはならぬ

和歌山市 武本 碧

重荷とは言わぬが高高い夫

堺市 奥 時雄

現役の眉間の皺が消え残る

三田市 北野 哲男
太陽の塔が満月担いでる

堺市 内藤 憲彦
太陽の塔今でもパワー貰えます

奈良市 尾畑なを江
祭りの夜恋の病にとりつかれ

河内長野市 村上 直樹

低気圧組板が鳴る湯が踊る

大阪府 米澤 俣子

ドライヤーなくても髪はすぐ乾く

倉吉市 牧野 芳光

嘆いてもまだ人間にはまっている

松山市 郷田 みや

堂堂とさすから折れる傘の骨

長谷川善輔

納屋の隅洗濯板の感無量

東大阪市 北村 賢子

美魔女にも悪女もなれずめしを炊く

和歌山市 喜田 准一

富有柿の甘さが腹に沁み渡る

鳥取県 斉尾くにこ

働けばしあわせをつかめた昭和

豊中市 水野 黒兎

平成っ子の知らぬサイパン真珠湾

西宮市 緒方美津子

なかなかのセンサーである足の裏

神戸市 上田 和宏

時たまは仏に見える妻である

河内長野市 藤塚 克三
秋風に今年松茸食えるかな

堺市 坂上 淳司
一片の松茸にやあ久し振り

紀の川市 楠原 富香
コマーシャル皺がなくなる筈がない

鳥取市 谷口回春子

我が家にも一つや二つ離れ島

寝屋川市 籠島 恵子

コンビニのおでんにまけぬなと思う

弘前市 福士 慕情

大きな目的に油断をしてしまふ

鳥取県 石谷美恵子

ときめきは失せ嗜みでする化粧

堺市 村上 玄也

Bクラス決まっからの強いトラ

三田市 上田ひとみ

にらめっこジャンケンボンも苦手です

唐津市 山口 高明

暑さより冬將軍が凄き良い

宝塚市 田中 章子

べっぴんと呼ばれた頃もありました

大阪市 古今堂蕉子

男は美人に寛容すぎないか

府中市 岸田 武

セールの美人に妻は愛想ない

豊中市 松尾美智代

悩み事いっぱいあるがよく眠る

富田林市 山野 寿之
肝臓の薬ビールで流し込む

堺市 加島 由一
ビールから酒に潮目は虫の声

大阪市 若本 安代
熱燗の旨い季節がやっと来た

大阪市 藤原千恵子
酒の燗父が伝授のタイミンク

三田市 村田 博
新米の香りが買わず純米酒

松原市 森松まつお
寄り道を誘う本屋と縄のれん

堺市 澤井 敏治
胸躍るホイリゲスーボ新走り

和泉市 横山 捷也
筋道を通すと酒がまずくなる

熊本市 杉野 羅天
古稀来たる飲み友達も減ったなあ

神戸市 能勢 利子
下戸だけどそこそこ飲める人が好き

大阪市 井丸 昌紀
飲み会をさぼった訳は秘密です

大阪市 奥村 五月
塩控え酒はほどほど腹八分

岡山県 池田たか子
減塩の夫がとんと頼らない

東かがわ市 川崎ひかり
極楽は島に一軒ある飲み屋

大阪府 高木 道子
強かなコスモスクの字で煽やかに

紀の川市 山東日出男
コスモスに教わったこと二三つ

枚方市 海老池 洋
喪中ハガキ寒く見ている木守柿

神戸市 松井 文香
銀杏は帰りに拾うことにする

三田市 福田 好文
蒲焼きの味を知らずに子が育つ

岡山県 山縣のぶ子
早朝の坐禅カラスに試される

堺市 遠山 唯教
あつたはずの躍動感が消えている

堺市 羽田野洋介
たつぷりとあつたやる気は今どこに

八尾市 宮崎シマ子
作務衣着た姿わたしの本物だ

広島市 岸本 清
腰痛ではぼロボットのような僕

鳥取県 門村 幸子
読めぬのに心フツツ書道展

大洲市 中居 善信
庭先でこけちやいました脛の傷

大阪市 大川 桃花
退院の足で駆け込む美容院

松江市 中筋 弘充
喧嘩した理由を忘れる老い二人

熊本県 岩切 康子
また台風棟のシートが泣いている

河内長野市 中島 一彌
前線が動かないから爪を切る

和歌山市 古久保和子
エンピツを削るナイフが売ってない

橋本市 石田 隆彦
つまみ食いに慣れてる指で試食品

鳥取市 吉田 弘子
物忘れ競争ならばチャンピオン

枚方市 寺川 弘一
アイラブユーは絶対に死語にはならぬ

大阪市 谷口 義
おばさんの続きおばさんのままで

和歌山市 福井 菜摘
度忘れを思い出そうと焦る脳

松江市 相見 柳歩
努力です頭が良いのではなくて

大阪市 笠嶋 恵美
真似をして元気になるう朝カレー

豊中市 藤井 則彦
スポーツに一〇〇点はない〇もない

鳥取市 奥田 由美
効用と同じくらしい副作用

奈良市 米田 恭昌
熱いハグ華奢な私は壊れそう

府中市 田辺 和子
ますらおが私の中に棲んでいる

共選欄

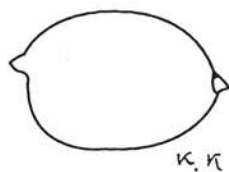
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 371名)



「無心」 北野 哲男 選

座禅会無心になったことがない
無心なら爺ちゃんよりも婆ちゃんに
両親にかくれて無心二重取り
かといって無心をいわれないのは寂し
羽曳野市 徳山みつこ
物あふれ無心もされぬ爺寂し
河内長野市 森田 旅人
無心した息子が返す端金
和歌山市 磯部 義雄
善と悪背負って逝く時だけ無心
雲南市 柴田 重虎
錫杖を鳴らし遍路の旅終える
鳥取市 岸本 孝子
朝と晩無心にさせる仏の灯
茨木市 藤井 正雄
切り出せぬ無心を見抜く里の母
和泉市 横山 捷也
認知症無心に遊ぶ母悲し
大阪市 若本 安代
耳遠く無心になるもいいものだ
貝塚市 石田ひろ子
あやとりは無心の母の二度重子
西宮市 山本 義子
ただ無心針穴に糸通してる
神奈川 義子
謗しられて無心になれば神心

「無心」 安土 理恵 報

般若心経無無無無無 無無無無無
無心には遠く写経の筆の揺れ
これがわたし無心になれるまま卒寿
まあまだまだ無心になれる歳じゃない
無心にはなれずに蟹の身を擠る
庭の草無心になって引いている
黙々とモヤシのヒゲを取っている
無心に取り組む顔が一番好きでした
海面の浮子を見つめて無我の境
ニコリともしないパチンコ中毒者
無心は無理知ってしまったあの噂
両親の介護無心の日々だった
成し遂げる為に無心になってみる
追伸の余白に無心覗かせる
連れ出され無心の境地写経会

弘前市 福士 慕情
大阪市 平井美智子
四條畷市 吉岡 修
堺市 内藤 憲彦
藤井寺市 太田扶美代
枚方市 海老池 洋
松原市 森松まつお
和歌山市 坂部紀久子
唐津市 山口 高明
沖繩県 森山 文切
西宮市 秋元 てる
堺市 柿花 和夫
岩出市 藤原ほか
神戸市 山崎 武彦
唐津市 仁部 四郎

無心にはなれないまな座禪終え
 特等をちつちやな孫が引き当てる
 坐禪より無心になれる趣味を持つ
 無心になれる何か一つを見つけねば
 私にも無心になれる趣味一つ
 無心にはなれないことが多すぎる
 宴会の蟹が無心にさせている
 お経さえ無心で読んだ事がない
 張り詰めた無心思わぬ記録出し
 策尽きて今は無心に聞く法話
 腕の中無心で眠る子の愛し
 神様と生きる無心な児の寝顔
 無心にはなれぬが耐えることに馴れ
 しがらみを全部落としてから無心
 やり切つて無心に結果聞いている
 札束を見るまであつた無の心
 居眠りと無心の区別つけにくい
 禅僧のように無心の昨日今日
 座禪組む心へ忍び寄る邪心
 被災者に添う両陛下ただ無心
 剥く食べる粟で無心になった午後
 白球を無心で追つていた昭和
 勝因は無心でしたといい笑顔

堺市	近藤 治子
三田市	村田 博
尼崎市	藤井 宏造
芦屋市	黒田 能子
大阪市	平賀 国和
羽曳野市	三好 専平
米子市	中原 章子
松原市	森松まつお
高槻市	富田 美義
和歌山市	武本 碧
鳥取県	永井美津子
藤井寺市	高田美代子
堺市	奥 時雄
枚方市	小林 わこ
堺市	内藤 憲彦
大阪市	升成 好
西宮市	亀岡 哲子
塩竈市	木田比呂朗
藤井寺市	鈴木いさお
大阪市	内田志津子
京都市	都倉 求芽
東大阪市	佐々木満作
高槻市	島田千鶴子

幸せは無心を聞かず言わず済む
 靴下の穴が無心に来たと云う
 その内に無心をするかバラサイト
 子の無心一筆書かせ聞いてやる
 運天に賭けて無心の手術前
 最後の日こそは無心になるつもり
 無心になれる何か一つを見つけねば
 無心にはなれず蛇行をくりかえす
 飢餓の子の無心の眼涙する
 無心な子五ヶ月経てば智慧もつく
 名杜氏無心が造る大吟醸
 ちっぽけな心をからにするお酒
 邪念などないと言うててジャンボくじ
 老母の指ただ黙々とツルを折る
 古里はもう無心する母も居ず
 無心なら爺ちゃんよりも婆ちゃんに
 無心言う心の隅にある引け目
 追伸で無心するのもつらからう
 無心にはなれぬが耐えることに馴れ
 わたくしを無心にさせる孫五人
 赤ん坊の無心な顔にある平和
 無欲にもなれずましてや無心など
 無心なら良いが無気力なら困る

寝屋川市	富山ルイ子
寝屋川市	伊達 郁夫
奈良県	安福 和夫
池田市	上山 堅坊
奈良市	米田 恭昌
豊中市	藤井 則彦
芦屋市	黒田 能子
富田林市	中井 アキ
田辺市	岡本 昇
倉吉市	山中 康子
奈良市	長谷川崇明
橿原市	居谷真理子
堺市	澤井 敏治
堺市	矢倉 五月
豊中市	松尾美智代
大阪市	江島谷勝弘
堺市	村上 玄也
宝塚市	田中 章子
堺市	奥 時雄
三原市	笹重 耕三
奈良市	宇賀 史郎
倉吉市	中村 毅
高槻市	松岡 篤

居眠りと無心の境地しまい風呂
 図書室に無心になれる森がある
 ひっそりと百合は無心に咲いている
 ピカソより無心な孫の上手な絵
 草を抜く老母の姿無心なり
 草むしりお昼食べるの忘れてた
 無心とはいかぬがいつも自然体
 故郷は無心になれる大あくび
 わがままと無心が同居孫三つ
 ただ無心円空仏の荒削り
 良寛のように生きてる昨日今日
 ちっぽけな心をからにするお酒
 イチローになれないけれどバット振る
 素に戻りただひたすらにパンこねる
 無心にはなれない月が欠けてゆく
 瞑想にふける10分月に入る
 進る母乳無心に吸う大器
 壁に向き瞑想限度二分開
 三分の瞑想とても難しい

秀句

香芝市	山下	純子
和歌山市	福井	菜摘
藤井寺市	太田扶美代	
和歌山市	土屋起世子	
藤井寺市	増井ヨシ枝	
神戸市	能勢	利子
熊本市	杉野	羅天
鳥取市	加藤	茶人
鳥取市	谷口回春子	
札幌市	小沢	淳
堺市	加島	由一
橿原市	居谷真理子	
弘前市	高瀬	霜石
神戸市	富永	恭子
弘前市	富士	慕情
加西市	山端なつみ	
男鹿市	伊藤のぶよし	
大阪市	藤原千恵子	
鳥取市	吉田	弘子
貝塚市	吉道あかね	
富田林市	中井	アキ
三田市	尾崎	一子

眠れない無心に眠る妻の横
 父ははに内緒で兄にする無心
 ハートマークで届く無心の子のメール
 煩惱に誘われ揺らぐ結跏趺坐
 棺に釘打たれ無心になれたかい
 策尽きて今は無心に聞く法話
 図書室に無心になれる森がある
 勝ちたいと思わなかった君の勝ち
 警察が揺れる無心を打ちすえる
 一升瓶さてはお金の無心だな
 三分間 麺のあがりを待つ間
 勝利への放物線は無我だった
 没頭をするものがある蝸牛
 表向きは無心本当は無念
 無心できる親も老いたり月見草
 周五郎を読んで大会へ挑む
 無心説く師への謝礼になお迷う
 静寂へきりと弓を引く無心
 見上げると無心になれる青い空

秀句

川西市	山口	不動
寮屋川市	籠島	恵子
西予市	西田美恵子	
堺市	坂上	淳司
紀の川市	辻内	次根
和歌山市	武本	碧
和歌山市	福井	菜摘
佐賀県	真島久美子	
尾道市	大本	和子
横浜市	川島	良子
東京都	川本真理子	
鳥取県	斉尾くにこ	
和歌山市	古久保和子	
神戸市	細川	花門
八尾市	宮崎シマ子	
大阪市	川端	一步
豊中市	水野	黒兎
大阪市	栃尾	奏子
長岡京市	山田	葉子
男鹿市	伊藤のぶよし	
羽曳野市	徳山みつこ	
札幌市	小沢	淳



追悼

宮園射月芳さん

八木千代

川柳塔大好き人間で、最後の最後まで塔の同人であり続けて下さった宮園射月芳さんは、一〇月一日、奇しくも塔まつりの夜に逝去されました。賑やかに懇親宴がひらかれている時間でした。

「シャゲッポウのイズホです」と言葉を掛けて下さったのは大阪での大会。びっくりする私に「千代さんはチヨですと呼名をされるので、すぐ覚えてしまった」と。若い頃の話です。

三六回くらい続けてきた「きやらはく二泊三日の忘年句会」にも初めから参加して下さった。きやらはく名物の懇親宴の「高校三年生」のステージにも、葉先生、薫風先生と共に射月芳さんも学帽を被り、私は髪に大きなリボンをつけて、手をとり合って踊りました。

お別れの「星影のワルツ」にも真つ先

に出て下さったのでした。

「フントウドリヨクの甲斐もなく・・・今日もナミダの今日もナミダの陽が落ちる 陽が落ちる・・・」

「男はつらいよ」の主題歌です。寅さんとは反対の瘦身で端正なお方でした。哀愁をこめて懇親宴にはいつでも歌いあげて下さった。

フーテンの寅さんが大好きでとうとう何度目かの上京のとき、柴又の帝釈天さまに詣でて門前町をそぞろ歩きし、あの草だんごのお店でおかわりをしたことも。それほど好きな「男はつらいよ」の歌詞を私はなかなか覚えられないのに、射月芳さんは3番まできっちり歌って下さるのです。それも少しはにかみながら。それだけで、もう尊敬していました。

年賀状だけは毎年頂いていました。電

話を掛け合ったことも・・・。「塔まつりの寄せ書きをもらったよ」と嬉しそうに電話を頂いたのは、昨年の塔まつりの後のことでした。

死に遅れた私のまわりから大切な旅仲間、川柳さん仲間がひとりずつ居なくなります。もう辛くてたまらない。せめて一日、今日一日を心して送りながら、朝夕の祈りに「先生がた、射月芳さんが新しく入られました。どうぞ導いてあげてね」と御名を唱えるばかりです。

合掌

遺句抄

歯車の朝が始まる出勤簿
何食わぬ顔で喜劇を続けよう
人事課の部屋から動く春の首
世渡りは時にサタンの手を握る
だし昆布の奥ゆかしさは僕に似る
約束は守るピエロと言われても
青い背広で恋をしたのは昔
定年後故郷の海に抱かれよう

一〇月一日逝去 享年八七

「ドライ」

(投句 219名)

藤井宏造 選



ドライフルーツ明日へふくらむ夢を持つ
 臆せずに本音で迫るお嫁ちゃん
 日常の会話メールでする親子
 家捨てても取り分だけは取りに来る
 災害にドライフーズの避難食
 忙しげに情の乾いたビルの風
 改革をします改革本部から
 とけぬようドライアイスを入れる恋
 ばあちゃんも金が絡むとドライです
 心の棘を抜いてドライに生きて見る
 旧姓に戻ると妻の無表情
 夢のない街でドライになる命
 足して2で割り切る方が楽でっせ
 割り切つて渡れば見える川の幅
 命より儲けることさ再稼働
 医者の声むしろドライで救われる
 弁解をすればする程乾く喉
 思い切りドライになって義母を見る
 因襲をドライに変える赤い爪
 モナリザにドライな笑みも垣間見る

河内長野	木見谷孝代	河内長野	大島ともこ
堺市	遠山 唯教	奈良市	米田 恭昌
三田市	尾崎 一子	羽曳野市	徳山みつこ
弘前市	高瀬 霜石	三田市	野口 晶子
貝塚市	石田ひろ子	大阪市	森 廣子
神戸市	山崎 武彦	西予市	黒田 茂代
高槻市	富田 美義	紀の川市	楠原 富香
奈良市	大久保眞澄	東京都	川本真理子
和歌山市	土屋起世子	松江市	中筋 弘充
奈良県	渡辺 富子	高槻市	初代 正彦

義母が来る時だけ生花挿すトイレ
 禁断の恋ドライフリーズして終わる
 干からびる程に釣り人動かない
 ドライアイ哀しいことが多過ぎる
 映画館出て手を振ってそれっきり
 表現の自由に湿布貼ってやる
 パンドラの箱に乾いた骨一つ
 ドライフラワー散りどき持たぬ身の不幸
 行間に覗く乾いた文字の跡
 これ以上乾けば君はもう他人
 悪口はドライアイスで閉じ込める
 終活へドライに弾く決算書

佳句

池田市	奥園 敏昭	池田市	小谷 小雪
明石市	桃谷 和郎	三原市	鴨田 昭紀
米子市	中原 章子	三田市	上田ひとみ
松江市	石橋 芳山	榎原市	居谷真理子
長岡京市	山田 葉子	弘前市	高森 一吞
青森県	松山 芳生	江南市	脇田 雅美
大阪市	古今堂蕉子	堺市	矢倉 五月
羽曳野市	吉村久二雄	三田市	堀 正和
三田市	久保田千代		
佐賀県	真島久美子		
豊中市	水野 黒兎		
札幌市	三浦 強一		

御先祖様墓花も仏花も造花です
 軸

天

地

人

「積む」

(投句 215名)

山 本 昌 代 選



空き缶を積んだチャリンコ風に揺れ
古希の坂折れ線からを積み上げる
積むものを積んで話が出来あがる
積み立てた金の利息で飴ひとつ
札束を積みばまあるくいく話
修行なら無駄ヒツソリと咲けぬバラ
積木崩し遣り場無くした子の怒り
老いの脳積んで崩して日が暮れる
ブロックの高さを知っている心
何気ない会話を積み上げて親子
積み立てが満期温泉でも行くか
補助輪が外せぬままに馬齢積む
朝市へ野菜あお虫積み込んで
積ん読に芥川賞直木賞
練習をとことん積んだ金メダル
古タイヤタイヤの形して積まれ
清正が積んだ石垣崩れてる
ところどころ積み残してた荷を思う
口外をせぬ舌で積む信頼度
味加減女が舌に積む歴史

池田市 上山 堅坊
富田林市 関 よしみ
和歌山市 北原 昭枝
可見市 板山まみ子
香芝市 大内 朝子
男鹿市 伊藤のぶよし
河内長野市 谷 久美子
青森県 松山 芳生
佐賀県 真島久美子
沖縄県 森山 文切
鳥取市 岸本 孝子
富田林市 山野 寿之
大阪府 高木 道子
札幌市 三浦 強一
三田市 福田 好文
大阪府 米澤 俣子
大洲市 中居 善信
四條畷市 吉岡 修
神戸市 富永 恭子
藤井寺市 太田扶美代

素敵だねありがとう積む秋の空
積んだ金バナマ文書でばらされる
積み置いたベストセラーズ読む夜長
積ん読のスキ間に歳も潜ませる
積ん読が欠伸してます秋日和
苦勞積みバック程度で伸びぬ皺
老舗さえ積んだ信用一瞬で
積み上げて崩して遊ぶ孫のもり
山頂に友の墓標と積むケルン
棒掛けへ稲を積む背に陽が落ちる
白を積み重ねわたしの色にする
本棚にゲゲゲのマンガ積んで秋
佳 句
善を積む空き缶拾う程度だが
問題満載東京湾あたり
札束を積むと裏口すぐに開く
意地悪が一人混じっている積み木
積善のつもりなのです自動ドア
人
機嫌よく積んで壊して母遊ぶ
地
少しずつ熟成させています恋
天
汗を積む人という字になるために
軸
そつと揺れ小さな幸積むかすみ草

京都府 榎本 宏子
加西市 山端なつみ
堺市 坂上 淳司
奈良市 大久保真澄
三田市 堀 正和
下松市 有海 静枝
西宮市 福島 弘子
唐津市 岩崎 實
豊中市 水野 黒兎
弘前市 福士 慕情
西予市 黒田 茂代
大阪市 津村志華子
橿原市 居谷真理子
羽曳野市 徳山みつこ
茨木市 藤井 正雄
紀の川市 辻内 次根
岡山市 丹下 凱夫
大阪市 柴本ばつは
三田市 上田ひとみ
弘前市 高瀬 霜石

初級教室

題一 平均

山口 光久

平均を上回る(超える)こえる時の漢字は、「越える」か「超える」のどちらを使うのが適切か考えてみましょう。

越えるは向う側へ行く、時を経過する場合に使い、超えるは基準より上になる、限度以上になる場合を使うのが通常の方法です。

平均寿命を越える?超える?はどちらが適切でしょう。皆さんの句の中で越えるの方が多くありました。超えるも結構ありました。両方の漢字が混在していましたが、やはり基準より上になる場合は超えるがよいでしょう。注意して頂きたいのは誤字です。誤字の中で目に付くのは、示す編(ネ編)と衣編(ネ編)の間違いです。

神や祭礼に関係ある漢字「祝う」の時は、示す編(ネ編)。衣服の種類、形、製造に関係する漢字「袖」の時は衣編です。

本号をもちまして、初歩教室を退くことに

なりました。三年間に亘り拙筆にお付き合
い下さいまして、有難う御座いました。お
礼を申し上げます。

私なりの川柳感を申し上げ、皆さんの
益々のご健吟をお祈り致します。

① 川柳は生きものである。喜怒哀楽がある。
② 説明句、報告句から抜け出し、心を詠む。
③ 川柳は、選者や読者に読んでもらうもの
であるから、独り善がりではダメである。

④ 見つけ、表現の良さ、意外性などで感動、
共感を呼ぶ句を心掛ける。

⑤ 毎日の暮らしの中に川柳の時間を。
⑥ 投句に際し、もう一度句を見直し、誤字、
脱字がないかを確認する。

【添削】

原 昏れて互に釣り合う夫婦独楽 里子

「昏れて」が解りません。「黄昏れて」の
間違いではないかと思えます。中八になっ
ていますので直しましょう。

添 黄昏れて釣り合いとれる夫婦独楽
原 平均の年令すぎてわれ元氣 (仙久子)

平均の年令とは平均寿命の事だと思いま
す。「われ」は自分の事でしようが、あえ
て言う必要はありません。

添 平均寿命すぎて元氣に暮らす日々

原 あとすこし平均寿命に届くかな (田廣子
中八になっています。

添 平均寿命までは生きたいもうちよつと
原 平均が中流でない世の格差 まさる

原 句のままでよいのですが。
平均が中流とは言えません。昔、一億総中
流と言われた時期もありました。

添 平均値が中流示すものでない
原 目標は平均寿命越えること 修平

走のように旁が成という漢字「越」は辞
書に載っていません。作り字は皆に理解さ
れません。独り善がりにならぬよう。

添 平均寿命超える努力は惜しまない
原 凸凹二人寄り添い仲も良い 真

この句の場合、凸凹は長身と短身、メタ
ボと瘦身のどちらかでしょうが表現に工夫
してみましょう。

添 蚤の夫婦寄り添いながら睦まじい
原 スーパーの物價平均見て買うて ミヨノ

スーパーを見て回り、一円でも安い店で
買う。主婦の知恵でしょう。

添 スーパーの価格比べて買っている
原 世間言う平均忘れマイベース (高敬子
世間の噂や風評に惑わされるより、自分
をしっかり持ちましょう。

添 平均値氣に留めないでマイベース

次の三句は「越える」となっていますの
で「超える」に直しました。

原平均点越えて喜ぶ受験生

(高) 弥生

添平均点越えて嬉しい受験生

原平均点越えたと孫のしたり顔

敏昭

添平均点越えたと孫のしたり顔

原平均点越えているからやれやれだ

忠貞

添平均点越えているからやれやれだ

【少しの工夫で佳くなる句】

原我が句会平均すれば七十五

雄大

原句のままですよと思いますが、我が句
会と限定的に捉えるのではなく川柳界とし
て考えてみました。

添川柳人平均すれば七十五

原平均寿命より健康寿命です

紀雄

原句のままですよと思いますが、両寿命
を対比する事ですから。

添平均寿命よりは健康寿命です

【入選句】

倒木を平均台にして遊ぶ

律子

平均台立つことさえも覚つかぬ

隆子

平均台昔の勘が顔をだす

(富) 恵子

平均台チャスラフスカの艶やかさ

なつみ

恐れながら平均寿命超えました

重利

平均寿命超えてやるぞと飯を食う

風露

老人会平均寿命も伸びてゆく
梯子して平均寿命生きた父

(畑) 節子

たつぷりと平均余命楽しもう

(高) 道子

降圧剤もサプリも飲んで平均値

旅人

安心は平均値より少し上

由美

平均値あたりで暮らす心地良さ

良一

平均と聞けばなんだかほっとする

治子

平均で生きたら良いというけれど

勝正

平均というのは言葉の安定剤

孔一

おかげさまで平均保つ結果表

和子

年金者平均以下のちぎれ雲

厚子

中流と思えば楽しこの暮らし

秀光

月並みに生きて年々縮む背な

天翔

ほどほどが日本人にはよく受ける

和之

何事も平均点で良しとする

きっこ

何事も平均でよい暮らしぶり

福貴子

平均まで生きたら後はおまけです

開子

割り勘が次の飲み会予約する

俊雄

わあ高い中にとってこれまけといて

洋一

【佳句】

平均を上回ってるメタボです

(東) 美智子

人生は平均点であつたばれよ

英男

国民が中流だったのは昔

明子

平均と思えばなんと楽な肩

洋子

天秤棒愛の重さは量れない

安子

昭枝

【今月の推せん句】

平均値上げるシニアのウォーキング 斉藤 宏子

徒でさえ体力が衰えるシニア、日頃から
のウォーキングで体力をつけ、健康維持に
努めたもの。

平均に切ったメロンに子の視線 小栢こずえ

平等に切ったはずのメロンでも多少の大
小はあるでしょう。子供の視線はそこに集
中することは確か。

平均と比較したがる人の性 中島 一彌

全体の中で自分の位置はどの辺か気にな
るものです。他人と比較して存在を知るの
は大切です。どうする事も出来ない人間の
性かも。

【私の句】

平均点それで満足したら駄目

平成二十八年年初歩教室年間賞

手本からはみ出し伸びてゆく個性

リバーシブル今日の気分は鈍色で 下松市 有海 静枝

齒をみがく今日の悩みを消すように 札幌市 齊藤 宏子

☆新年度より山口光久さんから居谷真理子
さんに代わります。

大阪府 畑中 節子

川柳塔鑑賞

同人吟 鈴木 いさお

— 11月号から

僕の血をたつぷり吸った蚊を叩く

小 沢 淳

私にも経験があります。腕にとまった蚊をすぐには叩かず、暫らく吸わせておいて満腹で動きが鈍くなったところを一撃でバシッ！爽快ですなあ。

言うことを聞かない脳に酒を足し

早 川 遯 行

年齢と共にますます言うことを聞かなくなった脳。そこへ遯行さんはお酒を足されるという。逆効果にならねばいいが。

順不同計報はある日突然に

原 田 すみ子

逆縁ほど不幸なことはありません。あの世へは歳の順に逝きたいものです。

定年を境に妻の下剋上

島 田 誠 一

現役のころの亭主関白のツケが回ってきたのです。これから先は婦唱夫随が円満のコツ、呉興も威張りませんように。

いろり火に岩魚が焼けて聞く民話

藤 井 正 雄

山里の民宿でいろりを囲み、昼間に釣った川魚を串に刺して焼きながら、村の古老から昔ばなしを聞く、夢のひとつとき。

半分の胃で肥えられる訳がない

森 松 まつお

肥えられないのは幸か不幸か。一方で何を食べてもすぐに身につき、メタボに苦しむ人も多い。自らの身の不幸をもユーモアに変えて詠み上げるまつおさんの句に、豆秋の句がタブラ。

ありがとうをさようならの時に言う

谷 口 義

ありがとうを一番に言わなければならぬ人がすぐ近くににいるのに、中々言えないのが現実。でも心に決めている。この世とさようならをする今わの際に、ひと言「ありがとう」と。

映画でしかみたことのないローマ

山 本 希久子

オードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックの名演技による『ローマの休日』何度みて何度感激したことか。行つたことはいけれど、よく知ってますローマ。

痛み止めのように友から届く文

石 谷 美恵子

私にも年に二、三回手紙をくれる友がいる。もう一度に嬉しいし、彼が元気でいることにホッとするが、それを痛み止めのようにと表現したところが何とも可笑しい。

挫折などしている暇はありません

夏 目 一 粹

その通りだと思います。残された時間は決して長くないのです。全没にくよくよしてる間にすぐ次の句会が来るのです。次から次へやるのが追いかけてくる「多忙老人」頑張れ。

部屋の鍵かけてガッツポーズする

竹 村 紀の治

今すぐ喜びを爆発させたのに、敗者を前にして心配りする紀の治さんの優しさが目に浮かびます。家へ帰って自分の部屋で、誰にも気兼ねなく「バンザイ」。

司会などするもんじゃない食べられぬ

吉岡 修

披露宴や懇親会などの司会者は、本堂にご苦勞様です。みんなが飲んだり食べたりして楽しんでる間も、スムーズな進行のために必死。次はきつと断わろう。

赤とんぼそして三回忌が終る

須磨 活恵

どなたの三回忌だろうか。赤とんぼを眺めながら、在りし日を偲ぶ。

キレイな声を聞くとお顔を見なくなる

片山 かずお

天は二物を与えずと言います。ウグイス嬢に会って失望するより、いろいろな顔を想像しながら聞いているだけの方が。あなたが奏でると私踊ります

中村 恵

亡くなったご主人への思いが、ひしひしと伝わってきます。今でも二人で奏で踊ったあの日のことを思い出す毎日。

貢ぐだけ貢いだ愛がそっぽ向く

山野 寿之

この句に、むかし植木等が唄ったヒット曲がダブります。「退職金まで前借りし、貢いだ拳句がハイそれまでよ」。

正解が複数あつて生きてゆけ

吉村 久仁雄

そう「人生いろいろ」です。親の敷いたレールに忠実に生きるもよし、自由奔放に生きるもよし。正解なんて自分自身が評価するものかも知れません。

あの頃の凜凜しい君も車椅子

若松 雅枝

老いるとは哀しいものですね。車椅子の君も、杖を頼りのわたくしも。

昨夜亡くなりましたと特養のマイク

高杉 千歩

入所者の死亡を伝える特養の館内放送の何と無感情で事務的なこと。それを淡々と聞き入る入所者の顔もまた無表情。

ひとりでも婆は生活崩さない

宮崎 シマ子

90歳を超えても、自分の身のまわりの世話を全て自身でこなし、その間を縫うように、月6〜7回の句会へ出席するという矍鑠たるシマ子さんに、改めて脱帽。

相槌を打つと話が長くなる

福田 好文

かと言って相槌を打たないと「聞いているの」と手厳しい。どうしたらいいの。

一切を無にとび超える水溜り

久保田 千代

とぶ迄は、いろいろな雑念が交錯し、水溜りを前に心が揺れる。でも、とぶと決めた結果を考えずひたすら無心。

油断してバリアフリーに蹴躓く

七反田 順子

老人が蹴躓かないように設計されたバリアフリー。それに躓く順子さん、大丈夫ですか。他人事ながら心配です。

眼鏡替えあなたの笑顔しかと見る

渡辺 富子

愛する人の笑顔を見ることは何よりも嬉しいことです。さつき見たばかりなのに、眼鏡をかけ直してもう一度。

にわとりが水飲むように薬飲む

玉置 当代

薬と水を口に含み、天井を見てゴクン。その姿をにわとりが水を飲む様だという。言われてみると成程と思うが、可笑しい。

この世での味方は一人妻だった

辻内 次根

平穏な時は、みんな味方みたいな顔で寄ってくるが、利害が絡んでくるとそうはいかない。結局最後は妻だけか。

水煙抄鑑賞

― 11月号から

足立 茂

再会を約して涙喜寿の会

井上 風花

楽しく飲んで喋った喜寿の会。そしてお開き。次は、いつ会えるのだろうか。親友だからこそ、ふっと出た涙である。筆者にも、実感が迫ってきます。

同趣味と分かつて弾む初対面

上山 堅坊

そうなんですね。それぞれ人の性格は違っても、趣味が触媒の役目を果たします。とりわけ川柳の世界はいいものですね。一緒に飲めばさらに効果てきめん。

幸せは小袋入りが丁度よい

巖田 かず枝

欲張らず、身の丈にあった幸せに感謝できる人はもっと大きな幸せにめぐり合うことでしょう。作者はもう十分に幸せな日々なんですね。

朝顔と月下美人のなさぬ恋

前川 真

すれ違いの恋を花に例えた切り口は、新鮮。作者の繊細な眼に拍手。でも本当の恋はハートが絡むからもっと大変ですぞ。

かぶと虫連れて帰阪の黒い肌

田中 ゆみ子

休みを利用して田舎のジイちゃんバアちゃんの所で元気に駆け回った息子が帰って来た。お母さんの愛情が弾けます。冷蔵庫覗いて明日を確かめる

平井 美智子

ウー―土砂降りやなあ。買い物なんか行つてられへん。冷蔵庫の中に分でなんとかなるやろ。その分だけ愛情を込めて作ろう。

送料で買える野菜を子に送る

小 栢 こずえ

母心ですね。心を込めて作った無農薬の野菜を子に食べさせてやりたい。地元紙に包み、宅配の取り扱い店に走る。

早寝早起きそんな悪人居りません

太田 としお

そりゃあそうだ。泥棒も深夜が稼ぎ時。それはその通りだけど、午前様も悪人かなあ。だったら、筆者は悪人だ。

「お盆玉」聞いて素通りできぬジジ

長 島 亜希子

ジイちゃん、バアちゃんお盆玉って知っていますか。お年玉の夏版。孫が可愛くて入ったばかりの年金がパー。

免許証更新ごとに禿げ上がり

松 永 庄三

笑っちゃいました。何年か毎の更新日。新旧の写真に思わずため息が……。でもね、人間の価値と髪量は無関係。

口実を作る積りの忘れ傘

若 年 幸子

おもしろいねえ。キツカケ作りもいろいろあつて。恋がらみ？ それとも？ いずれにしても、うまくいきますように。

じゃじゃ馬を馴らした婿に感謝する

横 山 里子

じゃじゃ馬だった娘が結婚して貞淑な妻になったらしい。婿がわが娘を変えてくれたと感謝。やっぱり愛は強いなあ。

花に水私に君が居るように

西 田 美恵子

あなたが花でお相手は水やってか。お二人が幸せなら筆者は何も言うことないけど勝手にしなはれ。お幸せに。



カラオケを詠う

日本で生まれてまだ半世紀も経たないカラオケですが、「Karaoke」が通じない国はないほど世界中に広まりました。

最近、ひとりカラオケ専門店「ワンカラ」なるものまで出現。利用している人が多いと聞いて驚くばかりです。

カラオケで歌う曲目メモって

カラオケへ胸の小骨を抜きに行く

カラオケが薬になるか気が晴れる

かたくなに昭和を歌うカラオケ日

カラオケにエコーがあつて救われる

得意な曲名ぐらいは覚えているつもりでも、酒を飲むと出てこないのは誰しも同じ。メモしておくとおバツチリ！です。

歌うことの効果は沢山ありますが、その一つが「笑い」と同じように免疫力を高めてくれるということ。もちろん、ストレスを発散して胸の小骨も抜いてくれるでしょう。新しい歌は若者に任せて、ご同輩は昭和演歌で大いに結構。少々音程が外れても悪声でもエコーがカバーしてくれます。

点数が出るカラオケで力みすぎ

カラオケの点取り虫がいて疲れ

カラオケの採点恨めしく思う

カラオケの好きな人たちがみんなタフ

カラオケに喜んで行く妻が良い

採点はON・OFF出来ませんが、仲間内でON組とOFF組がいたら少し面倒。ですが、「競い合い」などではなく単

初山 隆盛

松原 寿子

畑中 節子

三浦 強一

堀 正和

山口 光久

小川てるみ

神野きつこ

高瀬 霜石

松原 保

保

なる「盛り上げる手段」と割り切れば無邪気に楽しめます。カラオケ五曲歌うのは四百メートル走るのと同じエネルギーを消耗すること。マイクを離さない人は肉体的にも精神的にもタフ！歌って発散するのも夫婦円満のコツ。

親不幸悔やんで歌う「吾亦紅」

「野風僧」で孫の門出に花添える

「なごり雪」歌って少し若返る

王将を歌えば元氣やつたるで

選曲は要らぬ持ち歌一つだけ

持ち歌というほどでなくても、誰もが一つや二つは思い入れのある曲があるはず。亡き母への想いを切々と綴った「吾亦紅」。子の成長に期待している「野風僧」。旅立ちと別れの切なさを歌った「なごり雪」。勝負師根性を謳い上げた「王将」等々。いずれも、メロディーだけではなくその歌詞に打たれたからこそ終生忘れ得ぬ曲となったのでしょうか。

カラオケが嫌デイスサービスに行けません

カラオケへ義理の拍手は義理の音

カラオケの声で嫁から叱られる

音痴だと自覚できれば軽症だ

突然に上手にならない歌と文字

カラオケ嫌いは珍しくありません。その理由もさまざまです。「騒々しいのは苦手」「酔っぱらいは嫌い」「下手な歌は聞きたくない」。そして一番多いのは音痴だから「だ」と思います。しかし、上手ぶって歌っている人より音程が外れている方が盛り上がりやすい。急には上手にならないのですから聞き直して笑わせましょう。一躍人気者になること間違いなしです。

加島 由一

澤井 敏治

古今堂蕉子

野下 之男

平木 公子

岩本美智子

米田 恭昌

神夏磯典子

鈴木いさお

青砥たかこ

『麻生路郎読本』余滴 (38)

「新川柳」の路郎 ④

葉原道夫

「新川柳」五四号（明治45年6月）に、路郎は、自句を織り交ぜた小説風の文章を発表している。気になった点を、*で触れておく。

葉櫻と二人 路郎

二人は離れ^{はな}れに^ど住んでゐた。
女は若々しいうちにも何處か世帯染みたところがあつた。*1そして

其のつ、しみ深いこゝろから到底も添へないものと諦めて其の日その日を味氣なく暮らしてゐた。男からの時折の音づれも徒らに胸を苦しめたに過ぎなかつた。かへつて華やかな戀にたゞわけもなく暮らした頃のことを想ふては、いつまでも獨りであることが悲しく寂しく、止め度なく煩傳ふ涙の

露に枕あてをしめらすこともあつたが、思ひ斷れよと運命の神の暗示に是非なくも燃ゆる思ひをつとめておさへてゐた。幾度か返へしの文はした、められたまゝ、で……男の手には落ちなかつたのである。

男は其の若い心の凋落、若い情緒の敗滅を嘆美し歌つた現代の短詩人であつた。不安を交じえた絶え^{はな}れぬ戀は渠の内的生活を何んなにか淋びしく物おもはしくしたらうか。

*2よりかゝる鐵柵に湧く淋しさよ

隔て住む人の上を思ふては、鐵柵に凭りかゝる其の影の如何に薄かりしことよ、ア、渠はそのやるせなさを歌にして暮れゆく一時を想ひ沈んだのである。

黄昏ては葉櫻のしげりも黯づんで見ゆ、女は大理石でぎざまれたかのやうに、背戸にもたれて手にせる文をちつと視入つた。時々深い重たい溜め息を漏らして折（筆者註―「打」ち仰いだ、そのかんばせには紅の色もみへなかつた。さも懷しげに文のなから（筆者註―なから））、

*3櫻散るころよりふみの來ずなりぬ

*4想ふべく泣くべく來れば葉櫻よ

の短か詩を歌つた、ビリ、と動いた眉には露を宿してゐる、いつしか暮れ果て、青山の空には、星がきらめいた。

時は日は流れて文は來た。その短かいよそくしい玉づきには彼の女の血が流れてゐたのであつた。灰色の壁に背をもたせた若い詩人の、蒼白な唇はわな、いた。手紙は渠の手からすべり出た。

その後渠は變ひ來る淋しみと果敢なさとになすこともなく日を過ごした。その悲し心が詩となつてほとばしりてた。*5眞珠のやうな美しさと柔みとが、渠の詩のいちであつた。

絶え絶えの戀想ふ日のやるせなさ

離れ住む今日この頃の苦しさよ

かくて續く哀愁に日は流れ、月は逝つたのである。

又文の來ずなりにけり梅雨に入る
冷めきらぬ悲しき戀に生きてあり

來る日も來る日もしとと降りに降つた。渠の暗愁になじんだ心はますます暗い方へ走つた。死灰色の空を仰いだ渠はやるせなさ相に歌つた。

苦しさに死ぬ氣になれぬ弱きわれ

勤めたり勤めなんだり五月雨

氣だるさに渠は何事もなし得なかつた。机の前に座つてゐることさへも苦しかつた。思ひ出したやうに頭を掻きむしつて其の苦しさに煩悶^{だうだう}えた。そんな時にはつとめて酒に親しんだ、たゞ何^{なん}ことも忘れたさに。酒賣^{さか}る家の二階へ、二階へと運んだ足の數も度重なつては反^{かえ}つて心の荒^{すさ}むのみであつた。

酔ふて來てひとり淋びしく唄ひけり

君とありし日は一合の酒に唄ひぬ

渠は唄ひ女の媚をせめてもの心やりにした。それも永くは續かなかつた。渠の眼には紅^{くれない}ひたゞやう舞衣も渠の耳には歡樂の興をいざなふ鼓の調べも、は入らなかつた。

若き心酔ふたふりして肩による

そんなこともあつた。けれども金で買へない、ある力強いもの、あることを知つたのであつた。

悟つた後の淋しさは、悟らぬ前の淋しさに倍した。

金ためて何にならうと思ひけり

金ためて金ためて人死んでゆく

渠は遂に住み馴れた渠の土地を離^{はな}れた。金色の沈んだやうに渠の落ち付いた頭には既

に／＼女の影は宿して居なかつた。そのうちの渠は自由に奔放に生活を續けて居る。

* 6 これと殆んど同時に女は男に逢ひ度さに男の住んで居た土地へ移つた。この不思議な運命に捕らへられた二人は運命の神の無慈悲を呪つた。

かくして星移り年もかはつた。それ以來二人は未だに離れ離れに住んで居る。離れ／＼に住むのも一時のこと何時か逢へやうと細いのぞみに生きてゐる。

互いに許した二人は、昔のやうな華やかさはないけれども詩に歌によつて僅かに心を慰めて居る。

再び葉櫻のころが來た。路の砂は初夏の強い光線にきらめいてゐる。過ぎし年の今日この頃は如何ばかり淋みしかりしよ。黒みゆく葉櫻の陰を想ふて若い詩人は心ゆくばかりその懷しみを味^{あじ}つた。

初夏の夜をひとり寝の薄ぬくみ

地をかへてみる葉櫻の淋びしさよ

V. VII. NIHONBASHI.

* 1 「そして」で改行しているのは、「そして」の後に、間を置きたかつたのか。あるいは、単なる印刷ミスか。

* 2 2 4 の句は、「矢車」二七号（明治44年6月）「このごろのさびしさ」一

三句の、2 は二句目、3 は一句目、4 は六句目に発表されたもの。他の句の初出は未詳。2 2 4 の句から、この文章を發想したもので、他の句は、この文章を書くときに、新たに作つたものだと思われる。2 2 4 の句は、一句としての完成度は高いが、その他の句は、文章のつながりとして挿入されているものが多い。その中で、「初夏の夜をひとり寝の薄ぬくみ」は完成度の高い句としてチェックした。

* 5 「眞珠のやうな美しさ」とあるが、これに続く「絶え絶え」「離れ住む」などの句が、その言葉にふさわしい句だとは思えないが、当時の路郎自身が目指した詩の境地がうかがえて、注目されるところである。

* 6 男が住み馴れた土地を離れるとともに、女が男に逢いたさに、男の住んでいた土地へ移つたというのは、あまりにも都合主義だと感じた。

（次回に続く）



(投句223名)

短い秋から一気に冬へ、そして今年も残りあと僅かになりました。

私の大先輩は「自分を鼓舞する思いで五年日記をまた買った」と先日言。

われていましたが、日記すら書いたことのない私としては恥ずかしい限りです。

五年日記とまではいかなくても、手始めにまず一年位からでも挑戦してみようか、恐る恐るそんなことを考えている年末です。

モナリザという名の猫を飼っている

(評) 今年は空前の猫ブームだと言うけど、そんなものに関係なく我が家の猫が一番。それにしてもいいお名前ですね。

秋の天スモ離れをしませんか

(評) 顔を上げれば空は抜けるような青

色、スモホにかじりついて下ばっかり向いているのはもったいんです。

終活を完璧にして生きつらい

(評) 完璧に終えたはずの終活も、生活していれば色々なものがまた少しずつ元に戻ってしまうように思えるのかも。

長い夜言葉の渦に呑み込まれ

(評) 長い夜に呑み込まれてしまうのは「言葉の渦」。小説も詩集も、私を掴んで放さない手はさまざま。

悪人が仏の道をまっしぐら

(評) 善人が善人を全うするのは難しいが、悪人が悪人を全うするのもまた難しい。仏の道へ逸れる(?) ことだって。

遠いけどフランスパンの旨い店

(評) 行くのはちよっとしんどいけど、やっぱり美味しいものが食べたい。そう思いながら今日も通うのです。

詩ごころをしきりに揺る小雪舞う

(評) 自然の季節の変わり目には詩ごころをそそられるもの。それが美しく舞う小雪であればなおさらでしょう。

スクープを競うマイクの二十四時

(評) 週刊誌もテレビも、スクープという

代物には食欲です。たとえ早朝や深夜といえども追っかけるのです。

冬は強気にマッチ売りの少女

(評) 冬の寒さが厳しければ厳しいほど、マッチ売りの少女の存在の儚さが際立ってきて胸がチクチク痛みます。

幌馬車のはるか近づく音がする

(評) 幌馬車という、近頃お目に掛かれぬものが近づく音が聞こえるのです。それも記憶の底の底から。

夜叉になる良心をいま追い出して

社を出たら急にやる気が出始める

雪室にりんごも豆もじゃがいもも

ポケモンGO家も時間もどこへやら

おむすびの冒険はじまりはじまり

幸村の館へ秀頼からの使者

意を決し飛び出した頃若かった

恋の道風のいたずら雨やどり

沖繩県 森山 文切

沖繩県

森山

文切

森

西

森

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

西

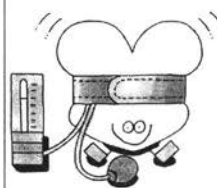
西

西

弘前市 稲見 則彦
張り込みの刑事に辛い大晦日
高槻市 富田 美義
お寒い居間も世間も寒いこと
富田林市 古田 千華
好きですと書けたあの日のカプチーノ
和歌山市 古久保和子
一言に平衡感覚が狂う
弘前市 高瀬 霜石
悪いことしていないのに不整脈
高槻市 松岡 篤
クリスマスケーキ電車に置き忘れ
奈良市 大久保真澄
公称は駅まで五分だった家
藤井寺市 若松 雅枝
同じ墓には入らないよと妻が言う
明石市 桃谷 和郎
ネオンから遠いが星の降る故郷
大阪市 柴本ばつは
蹴って下さいどんな転がり方するか
佐賀県 真島久美子
笑えない話を消化して帰る
日置市 前田 洋子
ボタン雪明日はあの人きつと来る
玉野市 片岡 富子
困難になるほど力湧いて来る
大阪市 江島谷勝弘
家の中温いだろなブチ家出
八尾市 宮崎シマ子
熟れたかな故郷の庭の柿の木も

吹田市 木下 敏子
求婚はでかいお家を建ててから
橿原市 居谷真理子
コロッケを食べて元氣を出しましょう
河内長野市 大島ともこ
回り道してもなかなか冷めぬ酔い
大阪市 石橋 直子
頭軽くしてカラオケなどいかが
鳥取市 倉益 一瑤
満天の星にアリバイなどいらぬ
長野県 丸山 健三
パティシエの家が童話になってゆく
大阪市 笠嶋 恵美
宇宙人地球旅行に来たんやて
富田林市 関 よしみ
こんな日は鍋に限ると急ぎ足
四条畷市 吉岡 修
思い出す峠の別れから会えず
鳥取県 斉尾くにこ
やさしさが辛くて泣いたクリスマス
和歌山市 平田 元三
ど演歌をピアノで弾くてどんな人
藤井寺市 津田シルク
飛び出して世の冷たさが身にしみる
箕面市 出口セツ子
遠くとも小さな我家夢一步
橋本市 石田 隆彦
煙突をやっと見つけたサンタさん
東京都 川本真理子
僕を待つひとりばつちの家である

2月号発表 (12月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

生駒市 飛永ふりこ
焼けばっくい今さら消火できませぬ
高槻市 島田千鶴子
我が家にも明りがとる妻がいる
神戸市 松井 文香
教会のミサが始まる急がねば
豊中市 上出 修
肩たたきトホホホホホホホ職さがし
鳥取市 夏目 一粹
古い二人酸素不足の家になる
神戸市 富永 恭子
謝ってみよう豚汁煮える頃
西宮市 緒方美津子
もう師走一人で暮す母を訪う
寝屋川市 籠島 恵子
忘れもの今来た道を帰っている
奈良市 宇賀 史郎
辺境の子に夢運ぶサンタさん
尼崎市 藤岡 りこ
謝るかしらばくれるか酔い醒める
鳥取市 永原 昌鼓
人生はプラスマイナスゼロでいい

本社 十一月句会

◇十一月七日(月)午後一時
アウイーナ大坂

十一月句会は百二十三名(投句者六名)で開催された。初出席は井澤壽峰さん(松原市)久世高鷺さん(羽曳野市)藤原ほのかさん(岩出市)宇賀史郎さん(奈良市)の四名。句会に先立ち、過日亡くなられた同人藤岡ヒデコさん(府中市)宮園射月芳さん(貝塚市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は島田誠一さん。題は「季語に見る日本人の感性」。古来、山紫水明の地で四季の移ろいを享受してきた日本人には、知性や理性以前の無意識下の感性が自ずから備わっている。季節感(歳時記)を生み、折々の美しい日本語(季語)を生み出した。日本文化を「感性の文化」と呼ぶ所以である。美しい言葉と感性を、私達は川柳という形で継ぎたいという思いを、「四季の歌」の合唱で確かめ合ってお話を終えられた。

(真澄) 月間賞はたむらあきこさん(和歌山市)
(司会)真理子・隆彦(協取)すみ子・勝弘
(受付)憲彦・志津子(清記)憲彦

席題「板」

鈴木いざお 選

定年後句会と妻の板ばさみ
黒白の狭間グレーの板挟み
節電と暑さ寒さの板挟み
板ばさみ婿の立場は弱すぎる
胸の底わたしと私板ばさみ
エプロン姿ネクタイよりも板につき
安心た娘の母ぶりが板につき
おばあさんの動作が板に付いてきた
三年目ナースキャップが板につく
札束を詰めるしぐさが板につく
あの頃の伝言板が抱くドラマ
洗濯板踏んで鍛える骨密度
サーフボード小脇に波と遊ぶ古稀
看板娘六十路こえても店の顔
内緒で板さんくれるフグのキモ
大漁へ板子一枚命張る
ど板でつながっていた長屋っ子
鉄板の熱さにタイ焼が跳ねる
立て板に水で候補者そしり合う
すれ違い伝言板で去った恋
映画界大看板の死を悼む
板さんの腕を老舗の格に添え
板子一枚底は盛土もしていない
文化住宅だったベニヤ板だった
組板に乗せられ悟りひらいてる

憲彦 朝子 堅坊 克己 楓楽 直樹 眞澄 六之 裕乃 紀代 宏造 恭昌 勝弘 良子 満作 黒兎 狸月 一文 誠一 保州 真理子 ほか

板塀の穴の向こうは別世界
生きてるか回覧板が聞きに来る
名人が梳ると板も美術品
デジタル化伝言板も姿消す
大臣よ降板はやく決めなさい
組板は妻の機嫌をすぐ見抜く
風雪に耐えた昭和のベニヤ板
立て板に水で攻め込む妻の愚痴
看板に偽りないと但し書き
組板の上でごろごろしています
板の間に北風小僧正座する
裏長屋溝板踏んで下駄が来る
佳
まな板のくぼみに母の隠し味
板ガラスひっそり帰り待っている
まな板もつぶやく時があるのです
板の間に正座して聞く風の音
板の下都庁ゆるがす震度六
人
あの世まで繋がっている足場板
いくばくの疵まないたもわたしにも
天
美しい板場美しい指だ
軸
板さんの様にはいかぬ桂剥き

黒彦 武鬼 靖子 忠子 一歩 朱夏 富子 英夫 義 完司 廣子 利子 ひとみ 信子 哲男 富美子 完司 あきこ 蘭幸

兼題「橋」 小谷 小雪 選

ひょうたん島に橋がかかれば行くつもり こみつ
ブリッジの出来る足腰自慢です (蒲久美子)
ひとりしか渡れない橋譲り合う
かけ橋になろうなろうと鳥は飛ぶ
ふるりの橋が諸手を挙げて待つ
愛ちゃんと別れた橋も朽ちたまま
棧橋のかあさん遠くとおくなる
魂が渡って行った虹の橋
二重橋写真の母はかしこまり
吊り橋を渡る時だけ恋人に
吊り橋の村に観光バスが来る
この橋を渡れば後期高齢者
世の中を頓智で渡る橋がある
忍一字橋の向こうにある夜明け
助け合い二人で渡る丸木橋
吊り橋の真ん中でしたラプコール
余生まだ凸凹橋の数あまた
ゆらゆらとたまゆらの橋渡る喜寿
いくつもの橋を渡って得た答
音符の橋世界をかけるボブディラン
橋跨ぎ四国路で聞く讃岐弁
吊り橋をバイクで渡る村の人
両親を捨てて渡った橋がある
煩悶の心を渡る恋の橋
橋桁に神の衣が引つかかる

葉子 恵子 光久 恭昌 ひとみ 敏治 進 憲彦 真理子 大輪 准一 寿子 恭昌 あや子 あや子 美智代 昌代 満知子 妙子 淳司 美智代 寿之 廣子

若さとは橋をいくつも持つている
橋渡しどうも失敗したらしい
勇気を呉れた橋桁にある青テント
沈下橋どっこい明日へ生き延びる
後戻りしないと決めて渡りきる
橋の真ん中失言は戻せない
川にすれば喉につかえたような橋
手のふるえ妻に見られたかずら橋
歩道橋とつても恐い歳になり
この橋を渡れば何が見えますか
つり橋の対岸に母ひとり住む
鬼になり蛇になり越えた橋がある
住
陸橋がチャレンジせよと立っている
タワーブリッジ何でも出来る気にさせる
鉄橋を渡ると変わる風の色
頓堀の橋のたもとで恋に逢う
一枚の賀状でつなぐ橋もある
人
ひと言に利那の橋を架けられる
地
跳ね橋を渡りゴッホに逢いに来た
天
対岸に届くと信じ渡る橋
軸
付け足しの一言ふわり橋架ける

楓 良子 としお 久仁雄 ほか 希久子 保州 由一 たもつ ひとみ 賀世子 楓 完司 志津子 進 玄也 富美子 あきこ 朱夏 瑠美子

朴権恵 次の打席はもうこない
大谷が打席に立てば皆燃える
打席でもときめき呉れた二刀流
大谷の打席へ神が降りてくる
マウンドも打席も金になる男
秋風が戦力外を選ぶ打席
アトヒトリコールの中で立つ打席
打席から漲る闘志プロローグ
打席のイチロー武蔵と同じ目だ
大阪弁野次つて打席丸うする
打席からおかんが見える草野球
沸き立った血潮押さえて立つ打席
世代交代次打者が満を持している
レギュラーの打席は見えてから遠い
引退へ最後の打席ただ無心
なんやねん三振せよとベンチから
棒持った案山子が立っている打席
引退の打席にコール鳴り止まず
ピッチャーの策を読み解き立つ打席
振らないと打てませんねと解説者
武将なら鎧兜で立つ打席
光らせてる 一打席 一打席
ストライクが恐くて打席立ったまま
やつと得たチャンスへバット意地を見せ
セーブ王打席に立ったことが無い

こみつ あや子 正彦 富子 (蒲久美子) 誠一 耕治 柳伸 賀世子 誠一 (蒲久美子) 千代 富美子 篤 いさお 勝弘 克己 小雪 光久 憲彦 大輪 蘭幸 瑠美子 千代 六点

兼題「打席」 米田 恭昌 選

審判に打順が回る草野球

バント指示悟られぬよう立つ打席
バンドの構え見せる打席のスラッガー

打席順変えて勝利を呼び寄せる

広島もハムも神っていた打席

久々のヒットへ験のいい打席

一球へ鬼鬼鬼になる打席

ジャンケンで打順が決まる草野球

日本一決める打席の胸の内

引退の最後の打席わく拍手

甲子園足がふるえた初打席

代打の意地見事な仕事して見せる

佳

少年の夢を見据えている打席

疵だらけの打席と誰も気付かない

大谷も打席に立てば打者の顔

プロの水甘くはないと知る打席

イチローの真似して待っている打席

人

下積みの汗が打席を沸かして

地

努力してやっと打席に立つ代打

天

空振りも絵になる打者のいた昭和

軸

いざ出番監督の目が僕を射る

兼題 「脱ぐ」

片山かずお 選

何かにつけ割れた腹筋見せたがる

社の鬼も仮面を脱げば父の顔

黒田投手嗜れ嗜れ脱いだユニフォーム

大臣になって裸にされた過去

脱ぎ捨ててまた母ちゃんに叱られる

脱いだ服そのまま独り居の気楽

喪があける悲しみ脱いで明日をみる

乱雑に脱ぎ捨ててある子沢山

妻の肩借りて靴脱ぐ年となり

白足袋を脱いでめでたい事が済み

礼服を脱いだら言葉まではだか

背広脱ぎ柔和になった夫の貌

シャッポ脱ぎ孫に教えを乞うスマホ

少年の挫折は大人への脱皮

靴を脱ぐ酒場はいつも飲み過ぎる

はくがはくがとモタモタ脱ぎ着する二歳

男気で一肌脱ぐと言うセリフ

悪友のピンチ一肌脱ぐ気概

一肌脱ぐ言うが潮時すんでいる

年金で片肌脱げる訳がない

秋風に仮面を脱いで深呼吸

片肌を脱いで元氣なギャル御輿

風光る私も脱皮したくなる

脱ぎ捨てたうそが着替えを始めてる

まっお

(奥)五月

和宏

敏治

大輪

英夫

正彦

満作

篤

哲男

文代

利子

裕之

寿之

完司

蕉子

靖博

正彦

修

一歩

あや子

淳司

敏治

淳司

脱皮して心を洗う滝の音

じゃあ又ね脱いだ帽子をそっと振り

殻脱いで一歩踏み出せ引籠り

かみしも脱いで天下論じて縄のれん

脱ぎやすい下着揃える要介護

重ね着を脱ぐ面倒な冬の風呂

人間の仮面脱ぎたい時もある

殻脱いで八日目はもう啼かぬ蟬

肩書きを脱いだら妻の電話番号

仮面脱ぎ本音の自分見る深夜

何もかも脱いで本音の一行詩

ブランドのシャツが上衣を脱ぎたがる

佳

煩惱をするりと脱いだデスマスク

脱いで皆晒す良いとこ悪いとこ

ヴェール脱いだ新婦が見せた角と牙

育児パパ企業戦士の鎧脱ぐ

人間を脱げばはるかに花浄土

人

終活へ鎧兜を脱ぎ捨てる

地

嬉しさの形に服を脱ぐ子供

天

バンザーイと母を脱がせている介護

軸

ただいまと服も疲れも脱ぎ吊るす

朱夏

良子

朝子

直樹

栄子

完司

一歩

いさお

憲彦

黒兎

(楠)和夫

六点

楓楽

博

眞澄

富美子

富子

進

日の出

耕治

耕治

耕治

耕治

耕治

耕治

耕治

兼題「ボン」 木本 朱夏 選

ボンの語源きつと狸の腹鼓
妙案がボンと飛び出る新刊書
びっくりボン飯はまだかの声がない
気合いでボン自転車乗れた夕まぐれ
赤い羽根にボンと百万夢だった
大隅さん研究費にとボンと出す
ボンボンと威勢はいいが火の車
シャンペンとラムネボンにもある個性
栓抜きのボンで始まる無礼講
ボンと抜くシユワツと返事するビール
コルク抜くスリルが蒼く炎えている
お久し振り記憶がボンと弾け出す
弾けたら魑魅魍魎が出る私
ボンボンと断捨離したいです
真ん中でボンと火花を揚げている
ボン菓子のボンの響いていた昭和
素っ気なく押された転居先不明
おでこボン何か忘れてしていると爺
膝ボンと叩いてまたも早合点
離婚届妻があるくボンと置く
太鼓判ボンと押されてから迷う
ニコニコボン君が頼りと飛ばされる
大切にしようボンボン言う彼女
削除キーばんと押したい罪の数
ボンと投げた石かも知れぬ流れ星

チーボンで過ごした四年親知るや
お葬式でオシボリボンとやっちゃった
じゃんけんボン後出しをして負けてやる
くつろげば膝に小猫がボンと乗る
皆ボンと大人になった訳じゃない
ふと会話途切れ鬼灯ふくらます
どんぐりのボンから遠い日の記憶
リルケの詩から秋の音符がボンと出る
指先でボンと弾いているお世辞
任せなさいと胸を叩くと咳が出る
風船が僕見てボンと割れました
ボンボンボン秋がわたしを追いつ越した

佳

ボンと鳴るアベノミクスか風船か
打てばボンが返らぬふたり冬隣
ニッボンのボンがお金を見て跳ねる
ボンと吐きボンと返ってくる答
肩ボンといつものところで待っている

人

そして秋 人事が僕の肩叩く
地

神様のガラガラボンで変わる運
天

財布ごとボンと渡してみたかった
軸

蓮ボンとひらく仏のメッセージ

楓 楽
耕 治
真理子
希久子
五月
奏子
あきこ
希久子
郁夫
かずお
あや子
宏 造

富美子
宏 造
完 司
寿 之
紀 乃
武 彦
一 文
郁 夫

兼題「未熟」 小島 蘭幸 選

まだ未熟本を頼りの娘の料理
未知数をいっぱい持っている未熟
嘴は黄色いままで老いている
ぶつかって励まし合って青林檎
オーディション慣れも声が掛からない
飛び箱の前で静止をする足だ
イチローはまだ未熟だと技磨く
推敲もせずに満足してしまう
ベテランが挟んで守ると登山靴
湯上りのビール未熟な今日を閉じ
未熟だらけで平均寿命きてしまう
大声で派手に動いている未熟
雑巾の絞れぬ嫁をいろはから
川柳はまだ未熟修行の身
恋知らぬ未熟片想いの未熟
後期高齢まだ未熟です恋もする
未熟で良い仕事はロボットがします
まだ未熟まだまだ未熟柿の種
色褪せた辞書が未熟を責めてくる
嘴の黄色いベンの理想論
頂点をすぐに見つけている未熟
まだまだや水を片手で受けている
自分では合格点を出している
耳学問だけは未熟と言わせない
天辺が見えない趣味だから虜

(奥)五月
ひろ子
葉子
奏子
清久美子
なぎさ
克己
完 司
五月
日の出
握 夢
憲 彦
賀世子
満 作
いさお
敏 治
賀世子
義

(柿)和夫
洋
恵子
美津子
信子
柳 伸
寿 之

逆転打歓喜しているまだ青い
無限大の明日を夢みる青い麦
未熟な鏡実物だけを写し出す
見守って欲しい発酵中の夢
未熟では済まぬ危険な北の核
飲み助でペーパードライバーとおす
未熟者です結婚式の一ページ
過呼吸になって未熟があらさま
まだ青い実です真綿で包まねば
完熟のあやうさはまだ知らぬ恋
かくれんぼ恋は未熟のまま終る
自覚症状のない未熟者です

佳

美しい葡萄だきつとすっぱいぞ
未熟さが好感度を上げています
まだ傘寿見たい聞きたい喋りたい
不安はないか十七歳の母子手帳
遊ぶのがとても未熟な戦中派

人

完成形ない人間が面白い

地

ポディーは老朽ハートは青二才

天

私が許せぬわたくしの未熟

軸

簡単にスランプですと言う未熟

郁 夫
朱 夏
瑠 美 子
博 洋
一 歩
宏 子
紀 乃
朱 夏
真 理 子
瑠 美 子
義 義
真 理 子
信 子
宏 造
扶 美 代
保 州
富 美 子
完 司

たむらあきこ

第35回 鳥取県没句川柳供養大会

とき 12月18日(日)

午前10時開場・受付

ところ 新日本海新聞本社ビル

5階大ホール

会 費 JR鳥取駅南(駅裏)徒歩3分
2000円(昼食・作品集呈)
精進落し 3000円(懇親会希望者)

兼 題 「敗者復活吟」 新家 完司 選

(この一年間で没になった句から2句吐)

「愛と憎」 高木 勇三 選

「予言」 矢沢 和女 選

「風を読む」 石橋 芳山 選

「呪う」 中蘭 清 選

「大地」 田中 天翔 選

「エンド」 黒田紀美江 選

「しがらみ」 小谷美ツ千 選

席題なし 各題とも2句吐

投句締切 11時半厳守

欠席投句 1000円

投句先 (切手可・作品集呈11月末日締切)
〒689-0202

鳥取市美萩野2-171-3

中村 金祥 宛

電話 0857-159-11056

主 催 川柳ふうもん吟社

第4回「ふるさと」川柳募集案内

課題 「静」(1口2句・12人による
共選・複数応募可・清記選)

磯松きよし 高瀬 霜石

尾藤 一泉 山倉 洋子

丸山 進 玉置 和美

阪本 高士 小池 正博

小島 蘭幸 吉松 澄子

石神 紅雀 浅利亥一郎

締切 平成29年1月31日(消印有効)

投句料 1000円(切手不可・小為替
等使用のこと)

(誌上大会用紙他便箋等使用・
2句を記入のこと)

賞 最優秀賞 1点(樺細工色紙掛・
仙北市産品)

優秀賞 1~9席(仙北市産品)

発表 柳誌「湖」4号(平成29年4月
号発行予定)

問合せ 浅利亥一郎川柳事務所まで

電話 FAX

0187-48-2236

〒014-0602

秋田県仙北市

ひのきない字長戸呂85 浅利方

第4回「ふるさと」川柳事務局

をんねん

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

秋桜しっとり唄う相聞歌
拒まれたことに気付かぬラブレター
まほろばの虫を抱いてるねじれ花
仔牛売る目と眼が合った別れの日
ふる里の温もり守るこぎん刺す
目配せで動く男に飼慣らす
遺産分けしてから不通になる賀状
赤とんぼ山の思い出語り出す
駄々っ子も母のことばに諭される
しっとり秋の長夜に歌を詠む
夢売りに連れていかれた甲虫
しっとり秋を頂く土瓶蒸し
橋ひとつ壊れて人の絆知る
カンタンその優しさが眠らせぬ
淋しさをベットの癒すひとりの居
飼っているウサギの耳と共に老い
おぼろ月まだまだ毛虫生みますか

慕情 重虎 芳生 一呑 則彦 美鈴 井蛙 花匠 風来坊 京子 荔 洋子 隆樹 黙人 のぶよし 柳子 龍馬

下駄の音鳴いてる虫がハタと止む
夜遊びに飽きた蝶々を飼い馴らす
イモ虫がくり返し読むやせる本
音信不通うわさをすれば寅さんだ
しっとり新妻玉汗農の笑み
耳遠い妻と不通になる言語
集中豪雨集落群れを孤立させ
恵比須願あの人きつといい人だ
詫びている酒を許さぬ不整脈
五楽庵師薫風師葉恋し
踊り子に鼻息荒いかぶりつき
腕力じゃ負けるが知恵で勝つつもり
絹ごしの豆腐の純白罪深い

南大阪川柳会 津守 柳伸報

喧嘩でも一夜でけろっと嫁姑
核爆発けろっとしてる北のドン
悪さしてけろっとしてる孫の知恵
角番にけろっと忘れ初賜杯
洪ちんを通して余裕ある暮らし
安倍さんは内に洪くて外甘い
注ぎ込んだ昔が見える洪いのだ
洪いのだ相当金をかけている
結論を急かせるお茶が洪くなる
洪いのだでいさんのラブコール
洪いねと地味な男を慰める
色づいた柿に洪いと注意書き

小とみ ひとし 規子 初枝 つとむ きよし 吞舟 ふさゑ 花峯 氏加子 一花 霜石 和香子 タカ子 和雄 あさ子 たもつ 柳右子 一歩 修シマ子 栄子 いさお 実 柳伸

テレビの音少し下げれば起きる妻
介護の手少しゆるめて舟をこぐ
君子豹変同居なかなかむつかしい
オレオレと判り河内弁でどやす
酒回り昼行灯がトラになり
天候の豹変山は恐ろしい
東京へ弾みをつけるメダル数
沖縄が国の無慈悲に怒ってる
こち亀のギネス飾ってピリオドを
仏壇に菊一輪の秋を置く
山海の珍珠が攻める旅日記
老いせまり今日が一番若い日だ
元氣なら長生きしてもいいです
主婦の座も生前退位させて欲し
豪栄道十四連勝初優勝
ほどほどの嘘で仲良く暮らしてる
ノラ猫までプームに乗って頭が高い

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

国会議事録大事言ったこと
子に記録破られ父が乾杯す
喜寿前に生きた記録を自分史に
一年に3日は書いてある日記
ときめいた事を記録に残しとく
本心が言えぬ背中男泣き
取り引きも背中丸めて玉の汗
ふりむかず背中で聞いたさようなら

勝弘 更紗 ルイ子 東風 篤 克己 弘子 国和 直子 郁夫 なぎさ 弘委智 志華子 楓楽 恭昌 昌紀 直樹 美世子 敏晴 福貴子 まつお 芳香 小枝子 満寿恵

独り居にとりわけ淋し背のボタン
背中見て苦勞のかげが浮かびます
左肩少し落ちてる背中すき

半 銭
廣 子

お月さま二人の秘密照らさない
火葬場の煙になっていく秘密
若かりし頃の秘密はむ時効

清 重
照 彦

水 野 黒 兔 選
加熟する地球へ水を打つ柄杓
もの忘れバントマイムがうまくなる
決断が乱れないよう落し蓋
はしゃぐのが好きな三色ボールペン
簡ちよるでなかつた帰農した誤算
ジャンプしてタッチ出来そうの星
ほどほどで止めていつでも悔いている
背泳ぎで夕焼け雲を見た部活
途中まで送つて未練増えただけ
かもめーる二通来ただけ秋となる

純 子
章 子
八重子
無 限
妻 子
澄 空
か ず お
恭 昌
博 泉
正 和

父の背に学んだ技術と心

志 津 子

虫の音に包まれ虫になってゆく
油虫人間よりも黒くない

石 花 菜
完 司

芳 光
貴 恵
美 美 子
み ち 子
く に こ
三 津 子
美 ツ 千
悦 子
久 芽 代
陽 之 助
久 江
美 知 江
野 蒜
紀 美 恵
節 子

大女優背中で勝負三十路まで

舞 蹴

今朝も又ほのほの明けて生きて行く
娘の髪をといて結んで母の笑み
昭和から寅さんひよいと顔を出す
耳遠くなつて笑顔が増してきた
庭に花小鳥の籠に小鳥いて
スイスイとアキアカネ飛び稲黄金
たつぷりと湛えた水が牙をむく
だれにでもたつぷりとある二十四時
たつぷりの愛だと肩の荷が重い
たつぷりと歴史つまつた太い腕
あと五年四十万秒残つてる
たつぷりと明日死ぬ蟬の声を聞く
草も木も過剰な愛に立ち枯れる

照 彦

完 司

崖つ縁背中を押した奴がいる

昌 紀

ほのほのお地蔵様に傘たむけ

芳 光

美 美 子

背中ばかり見せる父さん嫌いです

ゆ み 子

母の背におもらししたを思い出し

美 美 子

か ず お

静寂に今から陛下の言葉ございます

舞 夢

静寂に思いが募る形見分け

く に こ

か ず お

小僧さんが庭掃く音よ寺の庭

重 信

例えれば静御前のような妻

三 津 子

か ず お

肝臓が静かに怒つてる数値

シ マ 子

静寂な墓地も賑わう彼岸道

悦 子

か ず お

夫婦して話しているのはテレビだけ

満 知 子

カラカラと温泉下駄の行く出で湯

久 江

か ず お

口の中カラカラだらう自爆テロ

公 平

失言がカラカラ立てた悔いの音

久 江

か ず お

敬老の案内状に暴露され

道 子

三つや四つ秘密あるから面白い

久 江

か ず お

丸秘です卒寿で恋をしています

公 恵

ボケットにあの日の秘密入れたまま

昭 照

か ず お

秘密でも酒が一合すく喋る

重 忠

口づけで終つた人がアルバムに

一 子

か ず 子

隠し事なくて寂しい独り者

龍 枝

口づけで終つた人がアルバムに

和 美

か ず 子

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

岸和田川柳会(大阪)

佐藤 幸子報

あふれ出る活力枯れるひまもない
見本なら出来るが手本にはなれぬ
今月も諭吉はしゃいで出ていった
クレヨンで描いた骨のない魚
もの忘れバントマイムがうまくなる
神経が痛む小さな嘘ついて
雑種です特別な主義ありません
漏れたらしい針の穴からあの噂
大事にしる俺は年金産む機械
悩みごと真つ赤な夕陽飲みこんだ

千 代

桂 子

由 紀 子

直 樹

日 の 出

佳句地十選

(11月号から)

米 澤 俣 子 選

ふ り こ

紀 雄

真 理 子

昭 紀

章 子

千 代

桂 子

由 紀 子

直 樹

日 の 出

亡き母の想い出に泣く形見分け
六万人越えた百歳ただの人

夫逝き寝室気分最高だ

ひもすがら老いて尚増す好奇心

核実験地球ボロボロ古い進む

懐かしい遊びスマホが食べている

父母の下駄鳴っていた村祭り

確執で居心地悪い通夜の席

お見舞も小声で話す四人部屋

狭いけど何処より我が家落ちつける

老いの耳言つた言わないよく揉める

限界集落それでも母は動かない

一枚の写真であるのころに戻る

上座では居心地悪い次男坊

ユーモラスな顔で説いてる資本論

懐かしい昭和を生きた木の校舎

ユーモアが凝む空気を和ませる

狭くても親子四人のパラダイス

愛の賛歌照れず歌える歳である

話べただけ顔がユーモラス

開けられずチップ袋に馬鹿にされ

投げられるもの片付けてした喧嘩

きやらばく川柳会(鳥取)成田

築山に山百合一輪ほこらしく

不器用も祭囃子に手が踊る

けだるさもビールでしゃんとする季節

香代 喜代志 清 幸子 笑司 信二 愿 大輔 隆昭 珠子 忠太 ダン吉 信子 白水 英夫 ひろ子 ふさゑ 益男 みつ江 康信 洋二 義泰

骨無き兄の命日終戦日
夏祭り村の絆は五百年

気休めに老後の本を読んでいる

喉の奥のナメロー喜んだ

不本意な成績表をみせる孫

身体一つで何も忘れて旅したい

ハミングがみどりの風に乗っていく

植山の話題もやはり都知事選

朝日さしひかり耀き氣も晴れる

手の震え抑えようとて止まらない

一言に頭が下がる人の情

前傾姿勢スニーカーから叱られる

たばことは縁切りをしてガムをかむ

骨折なし食事で摂ろうカルシウム

甘いキビ母さんクラス持たせてやった

太陽と月が届けている夜明け

はぎ合わせ繕いながら今を生き

暑くてもアリに負けてはいられない

青畳部屋から望む夏の大山

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

秋彼岸四国愛媛のタルトです
ブライドが底抜う音聞き流す
無所属であがりくるとお面替え
ボケモンの出現マナー乱れがち
玄関に飾る縁起の牛蛙

かね子 幹啓 紀の治 桐子 恵子 正二 多美子 千代 登実枝 初枝 治代 日枝子 宏之 美草 美佐子 瑞枝 美智子 美穂 ゆたか

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

灯りを消してミルクウエー突っ走る

テリトリ一少し広げて靴磨く

つまずいた石も私も同じ傷

光らねば明日の風が吹いてこぬ

酒という荷物背負った山頭火

お荷物にすっかりなるう愛されて

ブライドが背骨あたりを攻めてくる

持った人だけが重さを知っている

もらえる物はたとえ荷物になっても

肩の荷を降ろしてみれば虚榮心

手荷物はニーチェ一冊里帰り

肩書きを解かれて重い荷を降ろす

肩の荷をおろして弾むスニーカー

戦という切磋琢磨で生きてきた

きつと来るだろう介護という戦

わたくしの辞書にYESの文字はない

本当の敵は私だそう思う

戦いはごめんごめんと蟬時雨

ライバルへ戦う姿勢見せつける

もう一度命教える終戦日

嫁にゆけ嫁にゆくなと酔った父

二日酔い頭の中に蟬しぐれ

五感みな緩めて酔うている二人

ほろ酔いにもう忘れてるわだかまり

肩書きに酔ってませんかこの名刺

章子 ひろ子 八重子 碧 義雄 正美 幹子 次根 みね 悦子 義泰 准一 富香 彦弘 倫香 知香 ダン吉 和子 美羽 あき子 智三 芳一 絹子 起世子 明子

心地よく酔つてすべつた二枚舌
酔い覚めの水は百葉にも勝る

ワンマンが自分に酔つてけつまずく

花に酔い友の情けにまた酔うて

花野への旅は手荷物かるくする

今日のこと許しひっそり陽が沈む

喧騒の町にひっそり飯の宿

もやもやを捨てにひっそり旅に出る

五百羅漢のしじまに膝まづく枯れ野

氣苦勞がひっそり皺になりたがる

川柳ぶつもん吟社(鳥 取)夏目

一粹報

ふる里の風に宥めて欲しい傷

退位する潮時を問う菊の紋

老いたなあも一つハンデ背負い込む

老いてまだ夢はどっかり持っている

捨てに来た猫と夕日の中戻る

キャリアとのハンデを埋める叩き上げ

そつとしてあげよう隣り家族葬

けんかする相手がいらないから呆ける

その釘は曲がる音です元大工

告白の潮時待っているリンゴ

安心はどっかり座る妻の尻

女房にはとてもかなわぬハンデ呉れ

天の呼名はただで声が裏返り

さよならは言わぬ会えなくなりそう
どっかりと腰据えお灸すえてやる

菜摘

昇

敏照

みつ江

昭枝

当代

日出男

よしこ

保州

俣子

洋々

無限

房江

みゆき

美恵子

振作

緞

三千代

妻子

地佳平

拓庵

搔之助

一瑤

金祥
凱柳

酔えばまた軍歌恋しい父の酒

優しさはブスに生れたハンデゆえ

食後すぐ横になるのにまだヒト科

旅立ちにハンデは不要共に逝こ

どっかりと座っておれんのです知事

女房にハンデなしでは勝ち目ない

飛車角を落して孫に負けてやる

地球からテロもいくさも追い払う

頑張れとついて来ている影法師

五センチの高さが辛いこれも古い

人生の帰路へ夕陽は美しい

窓際にどっかり座る椅子が無い

どっかりと尻も座つた山の神

運動会ハンデをもらう歳となる

どっかりとガン細胞が動かない

ハンデには強いが情けには弱い

わたくしはハンデなしでは戦えぬ

議員さんほだけて態度デカくなり

御歳暮を止める潮時難しい

反抗の蟻が一匹ほだけだす

方言はだけるは「のほせる」「有頂天」の意

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

山と海の育ちの違い肌合わぬ

病院で天井仰視息を継ぐ

朝の雨起きてはみたが二度寝する
たつぷりと時間あるのに何もせぬ

秋月

文香

天翔

栄子

善平

清信

蟹郎

とも湖

雅女

回春子

八郎

敏夫

昌鼓

節子

賢悟

高鷺

美佐枝

幸子

由美子

一粹

清晋

富夫

妙子

さくら

ハンドクリーム母の時代に欲しかった

この年で顔ピカピカもつまらない

再起への妙薬となる子の寝顔

朝ドラが始まる前にゴミを出す

都知事と都議何かが起きる起きている

商売に向かぬ養子は学者肌

長生きはしようぜまい蚊帳がよい

早起きの父を待つてる茄子トマト

蹴落とした子が気がかりで起きて待つ

地球の肌にあばたが増えてきた戦禍

肌の色違えどみんな地球人

休日はお腹の空いた順に起き

良き伴侶肌のぬくもりわかる人

母の手を思い出させるわたしの手

肌つるん心に蓋をしないから

もう危険みんな逃げ出せ自衛隊

人間だもの壁のみつをが起てと言う

吟醸の蔵はゆっくり時を抱く

お日さまと友達いつも真っ黒け

歳だなあ目覚ましなしで起きてくる

母起きる家中の風動き出す

真夜中の中で三度と言うトイレ

ゴミの日の目覚まし妻にセツトされ

だんじりが仕立てる俄か勇み肌

脅威増し肌寒くなる北の核
残業に追いまわされていた昭和
強力な補修いります古希の肌

ゆみ子

月子

俣子

八千代

舞夢

健吾

ひろ子

唯教

和夫

五月

澄空

素頓馬

かりん

憲彦

敏治

誠一

好

シルク

ヨシ枝

扶美代

清

世紀子

時雄

憲

玄也
みつこ

請求書届いた夢へとび起る

天笑

川柳大阪

山崎

珠生報

泣く力笑う力もあるカレー

弥生

外食は好きなカレーに決めてます

武臣

里帰り父のカレーを褒めに行く

(矢)五月

カレーが苦手なおかしなインド人

(鈴)いさお

レトルトの走りだったねボンカレー

福貴子

ライバルに妥協したのが誤算です

芳香

神様の誤算ヒト科はいくさ好き

まつお

年金減ボクの余勢を狂わせる

一歩

議員さんチップじゃ無いよ政活費

かよこ

禁煙を誓いながらもこっそりと

俊雄

ハートシールこっそり貼って本返す

わこ

こっそりと秘密ある様な素振りする

よし子

内緒だが筆筒貯金がたんと有る

柳弘

狭い国原発なしの楽園に

紀雄

豊洲市場盛り土秘密にしてたのに

美世子

穏やかな日々愛の支えがあればこそ

美籠

この年まで周りにおんぶ抱っこされ

和生

ビッグデータ家計は一人世話は皆

珠生

富柳会(大阪)

関よしみ報

続けねばわたしの芯が崩れそう

登子

人妻もそのかされた彼岸花

伸雄

アバウトと繊細が住む一つ屋根

田鶴子

適当に生きると見える風の色

常男

アバウトに生きて節節では緻密
乱調の海は嵐を背負ってる
陽炎に揺らぐ男の好奇心
仲秋は人の絆よ月友

朋子
慶子
壽峰
高鷺
仁

昭和史に粗雑に出来ぬ深い瑕疵
あの時の原子の炎忘るまじ
命の炎燃やし続けている疲れ
間違えたでは済まされぬ手術あと

一文
壽之
アキ
よしみ
欣之
森子

精根の大輪の菊咲かす愛
てのひらの運河に今もある慕情
逢える日を大切に待つ青い種
一本のペンから焰立つコラム

一文
壽之
アキ
よしみ
欣之
森子

燃えるだけでもえて別れた水溜り

一文
壽之
アキ
よしみ
欣之
森子

足痛く口の運動だけ達者
ひとつぱしり運動がてら遠い店
横断歩道首の運動して渡る
好物があると反対しない母

よし子
紀子
大輪
まさみ
ほのか
富美子
秀子
あきこ
めぐみ
准一
なる子
克子
寿子

反対の路を選んて飛躍する
腕白がむきになってる反抗期
反対の裏に隠れた深い愛
ラベルそのままだわたくしを脱ぎきれぬ

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

ブライドをくすぐり合っているラベル
決めつけて貼ったラベルが剥がせない
生きている限りまだまだ未完成
まだまだと賽銭箱も欲深い
まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだの椅子に虚しい風が吹く

まだまだ粘る波風越えてきた命
白寿までまだまだ詠う心意気
息切れもまだまだ続く茨道
おじいさんと他人に言われたくはない
輪唱のように答えるままだだよ

輪唱のように答えるままだだよ

半袖も片付けられぬ神無月
まだまだやあなたに言われたくはない

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

半袖も片付けられぬ神無月

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

純白の百合がやましき問うてくる
善行をすれば必ず巡ります
頼まれて軽い返事に重い腰
雑草に強く生きよと教えられ

頼まれて軽い返事に重い腰

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

雑草に強く生きよと教えられ

弘子
徑子
和香
保州
日出男
小雪
知香

和香

保州

日出男

小雪

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

知香

秋晴に波打ち際を四千歩

まずまずと誉めりやマイクを放さない

まずまずの夫だったと言わせない

まずまずと思ひまだだとも思ふ

食材に凝つて男の台所

北山杉の一本気には敵わない

食材もグローバル化の台所

逸材と呼ばれた頃が華だった

次々と人材育てた赤ヘル

母の声夕焼くども散つて行き

戦力外それでも隅で吠えている

仕事は定時居酒屋梯子三時間

超変革優勝の夢散つたトラ

歯車がひとつ欠けたら不整脈

何度でもアタックババのイナバウア

散りかかる紅葉さよなら言いたそう

ほかほかとみんな仲良しおでんの具

散るまでの日大大切に花咲かす

豪華道攻めて初V掴み取る

後悔という名で散つた独り言

振り返る昨日とアタックする明日

材料ひかえご馳走作る母の技

城北川柳会(大阪)

近藤

ひしひしと優しさ届く一筆箋

常識を持て余してるガンコ爺

常識を外れさまよう句の深み

北舟

ふりこ

則彦

欣之

哲子

肇

英旺

靖鬼

葉夫

泰夫

洋志

弘之

満子

元一

保子

篤子

正彦

宏子

義昭

文代

求芽

忠子

正報

杵香

榮子

弘委智

子の写真戦火の悲惨訴える

里は秋渋柿吊るす母も古い

なによりも三面記事をざつと見る

酔うほどに人間らしくなつてくる

秋祭りノール賞がやつてくる

左遷地の酒となさげに月も揺れ

石一つ水面に投げて大波紋

常識も知らず政治家吠えている

さんま焼く今宵目黒の殿である

一滴の赤で画面引き締める

国会の軽拳ひしひし九条の重み

夏の恋ほろほろ終るこぼれ萩

生き様に陰り一つも無い背中

九条が揺れる戦中派の出番

イヤリング揺れて未練が騒ぎ出す

ひしひしと攻めくる老いは好敵手

面接ですどく心のぞかれる

長びいて値打ちを下げた良い話

揺れながらポストに入れるさようなら

ITの波常識を覆す

面通し人の記憶のあいまいさ

コラーンの中で常識狂い出す

ノールさんお金どれだけ持つてるの

地球今何が不満か荒れ狂う

鬼の面たまに外せと仏の灯

千年の息づく森にある矜持

美人見では揺れる心を持て余す

寛昭

あさ子

修

いさお

実

直樹

千恵子

五月

志華子

堅坊

求芽

朝子

賢子

和夫

郁夫

美智子

義昭

北舟

洋志

満洲夫

克己

野鶴

節子

麗

星雨

満作

高志

満ち足りて今日の夕日に染められる

ひしひしと地球が軋む音がする

芸術の秋です若冲とデート

みの虫はきつとブランコ好きだろな

ヤンバルの赤土に目がむき出しに

川柳塔なら

大久保眞澄報

手造りの椅子で新手を模索する

手造りの恋ですプラトニックです

もう間近産衣編む手が早くなる

手造りの椅子で老後の策を練る

三角も罰も厭です丸が好き

枯れた木にもしや縁と水をやる

手作りもいいが外食もつと好き

千年の歴史をこねる奈良の墨

子供達丸の数見て競い合い

雑音を吸い込む満月の魔法

無器用で何も出来ぬに口達者

あの時の時間のままで動かない

円いから三角四角寄つてくる

年寄りか丸くなつたりするもんか

ころころと笑い上戸が座を丸く

同類を壊しヒト科が退化する

喚き付かれ合併話水の泡

ふるりの絆壊れて風ばかり

九条を壊し改憲一直線

花の裏知つて壊れた恋心

たもつ

縣作

一步

勝弘

正

ふりこ

柳弘

敬子

惠美子

甚之市

博一

文聡

國治

おたか

美智子

賛郎

盛隆

和夫

眞澄

萌子

妙

貫一

辰雄

紀雄

將文

意気込みを打ち砕かれた日の歩幅
半壊の夫婦の絆もどす旅
一言で心壊して仲間割れ
エゴ一人笑いの渦をぶち壊し
賽銭の相場知りた神頼み
神父かて耳栓ほしい時もある
まほろばの神話の里で神と住む
神を世に送った神が悔いている
棚田打つ父の背中バイブルに
神前の誓いの何と脆いこと
神人も信じたくなる空の青
不埒です困ったときの神頼み

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

膝ボンの言葉に出合う句のまつり
叩いたらショックで喋りだすラジオ
幸せを夢見た出会い夢のまま
天を舞う龍の姿やいなし雲
好きなんだ意地を張ってる君の顔
孫帰宅修学旅行全部雨
しがらみの鱗を捨てて楽になる
母の腕屑松茸で土瓶蒸し
骨董品目からうろこの価値を知る
家出とはショック療法効き過ぎた
脳トレに通う川柳老いざかり
かばう母通う心に愛を知る
幸せは忘れ上手に年重ね

完次 優 崇明 比呂志 史郎 恭昌 富子 良一 成子 理恵 柁子 勝弘

旅立ちの前に功德を積んでおく
晩学へ目からうろこの雨あられ
街歩き妻の速度に追いつけぬ
心通うひと一人いて青い空
ご自分をうるこでまとう固い人
家系図に僕の名前が見当たらぬ
ヒント一つすっきり謎が解けました
心音を通わす母と子の命
幸せにする約束はどうしたの
どん底で知ったごめんとありがと

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

ラリー実ってリング輝く永久の愛
路地裏に心を満たす秘密基地
赤とんぼ野籠に止まり聞き上手
籠枕離せなかった熱帯夜
年頃のよいしよ口癖喜寿の俺
母の享年満八十が近くなり
喜んでいます足腰丈夫です
爆発の町喜びの優勝旗
古いカゴの底に昔の写真ある
喜びのうずにはまかれる逆転技
満天の星はさながら芸術家
故里は人も景色もナツメロに
優勝に喜び狂うカーブファン
拉致の子も出るに出入れぬ籠の鳥
早朝の雷雨に布団被せられ

博史 和子 和宏 洋次郎 じろう 和郎 美穂 美恵子 光久 武彦

合格の告知感喜の掲看板
満ち足りた人生なんて有り得ない
喜びのたんびに若さと戻す
寝屋川が喜びに沸く豪栄道
満月を愛で熱燗の独り酒
帆を上げ愛満載の夫婦愛
満開の桜も雨に散ってゆく
助けての母の叫びに愛が満ち
豪栄道喜びに沸く寝屋川市

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

人情は流れぬように米を研ぐ
新米のおむすび母の塩加減
古米にもそれなりの味人生も
握り飯避難先には必需品
飽食の残飯となる世の嘆き
粧うも糊も米偏米の国
手短に要点だけは伝えます
スキヤンダル一夜を待たず伝えられ
楽に行こう元はと言えば無一物
このボーチもともと母のゆかた帯
もともととは裸で生れヨイドン
もと男今はお姉で活躍中
白塗りの稚児がはにかむ秋祭り
だんじり祭りがのないよう祈ります
妻急逝言いたい事があつたのに

美佐子 郁子 桂子 長一 守啓 黒兎 久子 正子 勝 奈津子 信男 柳童 順子 春代 堅坊

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

三年目栗飯三度御仏に

ゆるゆると違いを論す夫の声

誕生日あなただの為に栗をむく

栗ご飯匂う仏間に薔薇の花

権力に背いて案山子立っている

皆違う箱を抱えて詰める夢

老の尻叩いて無理をさせている

洗皮がとれた顔だなく笑う

胸の奥化石となった花がある

皮膚の色違っている五つの輪

跡石は先祖の化石だと思ふ

手綱持つと栗毛の馬が嘶いた

恐竜の宴の後を見る化石

山茶花が一輪咲いた違い棚

背いても二人の春を守り抜く

真実を静かに化石語りだす

風評に背く人の目心の目

メモ書きもあてには出来ぬ年となり

背いたの後味濁すあかね雲

化石掘る地球の底を耕して

栗の実が弾ける頃か初孫は

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

川柳茶はしら(愛知)

関本かつ子報

我が家では稼ぎ頭が失業だ
稼ぎなく節約するを日課とす

瑞子
玲子

レギュラーへただ黙々と汗を積み
大雑把な人でハラハラさせられる
真夏日も仕事探しの黒スーツ

美千代
まみ子

アルバイト学資を稼ぐ苦学生
昼も夜も働き稼ぐなぜ貧乏
稼ぐより消費押さえた老いの日々
袋持参ポイントカード点稼ぐ
年金に頼り稼がず居候

風露
由紀子
節子
けいこ
康子

台風がケアは良いかと問うて来る
ケアホーム経由で不老寿の国へ
崇られた国になったかケアが要る
脳のケア笑い歌って若返り
金無しはケアハウスにも行けぬらし
言い過ぎてあわてるケア「愛してる」
DNAたどって行けばヒミコの子
先祖には悪いが五代目で終わり
共同で先祖の墓を守りたい
米作り太一車と来た先祖
ぬくもりを先祖にもらい生きている
墓石が遠い先祖と結びつけ
生まれるも死ぬるも神に操られ
一人っ子操る術も不馴れママ
年重ね夫を操る骨おほえ
一合のお酒で足が操られ
千の風やがて台風先祖たち

石花菜
次男
紀美恵
醉芙蓉
野蒜
雄大
鬼一
英子
祐子
美知江
茂夫
萩江
智恵子
龍枝
重忠
照彦

浅漬けに自信が有って太る秋
少しづつ汗の量だけ付く自信
蕃敵の自信へし折る捨てた石
山坂にそれ相応の金が要る
掴むネタ無茶苦茶早い地獄耳
天国への道を教える古い師
窓覆うごうや透かして見る空の
又雨か夏の日照りに欲しかった
風去って見上げて祈る阿蘇の空
母は海家族見守る父は空

清乃
弘光
淳司
正子
一彌
克三
悦夫
和代
久美子

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

中身より高いブランド空財布
アバウトな施設造りで税を喰う
役所から届く見たくもない封書

雅美
三樹夫
かつ子

長柳会(大阪)

辻村

ヒロ報

かくれんぼは体力気力出たおいで
裏庭の鈴虫奏で月見酒
診察でデーター眺めてはは笑みが
今日何をしたかと自問あせる日日
はにかんで自信無さそなおさげ髪
年金日立ち昇る湯気のれん越し
タイミング風が教える衣替え
稲穂垂れ昔の教え染みる秋
寂聴の法話に道を教えられ
くせつ毛と膝が教える空模様

洋二
マサ
旅人
由夏
光弘
隆彦
三和子
幸子
ともこ

没にした選者を睨む自信作
人一倍どりよく努力の自信作

寂れゆく気力体力口騒ぐ
好きなら飲むなら飲めと健診書

崩れゆく脳回避する術教えよう
足るを知る暮らしに引いた薄い紅

この世では明かせぬデータ少しある
懸命に生きた自信の笑い皺

八尾市民柳会(大阪) 土田 欣之報

油断から蟻の一穴砂の城

体重計また故障だと妻の嘘

白昼夢あなたと共に時止まる

飲み放題体調崩し救急車

芯のある男背骨にブレが無い

鶏冠な姿で相手威圧する

証人喚問になると体調を崩す

秋最中わたしの水が流れ出す

憲法の芯を抜く草の声

空照らす鶏冠石の煙し銀

黒は黒硬骨漢のぶれぬ芯

気散じに命を提げてあの世まで

臍の緒が取れて人間仲間入り

難産の句に消しゴムの角がとれ

張り付いた自我を削って輪に入る
手間暇をかけ頑を崩す酒

淳司 靖博 辰男 直樹 和代 和子 正美 孝代 欣之 耀一 両文 清峰 壽峰 安男 紀雄 常男 朋子 仁恵 高鷺 千里 慶子 欣之

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

居酒屋で口説かれた役重すぎる
心許せる友を数えてよい眠り

肩の荷はおろしておこう米寿くる
老いたかな弱気を誘う肉ばなれ

追いついた時から風に追われだす
大きな秋山一面が燃えていた

オリンピック終って何か物足りぬ
いっぱい言ったごめんさいとありがと

頭痛肩こり素直になってから治る
うつくしい恋ときめきの紅珊瑚

年毎に搔けない背中広くなり
恋の字が書けないままに春が過ぎ

今いち度恋の衣をまといたいし
生きてこそ楽しい趣味と戯れる

やさしさの裏は気づかぬふりをする
恋恋と何度言っても恋人居ない

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

生煮えは嫌だ命の火をあおる
物理学者人のやらない無駄をする

鳥たちも喜んでくれ木守り柿
夜明けまで働く非正規の時給

駅売りの牛乳飲んで夜勤明け
豊稜をよるこぶ石榴弾けている

よく寝たら朝が元気に駆け出した

敏子 浩子 一志 紅絵 俊雄 茶助 真理子

けものみち熱い心で突き進む
収穫の汗に涼風心地よい

相談に乗ったらずる引つ込まれ
男は後妻業に氣いつけや

冤罪は不幸だけでは語れない
朝早く目覚める齢で要る昼寝

豊稜の稲田になびく黄金波
勢いに乗ってはみたが夢消える

子の蝶実り絆が太くなる
環状線目を覚ましたら乗った駅

良いお茶だゆつくり飲みと茶柱が
青年と同じだ俺の血は熱い

収穫は貰う笑顔のボランティア
寒暖の差へ老体のうろたえる

マスコミが解散風を吹かしてる
今シーズン収穫見えぬタイガース

自負があるのだから見得を切る野菜
熱っぽく未来を語る内定書

お似合いと上手に乗せてくる売り子
旬のない四季に逆らうハウス物

待ちわびる全面廃炉への夜明け
玉乗りのまま原発再稼働

シマ子 ひろ介 武 かつ美 冬ト 康信 壽峰 一文 高鷺 篤 忠昭 秀夫 堅坊 朝雄 和之 善之 寿子 たもつ 栄子 福貴子 満知子 のぶ久 紀乃 穩夫 克己 久美子 廣子

豊作で鼻歌が乗るコンバイン

哲男

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

宏造報

ひっそりと息をひそめる自然界

敦子

放つとけば自然に治る恋の傷

茂

ふる里の川に言いたいことが増え

武臣

秋初め積んでる本を読みはじめ

じろう

ブライドの仮面脱げない男はん

文香

生きる道今も本屋で探してる

哲子

あかね雲たのしい今日をありがとう

いわゑ

乗り越える壁があるから頑張れる

武彦

あんななら百まで生きると言われま

哲男

信念は曲げずびんびん夢無限

わこ

凍えた手やっと包んでくれました

ひとみ

うろこ落ち豪華道が抱く賜杯

和宏

びんびんとしてはりまっせうちの人

千代

新都知事蜂の巣つく如の日々

正彦

男性がいないと売れぬ化粧品

美津子

許せないお酒のせいにする男

宏造

戦いを終えた男の眼に銀河

一徳

鼻唄が自然に出ます露天風呂

正和

柿の実が色づいたのに医者通い

恭子

抱きしめるみぞれ混りのこの出合い

晶子

大往生白寿の母に乾杯を

秋果

父逝って母は男になりました

キヨミ

クラス会出席ですが生きてます

章子

いつまでも老母の前では飢えた子に
足並みを合わせて歩く思いやり
だらけないようにスパイス持ち歩く
びんびんの論吉で買った宝くじ
朝一番の光を浴びてやる気出る
群れている雑魚も自然を嗅ぎわけ
欠点を悔しがる子は見込みある
栗ごはん秋の扉が開いたよ
煮え切らぬ男に飲ますレモンティー
旧姓に自然に戻るクラス会
コーラスは高い音ほど背筋のび

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

レコードのアナログの味捨て難し

英旺

二日酔論吉が二三枚多い

肇

どっぷりと核信仰に浸る国

求芽

野仏へ経を唱える曼珠沙華

歌留多

鳥はよく知っており甘ひ柿

美智代

ふたり一緒に雲の絨毯から落ちる

葉子

論点をばかさぬ為の多色刷り

きらり

一歩引いて苦手は今はいい味方

武彦

澄み渡る秋空夢のふたつみつ

ヨシエ

どっぷりと幸せ色の夢を見る

雀舎

世の中はばやけて見えた方が楽

真理子

どっぷりの平和の中にある不安

美佐子

琴線と涙腺ゆるむ老いの情

健二

孫自慢始まるそと席はずす

(永) 玲子

減塩食はやけた味に慣らされる
子丑寅かぞえてですか満ですか
ぜいたくは満月を見る露天風呂
蒼天がうんどう会を盛り上げる
若冲にどっぷり嵌り猫を描く
快樂にはまればもはや抜けられぬ
国会は気ままにどっぷりの多数
吾輩の猫も明治の気骨持つ
どっぷりの腹立ちほぐすノクターン
還暦で出来た苦手の逆上がり
老二人論点はけて恙無し
来し方のしみじみ滲む古手帳

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

怪獣の卵の頃に来た女房

道唱

遅れるとウチの金魚が腹空かす

照彦

演歌には瘦せた女がいらしい

楓花

だらしない人が遅れてやって来る

芳山

感情はオートマチック表情へ

くにこ

無免許の時代もあった酒タバコ

紀の治

朝刊が遅い陽はまだ昇らない

雄大

アナログの時代遅れのじじとばば

石花菜

枝豆は食べるがビールは飲めない

けいこ

反応が遅れる脳になりました

風露

苛立ちの心に怪獣住みついた

由紀子

カラオケで褒められるのは「セリフ」だけ

幸子

遅れるな早くしろとで八十年

昭子

— 111 —

赤とんぼいつの間にやら秋を舞う

博泉

黄泉の旅妻と一緒に往くと言ふ

仁

妻への不満モグラたいてうさ晴らし

蕉

旅行好きアバンチュールも数知れず

あさ子

先ずオモチャ教育ママが仕切りだす

忠央

気晴らしに袴つけて作句する

修

黄泉からの催促状に来る焦り

高鷺

戸惑うて文学賞に聴き惚れる

一

生き方を変えず終章飾りたい

弘委智

旅ゆけば見たり聞いたり知恵がつく

高志

忘れたい旅が逢いたい旅になる

郁夫

親離れオモチャの箱だけ残されて

弘一

白地図を片手に巣立つ竹とんぼ

洋

土団子丸虫も居たおもちや箱

かすみ

永い春催促したういプロポーズ

朝子

大自然に抱かれゆつたり露天風呂

賢子

鉦替え秋のおとずれ待つせーたー

美江

銀河鉄道の終着駅で待つ亡父

亜成

コスモスのルーツは海を越えてくる

恵子

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

崩壊した庭に梅の実たわわなり

舞夢

正直に実話を話す恥しき

公平

実はねで始まるやっかいな話

眞澄

こつこつと実験重ねノーベル賞

富子

爆買の客来ないかと小商人

恭昌

客離れ歯止めの効かぬ招き猫

弘子

商売抜きそんな夫婦に日が当る

蕉子

暑いときは暑く商人ほつとする

昭

商売が下手だと顔に書いてある

日の出

薬局で米もお菓子も売る世相

志華子

えべっさんの顔で商売してはる

良子

花一輪愛想いい店いつも買う

照子

意外にも商売上手の石頭

桃花

トラファン怒号飛び交う甲子園

善之

勝負忘れ応援一途虎ファン

敬子

タイガースほどにだんなを愛せたら

理恵

後期だがまだまだ弾むベン先の

満作

春樹より僕には身近ボブデイルン

和夫

食欲の秋に厳しい野菜高

浩二

枯れ葉舞う我が行く末を重ね見る

希久子

階段を上って下りて秋の暮

義

つくつくぼうし夏に未練と鳴く彼岸

げんえい

詫び方がともスマート叱れない

正雄

嬉し日の酒は飲みすぎ咎めまい

楓楽

友達のはげまし嬉し句会朝

みつ子

朝刊の美談嬉しい茶が旨い

捷也

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

みぞ汁にパンをよるこぶ母でした

洋子

天城越え唄って耐えた恋はるか

紀恵

主婦パワー前へまえへとバーゲンへ

柳明

カラオケも踊りも集う秋祭り

雪菜

ライバルをのり越えてゆく男道

初音

三つ指のロボット嫁に感激し

富夫

お越しやす言つてみたいな京言葉

紀華

父よりもお酒が強くなりました

芳香

若い娘になんやかんやと話しかけ

健二

顔面で着地ししばらく死んだ真似

花門

縄のれん越すほど気前よく注ぐ

奮水

山越した頬にほんのり紅色

ヨシエ

サンドイッチとビールが美味い紅葉狩り

比ろ志

後ろから小さくなった影を踏む

和子

振り向かずここから前へ第一歩

りこ

傘寿越え目指す米寿も指呼のうち

純

前もってウコンを飲んで飲み放題

まつお

鏡よ鏡妻にキレイと言ったため

宏造

近況は風の便りで聞いている

美龍

前置きで言いたい事がみな判り

見清

パトカーにどけどけどけと救急車

祐康

時々若くないこと忘れまます

哲男

パンを食べ高くつきます米農家

つな子

前屈み丸い背中に負い過去

歌留多

もう若くないぞと膝が出すサイン

かずお

転けなやと背中し声をかけられる

耕治

呑んでから気がつく明日は健診日

正和

もう過去になっていくんだこの恋も

ひとみ

のびのびとした奥さんがいて平和

靖鬼

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

家からは五分飲み屋とお医者さん

花門

五つ六つてまり縄跳びかくれんば
旅に出て五指で拘っている入り日
シヤネルの5邪魔をしているサロンパス
五つ子のその後知りた文春よ
江戸へ来て投句楽しむ五年目に
よく喋る妻がいるので僕無口
無口だが居なくてはならぬ人がいる
借りてきた猫も飲ませりやよく喋る
棺の母やと無口になりました
おお怖い妻が無口になっている
旨いならうまいと言ってお父さん
むしろれた鳥にゴメンと羽根布団
十三夜火の化身かも知れぬ月
化けそこなつたか座席を譲られる
留学で大化けをした子の帰国
お化けには決してならぬ流れ星
母さんは二度童子にと化けました
日本女性魔女にはなれぬ割烹着
悩むのはやめて踏み出す秋の天
川柳は辞めぬ貴方がいる限り
紐つけて賽銭箱へカブトムシ
いい人をやめてストレスから抜ける
やめてやめてと言いつつボタン外して
婆ちゃんが婚活すると言いだした
川柳をやめると後は呆けるだけ
イグノーベルのメダルを取った股のぞき
本当のメダル触ったことがない

淑子 美籠 千賀子 順子 一良 一子 好文 祐康 キヨミ 勝弘 忠 晶子 恭子 敏夫 永筆 千津子 正和 紀華 朝夫 哲平 修子 和子 宏造 野薫 堅坊 歳子

第8回 新春たましま川柳大会

と き 平成29年1月7日(土曜日)

開場 午前10時・投句締切 午前11時30分

ところ 浅口市市民会館金光(旧金光町民会館)

浅口市金光町占見新田790-1

電話 0865-42-2845

(山陽本線 金光駅より東へ徒歩5分)

参加費 2000円

兼題と選者 (各題2句)

「他人」	永見 心咲	選
「人情」	田辺与志魚	選
「情熱」	部 帆子	選
「安心」	高木 勇三	選
「心変り」	黒田るみ子	選
「変身」	新家 完司	選
○当日席題	北川 拓治	選

欠席投句 1000円(小為替・発表誌呈)

投句締切 12月25日

投句用紙(コピー可)に各題2句・住所・
氏名・電話番号(必須)

投句料を添えてお送りください。

投句先・問合せ先

〒719-0104

浅口市金光町占見新田1325-10

北川 拓治 電話0865-42-6039

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

百分の一秒銀の悔し泣き
小旅行でしたゴトゴト三田まで
死ぬかいな未だ残ってる株預金
定年にエプロン買ってくれた妻
まだ少し期待している底力
婆ちゃんが用心棒にする諭吉
長生きして人間らしくなりました

光久 敏子 健二 雅尚 ひとみ 哲男 たもつ 重忠 茶子 公子

柳友のグループほろり泣かせです
ひとすじの涙に心折れました
子の帰省笑い袋が忙しい
縄梯子踏みはずしたら下は海
減塩の名目楯に引かぬ妻
鎮魂の思い千羽の鶴を折る
姑に折れて意志まで無視される
お袋に天から頭撫でられる
注意してそれでも転ぶ五ミリの差
注意していてもミサイル飛んで来る
遠回りしたがやっぱ折れておく
折れそうなんだめるお茶入れる

節弘 雅敏 幸菖 た美 蟹天 一 一
子子女子安子ぬ恵子郎翔瑤粹

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火) 13時30分締切 棒・悟る・濃い	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
南 大 阪 川 柳 会	17日(土) 13時開場 駄目押し・狭い・弁当 ねちねち	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
岸 和 田 川 柳 会	17日(土) 12時30分開場 平和・真似る・あたふた ラッキー	岸和田市立福祉総合センター 南海電車「岸和田」駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
和 歌 山 三 幸 柳 会	17日(土) 12時30分開場 夜・輝く・暮れ	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 みちのく	17日(土) 17時締切 染みる・じたばた・銀世界	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」1F 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 1F 0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	18日(日) 12時締切 口先・裏目・笑顔・自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	18日(日) 14時締切 鉄・ホテル・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川 柳 ふうもん 吟 社	11時30分締切 18日(日) 没句川柳供養大会 しがらみ・エンド・大地・引導・風を読む 予言・愛と憎・敗者復活吟	日本海新聞ビル 5F 大ホール 詳細は12月号100ページ参照 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
豊 中 もくせい 川 柳 会	19日(月) 13時45分締切 スイッチ・許す・惜しい 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	20日(火) 13時30分締切 井・ミラクル・消える とんとん・自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール 6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	21日(水) 14時締切 席題・目(互選)	立花公民館 (尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
はびきの 市 民 会 川 柳	25日(日) 14時締切 鶏・やあやあ・ソプラノ	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
京 都 塔 の 会	26日(月) 14時締切 デザイン・だるい・豆	集合場所: 烏丸丸太町ハートピア京都(月例会場)前 地下鉄「丸太町」駅⑤番出口エレベーター 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川 柳 塔 すみよし	休 会	住吉区民センター 〒558-0054 大阪府住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	1日(木) 14時締切 片づけ・休む・終	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城北会 川柳会	3日(土) 14時締切 忘れる・自信・うきうき 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	3日(土) 14時締切 終・熱い・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉会 川柳会	3日(土) 14時締切 夢・いじましい・減る	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ社 吟	3日(土) 13時30分締切 読む・安心・寒い・嫌(イヤ)	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 住む・影・可憐・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	10日(土) 14時締切 舞台・列・進む	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳塔 打　　吹	10日(土) 14時締切 節約・塗る・しっとり	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	11日(日) 14時締切 煮沸・ぐったり・睨む・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　　社	11日(日) 13時開場 兼 題=忘れる・見送る・程程(ほどほど) 課題吟=未来	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 無事・埋める・ブラボー 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳塔 さ　　かい	13日(火) 13時開場 走る・骨・折句：えのき	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 覗く・山・カード・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼

柳界展望

★第68回「大阪川柳大会」は10月5日開催。同人成績。

秀句 三宅 保州

★平成28夏龍ヶ崎川柳誌上大会「たつ」。同人成績。

三才 両川 洋々

ドナー登録した内臓だ酒を断つ

三才 永見 心咲

いのち断つなんて傲慢すぎないか

三才 石田ひろ子

岐路に立つ背中を押した子の寝顔

三才 石田ひろ子

青空とメールしている立葵

★第14回「川柳マガジン文学賞」。同人成績。

大賞 牧野 芳光

諦めたものが大きく見えてくる (他九句)

準賞 居谷真理子

霧ですとメールを打って夜明け前 (他九句)

大賞 酒井 紀華

日本女性魔女にはなれぬ割烹着

大賞 山口 光久

百分の一秒銀の悔し泣き

▽柳界動向△

★川柳藤井寺(代表・高田美代子さん)は、藤井寺市制50周年にあたり感謝状を授与された。

▽ご芳志御礼△

○村上玄也さんより「川柳塔まつり」お祝いとして金一封拝受。

○小谷小雪さんより「川柳塔まつり」お祝いとして金一封拝受。

▽計 報△

■藤岡ヒデコ(同人・府中市)さんは9月27日逝去。享年84。

■宮園射月芳(参与・貝塚市)さんは10月1日逝去。享年87。

▽お詫びして訂正△

▼11月号P109上段5行目、静江↓静枝。

▽削 除△

▼11月号P50上段7行目「賛成と言うだけに出る委員会」は、本人の申し出により削除。

▽新誌友紹介△

倉吉市 伊藤 昭子

紹介者 新家 完司

神戸市 前川千津子

紹介者 長浜 美籠

三木市 山口ヨシエ

紹介者 長浜 美籠

篠山市

紹介者

美作市

大杉 敏夫

白河市

鈴木 武司

池田市

太田 省三

常任理事会

11月7日(金)

第5回春の誌上大会について

平成30年度常任理事会・本社句会の日程について

③95周年「まつり」の企画検討

④定例確認事項

次回12月7日(木)AM10時

長澤 善弘

酒井 健二

大杉 敏夫

小林 妻子

鈴木 武司

太田 省三

第5回春の誌上大会について

平成30年度常任理事会・本社句会の日程について

③95周年「まつり」の企画検討

④定例確認事項

次回12月7日(木)AM10時

長澤 善弘

酒井 健二

大杉 敏夫

小林 妻子

鈴木 武司

太田 省三

松本 はるみ

菅田 かつ子

新同人紹介

高野山川柳塔碑合祀報告



法要参加の方々

十一月十二日(土)に第二十八回目の塔碑合祀法要を実施致しました。幸いにも当日の高野山は早朝こそ摂氏二度とのものでありましたが、法要の始まる昼時には、小春日和の好天となり、無事法要を営むことが出来ました。

合祀対象者は後記の八名様で、そのうち尼崎市の春城様のご遺族一名とご友人、また水谷様のご参加を頂きました。

川柳塔社か

らは小島主幹、新家庭理事長、板尾相談役、など十名の参加を得、総勢十四名での法要となりました。

法要に先立ち小島主幹から故人への哀悼と句碑を前に故人を思い、お参りできることは心の安らぐことでもありますとのお話しを頂きました。

読経の後、お坊様からは二十八回途切れることなく、このようにお参り頂くことを故人も、きっと喜ばれているとお話を頂きました。厳かな中にも温まる思いの溢れた合祀でありました。

法要後の直会は新家庭理事長の献杯に始まり歓談と故人様を偲ぶ話題で終始し、和やかな中で散会を迎えました。

〈島田誠一記〉

合祀対象者

西内 朋月 様 (川西市)
 西山 隆盛 様 (南河内郡)
 山崎 君子 様 (大阪市)
 妻谷 重風 様 (寝屋川市)
 水谷 正子 様 (河内長野市)
 井上 桂作 様 (守口市)
 小野 多留 様 (横浜市)
 春城 年代 様 (尼崎市)

編集後記

★銃を執る青春にして恋
ありき 薫風

★蓋を開けたら世界中が
アツと驚いたノーベル文
学賞。ハルキスト（村上
春樹ファン）の期待をよ
そに、受賞者はボブ・デ
イラン。七五歳。私の青
春を彩ったアメリカのシ
ンガー・ソングライター。
フォークの神様と呼ばれ
一九六三年に発表された
「風に吹かれて」は世界
的ベストセラーに。

★どれほど銃弾が放たれ
たら／戦いをやめるのか
／その答えは風に吹かれ
ている／当時ベトナム戦
争真っ只中だった。メッ
セジジ性の強い文学性
のある歌詞が評価されたと
聞く。また「文学の概念
を広げよう」とするス
エーデン・アカデミーの
意志を感じるという声
も・・・一方で「作家
を侮辱するものだ」と怒
りを露わにする向きも。
★ノーベル文学賞は小説
家・劇作家・詩人に限ら
れ、歌手の受賞は初めて。
毎年候補にあがる村上春
樹は六五歳、「まだ若す
ぎる」「作品にメッセ
ジ性がない」との声も
あったとか。一〇〇冊の
文学書よりも一曲の歌詞
に、インパクトがあった
ということだろうか。

★熊本震災から11月14
日で7カ月。今なお仮設住
宅で暮らす人たちも多
い。そんな中、10月21日、
鳥取県中部を震源とする
震度6弱の地震が発生。
11月5日（日）に開催予
定だった第40回鳥取県川
柳大会は、会場の倉吉末
来中心ホールが壊れたた
め、急遽中止となった。

鳥取県には同人・誌友の
方も多い。被害に遭われ
た皆様に謹んでお見舞い
申し上げます。

竹原の水

ひとこと

九月三日、四日と竹原川柳会
六十周年記念川柳大会に参加。
三十六名の方々とバスで新大阪を
出発。途中、尾道千光寺の路郎句
碑見学となった。私は五年前の大
会参加時に見学しているの、遠
慮して喫茶店で待つことになっ
た。

ホテル到着後、早速温泉に浸か
り、旅ごころを満喫。懇親宴では
皆様のカラオケに酔うたか、疲れ

たのか少し熱っぽくなった。部屋
に戻り水でタオルを濡らし、絞つ
て驚いた。水がとても冷たい。飲
むと美味しくて何度も飲んだり、
身を冷やしたり、心地よい。
翌日フロントで聞く、井戸水
とのことだった。それで竹原のお
酒も美味しいのだと納得。参加者
の皆様を気遣って頂いて、美味
しいお水のお陰で大会にも参加で
き、楽しい旅でした。

（宮崎シマ子）

★東京築地市場や東京五
輪のニュースばかりが派
手に取りざたされている
が、東北や熊本、今回の
鳥取の震災の被災者の声
を、政府もメディアも拘
いあげて下さることを期
待してやまない。

（朱夏）

□川柳塔誌55号（S49年
6月号）から、現小島蘭
幸主幹の「一分間の柳
論」より転載。「私が川柳
を始めたのは十六歳の時
きなのを一枚あげるから
持って帰りたい」とい
われて、十数枚の古い短冊
の中から頂いたのが
酒とろりとろり大空の
心かも 路郎

（勝弘）

檸檬抄投句用紙

「チクチク」(12月15日締切)

2月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B		A	
地名		地名	
市都 道府		市都 道府	
姓 雅号		姓 雅号	

切らないで下さい

きりとせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (2句) 新家完司選
檸檬抄「チクチク」 (2句) 北野哲男共選
安土理恵選
インスピレーション・ナビ (2句) 大西泰世選
一路集 (2句) 「防ぐ」 西口いゝゑ選
「変身」 丹下凱夫選
初歩教室 「人形 (3句) 居谷真理子担当

3月号
檸檬抄「手頃」
一路集「わざわざ」「ブーム」
初歩教室「やれやれ」

本社12月句会

とき 12月7日(水) 13時開場・13時40分締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
おはなし 「川柳塔まつり」あれこれ 電06・6772・1441
天王寺区石ヶ辻町19-12
兼題 「ちぎる」 山口久久選
「どんどん」 北村賢子選
「真」 山岡篤選
「見物」 松岡篤選
「気分」 河内天笑選
「見物」 小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円 (各題2句以内、切手可)

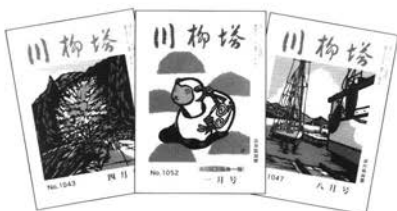
本社1月句会
1月6日(金) 午後1時から
兼題 「父」「マーク」「触れる」
「余裕」「めでたい」

第35年度 夜市川柳募集

第7回「紛れる」 岩田明子選
ハガキに3句 12月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一六年(平成二十八年)十二月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (〇六) 六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四一 九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選
応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、
氏名、電話番号を明記してください。

発表
入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
本紙4月号にて発表いたします。

締切り
2017年1月31日(当日消印有効)
投句先
〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわって
六十二年

ごま



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水筋寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>